

アル・ハマザーニー著『マカーマート』(1)

訳注 堀内 勝*

アル・ハマザーニーについて

1 著者の生涯

アル・ハマザーニー(アラビア語読みではハマダーニー Hamadānī、ここではペルシャ語読みを通す)のことであるが、本名は Abū al-Faḍl Aḥmad ibn al-Ḥusayn ibn Yaḥyā ibn Saʿīd ibn Bishr al-Hamadhānī と言った。即ち彼の名は、アフマド Aḥmad、父の名はフサイン Ḥusayn、祖父の名はヤフヤー Yaḥyā で、クンヤ(尊称)はアブ・ル・ファドル Abū al-Faḍl といった。またヤーカートによれば、彼には二人の兄弟がいた。一人はアブー・サアド Abū Saʿd (Saʿīd と同) ibn al-Ṣaffār で、もう一人は法官になったアブドッラー Abū Muḥammad ʿAbdullāh ibn al-Ḥusayn al-Nīsābūrī であった。また姉か妹かがおり、彼の『書簡集』の中に、その彼女の息子に対して「お前が学問を目指す限りは私の息子である。それは学校がお前の場所であるし、インク壺がお前の遊び道具であるし、書物がお前の友達である如くである。それでもしお前が学問の出来が良くないとしたら、学問を目指すべき者ではないと看做して、他の人をお前の小父^{おじ}とすべきである」、と書き送っている。家族への愛情と己の血の通った者への期待感の一端が伺えよう。

イランの西北部の都市ハマザン Hamadhān (アラビア語読みではハマダーン Hamadān) に、イスラム暦 358 年(西暦 967 年)第2 ジュマダー月 13 日に生れた。ハマザンはザグロス山脈が東に傾斜する丘陵地、標高 1800 メートルの高地にある。地理的には交通の要衝を占めていた。東西を結ぶ幹線として西はバグダードに、東はラッイを経てホラーサーン、中央アジアに通ずる、いわゆる「王の道」上に位置していた。さらに北へはカズウィーンを経てカスピ海に、タブリーズを経てコーカサス方面へと通じていた。そして西にはほぼ富士山と同じ標高のあるアルヴァンド(3572m)の山懷に抱かれている。この山は『マカーマート』の中にも大はら吹き話の一例として引き合いに出しており、彼の郷愁のほどが知れる；「もしそなたが脚の一方をアルワンド(=アルヴァンド)に置き、他方の脚をドゥマーワンド(テヘラン北方のエルブルズ山脈の最高峰、標高 5671m 富士山に似て優美に聳^{そび}える)に置いたとしたなら、また片手で雲上の天使の弓(=虹)を掴み、他方の手で天使たちの雲衣^すを梳くとしたならば、なんと汝は羊毛梳き屋(hallāj)に過ぎないではないか！」[『マカーマート』第43話、拙訳]。

生地ハマザン。この町は愚かしさとケチさとで辺りに聞こえる町であった、ちょうどシリアのハマがそうであったように(後者ハマは、後輩のアル・ハリリーによってどれほどの愚かしさなのか、そこに出かけた設定で、彼の『マカーマート』第46話によってその授業風景が描写されている)。こちらアル・ハマザーニーの方はその悪評を自ら認めて、故郷のハマザンを呪いに近い批判の詩で記している[Yāqūt: Buldān V417]。しかし、この一節はハマザン在住の先人の詩人イブン・フスル Abū al-ʿAlā Muḥammad ibn Ḥusul の詩を引用している、と言うのが大方の意見である：

ハマザン、そは我にとり故郷 そを誇りには思う**

hamadhān lī baladun aqūlu bi-faḍli-hi

* 中部大学国際関係学部 教授

** アラビア語の転写は原則として『岩波イスラーム辞典』にならうが、サジュウや詩の転写に関しては、語末母音、ターマルブータ、定冠詞アルなどを韻律やリエゾンを明確にする形で転写した。

されどかの町は、あらゆる町の中で醜きは最悪

lākinna-hu min aqbaḥi l-buldān

若者と言えども醜悪さは老人と変わらず

ṣibyāna-hu fī l-qabḥi mithla shuyūkha-hu

その老人の理性はと言えば若者の如し

wa-shuyūkha-hu fī l-‘aqli ka-ṣ-ṣibyān

また『書簡集』の中で、他のハマザーンの詩人の詩句を引用している：

我を左程に非難するなかれ 我が知性の余りにお粗末と

lā talum-nī ‘alā rakākati ‘aqlī

汝納得することならん、我ハマザーンの出なれば

in tayaqqanta anna-nī hamadhānī

師のイブン・ファーリスの分析するところ、ハマザーンは伝染性の病気の感染率が高く、また脳をやられる率が高いことがそうした風評を生む結果となったのであろうと述べている。また「如何して私はこの町に対して真摯の礼拝を捧げられないのであろうか、私がかつて学んだすべてを忘却させてしまう幸運を与えてくれているこの町に？」と皮肉を交えて述べている。

しかしアル・ハマザーニーもさすがに己の故郷が悪評に晒されるのは耐え難かったのであろう。自作のマカーマの中に郷土愛を露出させている。第9話ジュルジャンのマカーマの中で、貧窮の主人公が流浪の果てにこの町に辿り着くと、持て成し好き、寛大者の多い温かい町として紹介し、持て成しの器^{うつわ}の最も大きな人の許に頼りとする。しかし余りの接待と贈与品にハマザーンを抜け出してしまおうと言う設定で、このモチーフの中に我が故郷の町の名誉挽回の意図も籠めていたことであらう。

ハマザーンの風評はどうであれ、生まれ育つ段階ではアル・ハマザーニーの^{あず}与かり知らぬこと。この生地が幼児から青年に至るまで教育を受ける。彼はハーフィズ(hāfīz コーラン暗誦者)の敬称が冠せられている。ということは『コーラン』を暗唱していたのであるが、恐らくかつての裕福な一般家庭がそうであったように、クッターブ(寺子屋)やモスクなどで、あるいはさらに裕福ならば私宅に先生を招いて7歳になって『コーラン』の暗唱を始めたことであらう。そして遅くとも3年をかけて114章の全章を完了していたことであらう。否、暗記力抜群の彼であってみれば、子供の頃からその能力を見せていたことであらうから、予想以上の速さでハトマ(全章読誦)を終えて、周囲を驚かせて、祝福を受けていたことであらう。

アラビア語を母語とする世界から離れており、日常語もペルシャ語であったはずである。にも関わらず、彼のアラビア語は純粹で正確であった。それはかれの出自がアラビア部族の、純粹言語の範となっているタミーム族(タグリブ族説もあり)の出身であって、異国にあってもアラブ居留民社会が作られており、限られた地域や交流によって日常会話もアラビア語社会であったことによる、との説がある。タミーム族は北アラブ・アドナーン系ムダルの直系である。彼の旅先でのアラビア語での諸著作もそうした上流・支配階級へ向けてであったことを考えれば、この説は首肯できよう。

しかし一方では彼はアラブ出ではなく、生粋のハマザーンっ子であって、現地のペルシャ人であった、との説のほうが有力である。彼が父や祖父、家系を誇ったり、言及した記述が欠如していること、それが例証していることになろう。また、彼のバディーウ(驚異振り)のなかに、ペルシャ語からアラビア語へ、逆のアラビア語からペルシャ語への変換を瞬時におこなった、しかも普通の散文だけではなく、韻文も苦も無く、時間をかけることなくやってのけた、という逸話がある。これ

から考えると、日常語はペルシャ語であったろう。そうだとしたら彼のアラビア語習得・習熟・自在さの並はずれた能力は何処から来たのであろうか。恐らく学問を正式に学ぶ段階で師に恵まれたのだ、とされる見解がある。ハマザーン時代の20歳過ぎまで、彼の師の一人には、既に触れた言語学者として高名なイブン・ファールス Abū al-Ḥusayn Aḥmad ibn Fāris ibn Zakariyyā' (395/1004 歿) の名が挙げられている [Yāqūt: I 96]。イブン・ファールスの強い指導と影響力と彼自身の並はずれた能力がその柱となって、純粹で完璧なアラビア語の習得を可能としたのであろう。イブン・ファールス、この師はイラン北東部カズウィーンで生まれ、ハマザーン、バグダードで教育を受ける。ブワイフ朝分立政権ラッイの領主ファフルッダウラ (在位 977 ~ 997) の宰相サーヒブ al-Ṣāhib ibn 'Abbād に招かれ、師として友として仕えることになる。言語学、辞書学、を専門として、アラビア語の文法や言語学に関する著書を残している。中でも二種類の著名な辞書類、その一つは Mujmil fī al-lughāt 『言辞用例集』の表題で知られ、他はパトロンであるサーヒブに献呈した al-Ṣāhibī fī al-lughā である。

またアル・ハマザーニーの師の一人にイーサー・イブン・ヒシャーム 'Isā ibn Hishām なる伝承学者 (muḥaddith) がいた。ハディース (ḥadīth 伝承学) の学者である。この師からハディースを学ぶとき、いつも口頭でハッダサ・ナー (ḥaddatha-nā 誰々は我々に伝えた) で始まる個々の伝承を唱えていたことであろう。ハディースの一つ一つを師が唱え、そして弟子が復唱していたはずである。師のイーサー・イブン・ヒシャーム、この名前はアル・ハマザーニーが文学における新たな分野『マカーマート』の創造に当たって、容易に「語り手」の名前として浮かんできたことであろう。『マカーマート』も伝承される語り物の体裁を整えた。＜伝承＞というキータームが恐らく著者を介して、一方では師のイーサー・イブン・ヒシャームを、他方では『マカーマート』の語り手、即ち伝承者 (rāwī) と結びつけ有契なものとしたことが考えられる。それ故定型化した「マカーマ」の一篇の出だしは、「語り手イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて以下のような話した」(ḥaddatha-nā 'Isā ibn Hishām wa-qāla) という文体の創造に繋がったことは十分考えられることである。この文体はそのまま『マカーマート』の大成者アル・ハリリーに、語り手即ち伝承者の名前を変えただけで継承された。

故郷ハマザーンで受けた教育は、上に述べたアラビア言語学やハディース (伝承学) のみでない。伝統的な教養たるイスラームに基づくキラア (コーラン読誦) 学、修辞学、宗教学、歴史学、法学なども修めたことであろう。キラア学の彼の知識に関して『マカーマート』の中で、「イマーム (導師) がミフラーブ (礼拝方向を示す壁龕^{へきがん}) の方に歩み寄って、コーランの開扉の章を唱えた。それも (選りによって) ハムザの流儀に従って、例の「伸ばし」と「声門閉鎖音」の特徴を十分効かす発声法で」(第10話) とあるように、単に一流派に留まらず、ハムザの流儀 qirā'a Ḥamza だけでなく、正統七読誦すべてに、更には十読誦や十四読誦にまで通じていた可能性があることを明らかにしている。この流派のキラアの特徴がマッダ (母音の伸ばし方) であり、子音で声門閉鎖音であるハムザの強調にあり、などと言うところは、読誦学が音声学でもあることを教えている。

しかし彼の学識者としての教養を万全にしたのは、ペシャワール滞在時、宰相サーヒブの図書館を自由に使える特許を与えられた知的積重ねと、旅及び旅先から得る新情報であったろう。彼の生涯における肩書きをカッハラー Kaḥḥāla から拾って見よう [Kaḥḥāla: I 209, XIII 358]。adīb (文学者)、shā'ir (詩人)、muta'aṣṣib li-ahl al-ḥadīth wa al-sunna (伝承学者を追い求める者) などである。ヤーカートなどは神学派のアシュアリー派に属していたのでは、と記している [Yāqūt: I 95]。

ヤーカートによれば、サアーリビー al-Tha'ālibī はアル・ハマザーニーと同時代人で、接触もあっ

たのであろう、恐らくアル・ハマザーニーの情報に関しては最も詳しく、また人物伝も残している。またヤークートの時代には既にアル・ハマザーニーの伝記は書かれていたようで、師の一人である歴史家シーラワイフ Abū Shijā‘ Shīrawayh ibn Shahrādār がその著者で、そこから引用を行っている[Yāqūt: I 94]。サアーリビーの人物評では、「ハマザーンの偉人(mu‘jiza)で、現世での稀人(nādira al-falak)、若き水星(bakur ‘utārid=若くして知識人として頭角を現す、水星は惑星の中で「知性」を象徴する)、時代の孤高(fard al-dahr)、当代の先人(ghurra al-‘aṣr = ghurra は馬の顔面の白徴=鼻と同じく物事の最初・先頭)である。聡明さ(dhakā’)、機転の速さ(sur‘a al-khāṭir)、天分の恵まれていたこと(sharaf al-ṭab’)、記憶力の明晰さ(ṣafā’ al-dhihn)、精神力の強さ(quwwa al-nafs)、これらの点において並ぶ者はない。また散文の典雅さ(ẓarf, Yāqūtの方ではṭuraf 散文の新奇さ)において、その洗練されていること(milḥ-hu)、文章の斬新さ(ghurar al-naẓm)、その当意即妙さ(nukat-hu)においては一頭地を抜く。様々な驚異と奇抜さの持ち主である」。よく言われていることであるが、未知の詩を一度聞いただけで、最初から最後まで一字も誤りなく復唱して再現できたという。それが50詩行以上にわたっても、前からの復唱はもちろんのこと、後ろからも行毎の再現もやっつけのけることが出来たという。また一度も見たことも読んだこともない書物においても、軽く目を通してだけで4、5ページぐらいならば、一字一句誤ることなく復唱できたということである。創作における独創性は、散文のみではない、詩作においても、書簡を認める^{したた}においても。内容においては斬新であり、章節においても新奇なものを発露させている。しかもその作品に要する時間たるや、多くが数時間とかからないのだ。著作において一作品に集中するというよりは、いくつかの作品を同時並行して作ってゆく多才さも持ち合わせていた。出来上がった作品は、例えば詩行などは多種多様な律格もサジュウも含めた押韻も苦も無く編み込んで行けたし、しかも前から読み上げて行くことはもちろん、後ろから順次前に戻して読み上げ、内容にもいささかの不備も無いということすら遣って退けた。斜め読みの可能な書簡も作り上げたし、時には後ろから読んでゆく文が前からの文の問いかけの解答であったりするものすらあった。散文から詩行に、詩行から散文に意のままであったと言うのも頷けよう。ある文字を抜かして書簡を作り上げるリボグラム(文字落し)、それも単文字でなく複数の文字落しでやっつけのけた。他にも冠詞を一切用いない書簡、コノテーション(共示)を巧みに駆使して、称賛しているとも中傷しているとも受け取れる書簡など、能力が自在にであり、限界が計り知れないほどであった。もちろんこれらの評価は故郷の頃からのものでなく、生涯を通しての評価ではある。

アル・ハマザーニーは多くの学者や商人がそうであったように、彼もまた旅好きであった。時代もまた旅を容易にしていた。十字軍が侵攻する以前の時代、東のイスラム世界はハムダーン朝及びブワイフ朝の安定期で、バックス・イスラミカスのもと、安心して旅行できる状況が作り出されていた。但し東のサーマーン朝は不安定な末期でガズナ朝にとって代われようとしていた。アル・ハマザーニーは小旅行はあったものの22歳になって、遂に380/990年に故郷ハマザーンを後にした。いわゆる「知識を求めての旅」が主眼であったろう。己の名声も高まっていたが狭い一地方のこと、更に広く深く知の欲望が彼を突き動かしたことであろう。彼は二度と故郷に戻ることは無かった。彼が知の探究に向けたのは、アラビア語やイスラム文化の中心である西のアラブ世界ではなかった。東の非アラブ世界を旅したのである。この件に関してはアラビア語の研鑽とも絡めると、未だ解けないアル・ハマザーニーの謎である。またハッジであったか、メッカ巡礼したかどうかに関しては情報が無い。しかし書簡集には、バグダードやバスラなどの文士や遠くエジプトの学者宛の書簡などもあり、そうした不利な点を補っていた面は考えられよう。

足跡が明らかなのは、先ず北東のブワイフ朝の副首都ラッイへ向かったことである。そこはブワイフ朝の分立政権をうち立てたファフルッダウラの宰相であったサーヒブ・イブン・アッバード *Ṣāhib ibn ‘Abbād* のラッイでのサロンが文人を集めていて、知られていた。恐らくハマザーンでの師イブン・ファールリスが招いたか、師を頼ってのことであろう。真偽は確かではないが、サーヒブは宮廷への出入りを許す条件として、若輩の新参者アル・ハマザーニーに対して、ちょっとした試験をしたとされる。ペルシャ語の詩をアラビア語に韻律も整えて移し変えるよう命じたのだ。アル・ハマザーニーはこの移し換えをいとも簡単にやってのけて、宰相の信任を得たらしい。彼はサーヒブの首都ラッイでの彼の宮廷で厚遇を受け、宰相所有の図書館を利用できた。この宮廷付属図書館は宰相サーヒブの文人氣質から古典的著書・資料を集め、その量たるや運搬には400頭のラクダを要したほどであった、とされる。このことはアル・ハマザーニーの才気の上に、知識の蘊蓄を多大に加えることになった。ここに長く留まれば「時の人」として名を馳せたであろうが、不伸説も一方では囁かれてはいるが、一所に留まらない性格は、ラッイから未知と新奇を求めて新たな旅立ちに誘った。なお最初に向かったのはフージスターンのアッラジャーンであったとの説もある。このアッラジャーンはマカーマ第22話で記されており、ジュルジャーン同様繊維の生産地として知られていることが記されている。

次にアル・ハマザーニーの足は北へと向かい、イスラーム世界の北辺地カスピ海南東部ジュルジャーンにラクダの足を跪ずかせた。ここにはシーア派のイスマイル派の社会があった。彼はこの宗派の人々との接触により、啓発されるところ多く、イスラーム正統派の教義以外の考え方、思想、身の処し方を学んだ。特にアブー・サイド *Abū Sa‘īd* (又は *Sa‘īd*) *Muḥammad ibn Maṣṣūr* (410/1019 歿) の許に留まり、多大な影響力を受けた。ここで彼の宗派がイスマイル派に、あるいはより緩やかなシーア派主義に転向したかは定かではない。書簡集の中で、アブー・バクルやウマルをカリフ篡奪者と民衆が非難しているのを耳にして遺憾を表明している部分もある。一般には当時最も多数を占めていたシャーフィイー派であって、アシュアリー派の思想傾向にあった、といわれる。後者に関してはその一端が彼の『マカーマート』第33話「フルワーンのマカーマ」の中で床屋の発言の中に観て取れる。そこでは「私の能力が実行する前にある」とお認め戴ければ、と言わしめており、この発言は「アシュアリー派の論争点であり、神学論争で「人間の自由意思」の決定能力は何時存在するのか、について正統派は意思決定はそれ以前にあるとした。一方アシュアリー派は、その決定能力は常に現存する」と主張したことでの言い回しとして知られていた。アル・ハマザーニーはこの論争点をひょんな時に気違い床屋の言葉として落している。ジュルジャーンに関しては第1話、第7話をその地での出来事としているし、第9話は表題を「ジュルジャーンのマカーマ」としている。

24歳の382/992年に、アル・ハマザーニーはさらに東のホラーサーンの首都ニシャープールに向かった。その途上で彼は盗賊にあってしまった。彼は生涯に二度盗賊にあっており、その体験はマカーマ第6話、第36話に迫力ある場面展開として活かされている。ニシャープールでの途上では着の身着のままで釈放された。持ち物はすべて奪われた、その中には彼のまだ纏まっていなかった著作物や資料が含まれていた。ニシャープールに滞在していた折に、代表作『マカーマート』が作品化されたと伝えられる。いくつかの「マカーマ」が編み出されたのか、確定できないのは、こうして散逸してしまった一篇が多々あったろう、ということである。一説では400篇のマカーマを編んだという説すらある[Yāqūt: I 97]。またニシャープール滞在中も2年足らずであったから、『マカーマート』がここで完成したとすれば、きわめて短期間に筆に任せて作り上げたことになる。確かに形式、

内容とも、「マカーマ」の一篇ずつにはきわめて断片的なやつつけ物（よく言えば未完成品、メモまたは資料など）も含まれている。しかしいくつかの逸品はこうして腰を落ち着けて作品化したものに違いない。また資料も博搜して多用せねばならない労作も数えられる、例えば第29話の馬の品評をテーマとする「マカーマ」や次の30話の詐欺・物盗り・ならず者集団の多様さをテーマとする「マカーマ」などは、やすやすと作品化できるものではない。しかも筋書きを練って、散文の地の部分にはサジュウに合わせてまとめる作業など、資料に当たりそれを構成し、その後で韻を考えて統合させる作業など、とても一朝一夕で出来ることではない。しかし逆に彼の驚異的記憶力と非凡さを勘案すれば、盗賊に奪われて水泡に帰した「マカーマ」の作品群を、記憶を頼りに元に戻す知的活動を行っていたのであり、短期間でも「再生産」なので、困難な作業ではなかったろう、とも考えられる。彼の『マカーマート』の作品群は、ラッイの宮廷生活で、またジュルジャーの特殊集団との集いの中で、ある程度の「マカーマ」が出来上がっていたものと想定する方が、アル・ハマザーニーの『マカーマート』の成立を考えると、より無理のない見解と言えよう。51篇の諸「マカーマ」の中で評価が高い第22話「マディーラのマカーマ」はバスラの町の新築に至るまで、それからその家の什器も含めたさまざまな一級品を扱うが、この内容はバスラの町に滞在して初めて知りえることであり、そこにもしばらく滞在して、それを作品として既に仕上げていたとしか考えられない程、詳細で民俗資料となるものである。一步譲って、余程バスラに詳しい者からの聞き書きを纏めたにしても不可能のように思われる。すべて架空として設定されたとの前提に立てば別であるが。しかし最終部に配されているマカーマの幾つかは、これから旅するシジスターンの太守を賛美する内容があるところから、このニシャープール時代に『マカーマート』を仕上げて完成したとの説は受け入れられまい。大半のマカーマを編んだと言うぐらいにしておくべきであろう。

ましてはニシャープール滞在中には、マカーマ制作に掛かり切りと言うわけにはいかなかった。新参者で若輩であるにもかかわらず、異才奇才ぶりを発揮して乗り込んできたアル・ハマザーニーに対して、その地ですでに名声を不動にしていたフワーリズミー al-Khuwārizmī (383/993～94 歿) との有名な論争にも巻き込まれることになった。この学者で文人は、あの数学者・天文学者であるフワーリズミー (al-Khuwārizmī 847 年頃歿) とは別人であるが、有名な歴史家タバリー (al-Ṭabarī 923 歿) の甥に当たる血筋を引いている名士であった。文人の名に相応しく、詩人としてまた修辭学者としても一流であり、公文書の書記文体の名手であったし、系譜学にも通じていた。フワーリズミーもかつてラッイのサーヒブ・イブン・アッパードの宮廷を訪ねたことがあった。廷吏に「ある文人がお目通り願いたい」と伝えた。すると取り次がれた宰相サーヒブは「その人物に伝えてくれ、砂漠のベドウィンが詠んだ2千詩行を暗記した者以外には、どんな知識人に合うつもりはないとな」。廷吏はこのことを伝えると、フワーリズミーは「それではこう聞きただして下され、その2千詩行というのは、男性の詩人によるものなのか、女流詩人によるものなのか」と。廷吏から答えを聞かされたサーヒブは叫んだと言う、「それはアブー・バクル・フワーリズミーに間違いない。お通し申せ！」と。それほどに名声が行き渡った人物であった。

60歳に達しなんとしているこのような知の巨人は、若干25歳のアル・ハマザーニーの高名がニシャープールにまで及んでおり、彼の人気が地元の文壇やサロンを独り占めする状況を呈した段階で、同志や子弟たちから担ぎ出されたように論争を挑んだのである。公のマジュリス（討論会）が二回に亘って催された。口火はアル・ハマザーニーによって切られた。いずれの分野を選ぶか問うたのである。見慣れない詩行か、聞いたこともない諺か、記憶力か、詩品か、散文か、即興詩か、と。その中にはジャンルとしてマカーマートも含まれていた。但しそれが明確な分野であったか

は定かではない。というのもマカーマートという領域が、ムバーダハート *mubādahāt* (即興的作品 *muqtirāh* と同義) やムナーザラート *munāzarāt* (弁論、主義主張) と共に挙げられているからである。実際「マカーマートを除いたら見るべきものはない」と言わしめたフワーリズミーは、ムバーダハートの分野、即興詩を選んだ。そこで二人の間に即興詩の能力がいろいろ競われ試された。結果はフワーリズミーにとって惨憺たるものであった。このマジュリスに臨んだ判定者のいかに彼の教え子や知人が多く、その支持があったとはいえ、また彼の往年の名声を妬む文人がアル・ハマザーニー側に票を入れたとしても、即興詩の瞬時の能力と程度とは歴然としていて誰の眼にも明らかだったからである。

このマジュリスに敗れたフワーリズミーはその後、公には姿を見せず病気がちになる。アル・ハマザーニーはライバルを敵視したり、見下げることとはしなかった。この辺りの事情は [Yāqūt I 100] に詳しい。あくまでも他の才人と競い合って、己の知的進化と切磋琢磨を楽しみとしたいからであった。フワーリズミーが病氣だと聞いて、心からの悔やみの手紙を書き送っている。書簡集の中には幾つかこうした労りの心中を吐露したものが残っている。しかしフワーリズミーはほどなく亡くなってしまう。アル・ハマザーニーはフワーリズミーとの一件で名声を確立したわけであった。このニシャープールに名士として尊敬され榮譽を与えられ滞在できた。しかし彼はそれを好まず、旅のラクダに身を置いた。狂気に近い精神状態で、世話になったアミール (太守)・シャイフ・アブー・アリー Shaykh Abū ‘Alī に辞去する手紙を届けた。それは戦渦に巻き込まれるのを恐れた一面もあったろう。サーマーン朝はガズナのマフムードによって支配される劣勢にあり、ニシャープールも 385/995 年にはその支配に屈している。

アル・ハマザーニーはニシャープールからトゥースやサラフス、メルヴなどホラーサーンの主だった町を訪れた後、はるか南のシジスターンへ足を延ばした [Yāqūt: I 97]。シジスターンは古都ザランジュが主邑であった。イランの国民的英雄ルスタムの生まれ故郷とされる。場所によっては蛇が多く生息する地方や地域がある。こうした「蛇多住地域、地点」は蛇の総称ハッヤ *hayya* から派生形したマフヤート *mahyāt* (マフワート *mahwāt* とも) と言われる。こうしたマフヤートとしては、中東では古くからここシジスターンが有名であった。シジスターンになぜ蛇が多いのかは、ダミーリーの言説を要約しておこう [『動物誌』: I 478]: 天地創造に際して、神はアダムをセイロンの山 (Adam's Peak) に降ろし、イヴをアラファの山 (*jabal ‘arafa*) に降ろしたと同様、蛇はシジスターンの地に降ろされたからである、と伝えられる。それ故シジスターンでは地から湧くように蛇が出現するので、常に蛇が多数いることになる。但し雄の毒蛇でイルバッド *‘irbadd* という種がいて、この蛇は共食いもするし、他の蛇も見境なく殺し、食べてしまう。それ故もしこのイルバッドが存在しなければ、有毒、有害な蛇だらけになり、住民の被害が甚大になって、可住地帯で無くなってしまうことであろう、とさえ言われたほどであった。

こうしたことを博学なアル・ハマザーニーも承知していたことであろう。何処とも支配者や太守、大臣などの為政家、金持ちや上層階級、知識人や名士などに紹介状を携えたり、前もって書簡を送ったりして頼って行った。また、誘いがかかり、招待されることも多くあった。シジスターンでは、アミール (領主) ハラフ・イブン・アフマド Khalaf ibn Ahmad に榮譽ある客扱いを受けた。領主ハラフは父の代からサーマーン朝から独立してサッフアル朝を再興して地方王朝として存続させていた。しかし領主ハラフは新興のガズナ朝の祖マフムードによって敗戦し、捕虜となる。393年、西暦1002年のことであった。領主ハラフはジュルジャーニに送られ幽閉され、399/1008年獄死する。従ってアル・ハマザーニーとの接触はこれ以前と言うことになる。ハラフもまた文芸好みの教養人

であって、知識人や文学者のパトロンであった。この領主に対してのアル・ハマザーニーの入れ込みは『マカーマート』の作品からも伝わってくる。後半の第37, 38, 39, 45, 47, 48のそれぞれの「マカーマ」に太守ハラフが言及され、その寛大さへの讃歌ともなっている。この中のいくつかの作品がハラフに献呈されたものではないか、との意見もあるほどである。実際に謝辞を伝える書簡の存在もまた知られている。しかし歴史的資料によれば、シジスターンのアミール（領主）ハラフ・イブン・アフマドがアル・ハマザーニーが絶賛するほど善政を敷き、高雅な人物ではなかったようだ。資料は、ハラフの息子達への残虐な処遇や高潔な裁判官アブー・ユースフを死刑に処した暴虐さも彼の一面として伝えている。なお著者アル・ハマザーニーはシジスターンの関連で、本『マカーマート』では第4話が「シジスターンのマカーマ」として表題に選んでいる。

それから北へ進みヘラートへ向かった。その当時はホラーサーン州であったが、現在はアフガニスタンの州都となっている。知の探究、知識人との意見交換は終生続いた。ガズナ朝マフムードの第一宰相シャイフ・アブー・アッバース、ヘラート知事のアドナーン・イブン・ムハンマド、更にはバルフ知事のムハンマド・イブン・ズハイルなどとの書簡文でのやり取りも記録として残っている。無類の旅好きも、寄る年波の所為があったのであろうか、ヘラートを安住の邸（dār al-qarār=終の棲家）と決めたようである。ヘラートでは既に名士として誉れ高く、何不自由なく過ごすことが出来たが、さらにまた当地の名家で富豪文人フシュナーミー Abū ‘Alī Husayn al-Khushnāmī と知己になり、その娘を娶る形でスィフル（sihr 姻族）となることが出来た。娘との間には一女が出来、彼はこの娘を大変可愛がった。彼は書いている、「父親としての彼女への愛は一人息子のそれと変わらない。10人の息子と交換して、と言われても許すわけにはいかない」と。

アル・ハマザーニーは生涯不眠症に悩まされたようだ。一箇所に長く滞在すると、その症状の度が進んだ。旅に出るのもその解消法の一つであった。ニシャープールを去った時もその症状が限界に達していた。彼の死に関しても、彼の度が進んだその症状とも無関係ではなかった。彼の死には異常なエピソードが伝わっている。毒殺されたとの説、と絶命以前に埋葬されてしまったという以下の逸話が残っている。彼の死はイスラム暦398年第2ジューマダー月（西暦1008年2月）11日金曜日であった（393年説あり）。その日彼は昏睡状態に陥り、死んだ者と判断され、埋葬されてしまった。イスラム法に則って、朝死んだならば午後、午後亡くなったなら、翌朝に埋葬される、早い措置が取られる。以下の記述から朝のうちに死んだと思われる。彼が正気を取り戻したのは、墓場に埋葬され、墓の入り口が閉ざされた後のことであった。彼の泣きわめく声が夜間、断続的に辺りに聞こえてきた。そこで人々は墓を開いてみた。恐ろしい形相をした、手で髭を掻き掻いている彼の息絶えた姿がそこに見出された、ということである。

次稿では、引き続き第16話以降、解説ではアル・ハマザーニーの著作及び『マカーマート』について述べてみたい。

アル・ハマザーニー及び彼の著書の引用・参考資料は：

Muḥammad ‘Abduh 編注: *Maqāmāt Badī’ al-Zamān al-Hamadhānī*, Beirut (Dār al-Mashriq), 1973 (3rd ed.)

Ibn ‘Abd Rabbihi: *al-‘Iqd al-Farīd*, 4vols., Cairo, 1331/1913.

al-Damīrī: *Ḥayāt al-Ḥayawān*, 2vols., Cairo, 1965. 略称『動物誌』

al-Dhahabī: *Tadhkira al-Ḥuffāz*, 3vols., Hyderabad, 1915.

al-Ibshīhī: *al-Mustaṭraf*, 2vols., Cairo, n.d.

Ibn al-‘Imād: *Shadharāt al-Dhahab*, 7 vols., Cairo, 1952,

- Kaḥḥāla: *Mu'jam al-Mu'allifin*, 15 vols., Beirut, 1957.
- Ḥājjī Khalīfā: *Kashf al-Ẓunūn*, 6 vols., Beirut, 1955.
- Ibn Khallikān: *Wafayā al-A'yān*, 8vols., Beirut, 1972.
- Ibn Khallikan's Biographical Dictionary*, de Slane (E tr.), 4vols., Paris, 1871.
- al-Suyūṭī: *al-Muzhir*, 2 vols., Cairo (al-Halabī 版), n.d.
- Tha'ālibī: *Yatīma al-Dahr*, 4vols., Cairo, 1958.
- Yāqūt: *Mu'jam al-Udabā'*, 6vols., Cairo, 1930.
- Yāqūt: *Mu'jam al-Buldān*, 5 vols., Beirut, 1984.
- Jurjī Zaydān: *Ta'rīkh Ādāb al-Lughā al-'Arabiyya*, 4 vols., Cairo, 1957.
- Jaakko Hämeen-Anttila: *Maqama: A History of Genre*, Wiesbaden, Harrassowitz, 2002.
- A. Mez: *The Renaissance of Islam*, (Tr. E. from German by Bakhsh & Margoliouth), Pakistan, 1978.
- James T. Monroe: *The Art of Badī' az-Zamān al-Hamadhānī as Picaresque Narrative*, American University of Beirut, 1983.
- Prendergast, W.J. (英訳): *Maqamat of Badi' al-Zaman al-Hamadhani*, London (Curzon Press), 1973 (new impr.)
- Joseph Schacht: *The Legacy of Islam* (Sec. ed.), Oxford University, 1974

第1話 カリード(詩評)¹⁾のマカーマ 詩・詩人を論ず

(原文 M. 'Abduh 編 pp. 5-9 より)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え以下のように話した：(本意ならぬ) 旅出(の連続)は私を諸地方へと投げ出し(=あちこちの見知らぬ土地に私を導き)、遂には最果ての地ジュルジャーニ²⁾の地に足を踏み入れてしまった。そこで日々を生きてゆくために、開拓の手を動かせるよう幾らかの耕地を買い、商売にも手を染めるべく商い品を仕入れ、その拠り所とすべくハースート(小店舗)を構え、友人を求めて幾らかの人を選んだものだ。そして一日の両端(=朝・晩)は家で過ごし、その間の昼の大半をハースートで(働いて)過ごすことにした³⁾。

或る日のこと我々が(ハースートで)坐ってくつろいでいると、話題がカリード(詩評)と詩人達に及んだ。ほど遠く無い所に我々と向かい合って一人の若者が坐っており、我々の話していることが理解できているかのように耳を傾けていた。それでも彼は知らない風をして口を出すことはなかった。ところが我々の話の方向がある好みのほうに傾いて行き、議論が瑣末のことに拘^{こだわ}って(出口が見えないで)いると、この青年は言葉を挟んできた、「あなたがたはウザイク⁴⁾(良きデーツの木)に出くわしましたよ、ジュザイル⁵⁾(良き頼り木)にめぐりあいましたよ。私のことですがお望みとあらば、いくらでも(その出口について)お話ししますし、解説もしてあげましょう。話させて頂きますれば、(知識の)渇きを癒す水場の在り場所もそこへ至る道も指示致します。また耳の障害者だとして聞き耳を立て、アイベックス⁶⁾だとして岩山から降りて来る様な修辭の領域の何たるかを明示いたしましょう⁷⁾。

そこで私は声をかけた、「おお善良なる若者よ、近くに來なされ、見所が有りそうとみましたぞ！さあ、それでは披露してくれますまいか、既にサニッヤ(=中切歯)^{あらわ}を露^{あらわ}にしてくれた⁸⁾での中」。若者は素直に応じ同座に加わると、口を切った、「何でも尋ねていただきたい、それを答えましようから。私の答えの中にはきっとあなた方を喜ばせるものがあります⁹⁾」。

1) カリード(詩評)：カリード qarīd は、その語根 $\sqrt{q/r/d}$ の意味は「切断する」が原義でそれから「推敲する」→「詩作する」→「詩評する」と言う意義を転ずることになる。拙訳アル・ハリリー作『マカーマート』第2話訳注22参照。

2) ジュルジャーニ Jurjān：カスビ海南東部ジュルジャーニ地方。その首都名でもある。カスビ海に沿って西のタバリスターンとつながり、南東部のホラーサーンとを結ぶ地にあり、716年將軍ヤジド・イブン・ムハッリブによってジュルジャーニの町は建設されたと伝えられる。北東はシルクロード街道としてイスラム世界の東端に続くが、カスビ海および北部はまだイスラム化されないダール・ハルブ(戦の地)として最前線の境界地であった。果物と織物の町として知られ、この町産の良質の絹織物はイスラム世界全体に行き渡りジュルジャーニまたはジュルジャーニッヤとしてかつては有名であった。著者も381/991年の頃しばらくこの町に滞在している。

3) 冒頭段落の下線部のサジュウ(=文末・句末押韻技法)の語は順に：‘imārati, tūjārati / mathābatan, ṣaḥābatan。

4) ウザイク ‘udhayq：厳密には‘adhq(=その実であるデーツを沢山付けるナツメヤシの樹)の指小辞。予想より実を多く着けるところから、「期待に違わぬもの、信頼に足るもの」の例えとされる。

5) ジュザイル judhayl：jidl または jadhl の指小辞。ジズルとは「頂部を除き枝葉の剃り落とされた幹」のことで、ナツメヤシの樹を連想すれば良い。いろいろな目安とされ、ラクダや羊の群れが放牧や給水のためにそこに集められたり、ラクダがそこに行き体の痒い部分を擦りつけたりする。ウザイクとジュザイルとを一緒に用いた言い回しに「私は擦り付けられるジュザイルであり、称えらるべきウザイクである anā judhaylu-ha l-muhakkaku wa-‘udhaylu-ha l-mujarrabu」がある。この表現は、他人から信頼され、何事にも信用される際の言い回しとなっており、これを踏まえたのが本文である [Lisān al-‘Arab I 412, XI 107]。

6) アイベックス ‘uṣm：複数形で、単数形はアアサム a‘ṣam。「脚のみ白い動物」、ここでは全身黒、足のみ白いアイベックス (wa-l pl. wa-‘ūl) とされ、高山に住み低地に降りてくることは無いといわれる。

7) この段落のサジュウの語は下線の順に：yafhamu, ya‘lamu / mayla-hu, dhuyila-hu / ṣumma, ‘uṣma。

8) サニッヤ(=中切歯)を露にしてくれた；アスナー athnā と言う動詞はサニッヤ(thaniyya=中切歯)を動詞化したもので、「中切歯を露にする」の原義から「歯をあらわにする」、「口を開く」に転じている。

9) この段落のサジュウの語は下線の順に：mannayta, athnayta / ajib-kum, u‘jib-kum。

そこで我々は質問を始めた、「イムルウ・ル・カイス¹⁰⁾ についてのあなたのご意見は、如何ですか?」。若者が答えるには、「イムルウ・ル・カイス、彼は(恋人のかつての)住まい(キャンプ)とその居住跡(=キャンプ跡)に佇んで(恋人を偲び泣く)最初の人でした。また「鳥が未だ巢に居る早朝時に出発する」¹¹⁾ という(導入)テーマを開拓し、さらに馬の巧みな描写¹²⁾ は有名です。彼は詩作を稼ぎの手段としませんでしたし、盛る内容にも媚を売っていることはありませんでした。従って舌で技を弄して意中と背反する詩人達を凌駕しています。またその指が褒賞欲しさにこねくり回す詩人たちとも違います」¹³⁾。

我々は次に問うた、「ではナービガ¹⁴⁾ は如何評しますか?」。若者が答えるに、「ナービガ、彼は一旦怒り発すればその毒舌の激しく、満足すればその頌詩の素晴らしく、畏敬の念昂ずれば悔悟を詩に歌い込め、詩の矢放てば的を射ること疑いありません!」。次に我々はズハイル¹⁵⁾ についての評を求めた。すると若者は、「ズハイル、彼は詩の中に溶け合っていますし、詩の方も彼に溶け合っています(=何の努力も無く詩作できる人です)。彼が詩句を呼べば詩才の魔力が心内から答えましよう!」¹⁶⁾。

それでは、と我々は詩人タラファ¹⁷⁾ の意見を求めた。若者は、「タラファ、(アダムつまり人間は普通の土と水から造られていますが)彼の場合は詩の水と土から出来た創造物といえましょう。カワーフィー(詩の韻律法)の宝庫であり、頼るべき所となりましょう。内に秘めた才能が全開する前に亡くなってしまいました。閉じられた詩才の宝庫が開かれることはありませんでした」¹⁸⁾。

我々は(感心しながら)更に(ジャーヒリッヤ期の代表詩人から、イスラーム期以降の大詩人について)質問を続けた、「ジャリール¹⁹⁾ とファラズダク²⁰⁾ についてはどの様に評します、どちらがよ

10) イムルウ・ル・カイス Imru' al-Qays; 540年頃死亡。ジャーヒリッヤ(イスラーム期以前)の最古の詩人の一人とされる。キング王国の御曹司として育ったが、若くして放蕩に走った。しかしその編み出す詩作品は、自由奔放であり、恋愛と、自然、馬を巧みに詠った者が秀逸である。父王の殺害された訃報に接し、「今日は酒、明日(から)はこと(復讐)だ!」といった有名な科白を残し、その日を限りに酒を断ち、復讐劇を展開した。そうした中ビザンツに援助を求めて旅立つが帰路破した(殺害説が濃厚)。詩型カスィーダの形式・文体の創始者として知られる。代表詩集『ムアッラカート』の中に選ばれている。この詩集は Lyall によって編まれたものが有名。なおハリールーの『マカーマート』第12話注22、第23話注35で訳者が言及しているので参照されたい。

11) 「鳥が未だ巢に居る早朝時に出発する」; このテーマは Lyall の同上書中、イムルウ・ル・カイスのムアッラカート詩の中53詩行に叙されている。この冒頭詩行の定型は、ṭardiyya (狩猟詩)に継承され、砂漠的環境を嫌ったアブー・ヌワースでもこの魅力から解き放たれなかった。

12) 馬の巧みな描写; 同じく Lyall 編の53~70詩行にわたって叙されている。著者アル・ハマザーニーの馬好きも相当なものであった。第29話「ハマザーンのマカーマ」は著者のアラブ馬の品評、馬相学の蘊蓄が籠められている。

13) ここまでのサジュウの語は下線の順に: 'arasāti-hā, kunāti-hā, šifāti-hā / kāsiban, rāghiban / lisānu-hu, banānu-hu。

14) ナービガ al-Nābigha al-Dhubyānī; 530頃~603。ジャーヒリッヤ(イスラーム期以前)の詩人、宮廷詩人でこの点上述のイムルウ・ル・カイスと異なる。半島北東部ヒーラの、次いで北西部ガッサーンの宮廷に仕え、恐らくキリスト教の影響を受けていたのであろう、詩風は宗教的で荘重なものが多い。なおハリールーの『マカーマート』第25話注23で訳者が言及しているので参照されたい。

15) ズハイル Zuhayr ibn Abī Sulmā; 530頃~627。ジャーヒリッヤからイスラーム最初期まで生きた詩人。部族間の抗争に明け暮れるのを憂いて復讐の空しさ、平和の尊さを詩に託した。実際ズハイルの仲介で有名な部族闘争を和解させている。第9話注14、およびハリールーの『マカーマート』第49話注48を参照。

16) ここまでのサジュウの語は下線の順に: raghiba, rahiba / yudhribu-hu, yujību-hu。

17) タラファ Ṭarafa ibn al-'Abd; 543頃~69。ジャーヒリッヤ(イスラーム期以前)の詩人、若くして才能を発揮。半島北東部ヒーラの宮廷に仕えたが、奔放で風刺が巧みであったため、それが仇となって謀殺される。未だ20代であったため、イブン・イシュリー(20の息子)として知られるようになる。戦いと酒と女が関心の中心であったが、韻律法をさまざまに創意した。なおハリールーの『マカーマート』第1話注17、第10話注26を参照。

18) ここまでのサジュウの語は下線の順に: ṭīnatu-hā, madīnatu-hā / dafā'ini-hi, khazā'ini-hi。

19) ジャリール Jarīr ibn 'Atīyya; 640~728。ウマイヤ朝初期三大詩人の一人。半島内ヤマーマの砂漠にタミームのクライブ族の一員として生まれ、詩才を磨き、ダマスカスや主だった都市の宮廷に出入りし、頌詩や風刺詩に秀で、ファラズダクや他の詩人達と競う。なおハリールーの『マカーマート』第40話注31を参照。

20) ファラズダク al-Farazdaq Hammām ibn Ghālib; 641頃~732頃。同じくウマイヤ朝初期三大詩人の一人。バスラで生まれるが、生涯対立することになるジャリールとは同族タミームの出である。アリー党(シーア派)的思想傾

り優れていると思いますか?」。答えて若者が言うには、「ジャリールに関して言えば、詩に繊細さがあり、その含む内容に豊穰性が感じられます。ファラズダクの方はと言えば、語法において揺るぎ無く、自己の誇りが強く感じられます。ジャリールがヒジャーウ（風刺詩）に長け、ヤウム（部族戦争）を詠ずるのを得意とするのに対して、ファラズダクの方は自己の思いを熱心に追及し謳い上げ、属する部族がより高貴であります。ジャリールが女性への思いのたけを訴えれば涙を誘いますし、争う相手を（詩の斧で）非難すれば、相手は叩き潰されてしまいます。しかし逆に相手を褒め称えと、相手はその地位を高めることになります。ファラズダクの方はどうかといいますが、彼がファフル（自讃詩）を作ると、それに首肯づかない者はいませんし、相手を詩で辱めれば、相手に相応な屈辱を味合わせることになります。人を賞賛する詩を謳わせれば、十分過ぎるほどの叙述を展開してゆきます」²¹⁾。

次に我々は問うた、「詩人達の群像の中でムフダスーン（近代派）とムタカッディムーン²²⁾（古典派）について伺いたい」。答えて若者が言うには、「ムタカッディムーンについて言えば、その語法がより直裁であり、その意味内容が歓喜に満ちています。一方ムフダスーン²³⁾の方は作詩法に優れた技法が加えられ、編まれ方がより繊細さを増しています」。我々は（答えに感心しながら）是非にと乞うた、「一つ我々にあなた自身の作になる詩を披露してくれますまいか、そしてあなたは何方なのかをお教え願いますまいか?」²⁴⁾。

若者は、「分かりました、私の詩作品と私のこと、二つを一つのマアラド（展示場）に差し出すことと致しましょう」。こう答えてから、以下のような詩を吟じたのである：

皆様見るが如く 我が服装の襖れ衣覆うに過ぎず

amā taraw-nī ataghashshā ṭimrā

幸運に恵まれず辛き世の背上に翻弄されしまま

mumtaṭiyan fī ḡ-ḡurri amran murrā

夜ともなれば恨みつらみの昂じて

muṭṭabinan ‘ala l-layālī ghimrā

赤き厄難²⁵⁾の兆候に会うは幾たびぞ

mulāḡiyan min-hā ṣurūfan ḡumrā

向を持っていたために、ウマイヤ朝宮廷には受け入れられず、生涯不遇であった。しかしバスラの人々には彼の詩は好まれ敬愛された。ジャリールとのナカーイド（悪口合戦詩）は683年から生涯続けられ、90歳を越える長命を保った。なおハリーリーの『マカーマート』第5話注35、第9話注36、第12話注22、第23話注35の本文の相当箇所及び訳注を参照されたい。

21) ここまでのサジュウの語は下線の順に：farazdaq, asbaq / shi'ran, ghazran, ṣakhran, fakhran / (hajwan), yawman, rawman, qawman / (ashjā, ardā, asnā, ajzā, azrā, awfā)

22) ムタカッディムーン mutaḡaddimūn：直義は「先行する者達」。ジャーヒリヤ（イスラム期以前）時代に活躍し、砂漠、奔放な遊牧生活、部族戦争、人徳（ますらお振り・忠義・寛大さ）、動物描写（ラクダ、馬、野生動物）、女性との恋愛などを叙して社会をリードした詩人達。上述の最初に登場する詩人達はすべてムタカッディムーンである。またイスラム時代になってもその詩風を良しとして踏襲して詩作していったウマイヤ朝期の詩人達もこの派に入る。上述のジャリール、ファラズダクのころまではそうであった。いっぽうムフダスーン muḡdathūn、直義は「新しいことを始める人々」、はイスラム期に入って都市・王朝文明が中心となったために、従来の詩風や詩形に満足できず、新たな都市生活にマッチした、より洗練されたテーマや詩風、詩作法、修辭法、比喩法を展開したアッバース朝以降の詩人達。バッシュアル Bashshār ibn Burd (167/783 歿)、ムティール Muṭīr ibn Iyās (169/785 歿) を嚆矢として、「水仙から真珠がこぼれ落ち……」の作者として有名なブフトリー Buḡṭūrī (284/897 歿) もそしてアブー・ヌワース Abū Nuwās (200/815 歿) もこの派の代表であった。

23) ムフダスーン：本文はムタアッヒルーン muta'akhhirūn「遅く出て行った人々」の意味で、ムフダスーンと同義に使われる。我が国で言えば、前者が万葉派、この後者が古今・新古今派ということになろうか。

24) ここまでのサジュウの語は下線の順に：lafzan, ḡazzan / ash'ārī-ka, akhbārī-ka。

25) 赤き厄難 ṣurūf ḡumr：心身が痛みつけられ苦しめられる厄難。「赤き死」とは出血多量で死ぬこと、または狂い死ぬこと。ここでは飢えや寒さで死ぬほどであること。

我の切なる願いはシリウス²⁶⁾の早き出現

aqṣā amāniyya ṭulū‘u sh-shi‘rā

去れど望み持ちても如何に多くが裏切られしことか

fa-qad ‘unīnā bi-l-amānī dahrā

かくなる我もかつては分限^{ふげん}の有りし者

wa-kāna hādha l-ḥarru a‘lā qadrā

我が顔の水²⁷⁾もまた高く評価されしもの

wa-mā‘u hādha l-wajhi aghlā si‘rā

遊び^{すき}としたるは緑なる大テントを

ḍarabtu li-s-sarā qibāban khuḍrā

ダリウスの宮殿跡²⁸⁾、ホスローのアーチ²⁹⁾跡に建てしこと

fī dāri dārā wa-īwāni kisrā

されど前向きし時の運も背中を向け

fa-nqalaba d-dahrū li-baṭni zahrā

付き合いし友も我がもと離れ知らぬ顔

wa-‘āda ‘urfu l-‘ayshi ‘indī nikrā

我が財産^{ざい}の残る無くただ記憶に残るのみ

lam yabqa min wafriya illā dhikrā

かくて零落を引き摺りしまま今日に至りてあり

thumma ila l-yawmi halumma jarrā

老いし我妻のサーマッラー³⁰⁾に居^おわさなくば

law lā ‘ajūzu lī bi-surru man rā

また我が子達のボスラー³¹⁾の山々の麓に留め置くこと無かりせば

wa-afrukḥun dūna jibālī buṣrā

おお紳士方よ、これに耐えもせずば自ら破滅せしこと確かならん

qatltu yā sādātu nafsī ṣabrā

時の悪しき運妻子を奈落^{おとし}に貶めしこと既に明らかなれば³²⁾

qad jalaba d-dahrū ‘alay-hum ḍurrā

(ラジャズ rajaz 調 rā’iyya r 脚韻詩)

26) シリウス shi‘rā; アラブ世界ではシリウスの出現は真夏の到来を告げる指標とされている。ここでは着る物にもこと欠く貧窮者にとっては、その心配が要らなくなる夏の到来は待ち遠しいのである。

27) 顔の水 mā‘ al-wajh; はにかみや恥ずかしさで顔が赤らむことを「顔に水が出た」と表現する。しとやかさや謙遜、内気、上品さ、が無ければ「顔の水」は出ない。

28) ダリウスの宮殿跡 dār dārā; ダリウスとはアケメネス朝ペルシャのダリウス大王(前522～486)のことであるが、アラブではその王朝のすべての王をこの名で言い表す。ダリウスの宮殿跡とはペルセポリスの想定か。

29) ホスローのアーチ īwān kisrā; ホスローとはササン朝ペルシャのホスロー大王(在位531～579)のことであるが、上と同様この王朝の王たちをこの名で言い表す。アーチの原語イーワーンは大きなアーチで中世以降主要な建築様式に取り入れられる。ここではアヌーシルワーン王が6世紀に建て、今でもその遺構が残るクテシフォンのイーワーンの想定か。

30) サーマッラー Sāmarrā; バグダードからチグリス河を溯ること60マイルに建てられたアッバース朝の宮殿。カリフ・アル・ムウタシム(在位833～42)の建立。正式名称はスッラマンラアー surra man ra‘ā 即ち「それを目にする者は喜ばされた」である。ここでは格変化をしない固有名詞として surru man rā と記されている。最近の発掘調査で当時の宮殿の模様が明らかになってきた。

31) ボスラー Buṣrā; シリアとヨルダンに跨るハウラーン地方の主邑。ジャーヒリヤ(イスラム期以前)時代にはガッサーン王国の首都として多くの詩人や文人が集まり、洗練された宮廷文化を華開かせた。なお英訳者 Prendergast はボスラーをバスラとしているが、後者の綴りは baṣra であり、明らかな誤りである。

32) この最終詩行は、文意の流れから、前半詩行を後に持ってきた訳の工夫を行った。

語り手イーサー・イブン・ヒシャームは語を継いだ：(一座の人々同様)私も都合できる限りの財物を彼に恵んであげた。彼は(礼を述べた後)我々に背を向け、立ち去って行った。私にはすぐに彼への疑惑が湧き上がり、その疑念が確かなものに思えて来た。それを否定しようとしても、何処かで会った人では、との念が擡げた。そう確かにあの前齒(＝口振り)が私を彼のほうに注目させていたのだ。私は(思い当たって思わず)声を上げていた、「そうだ、あのアレクサンドリアの方だ、ワッラーヒ(アッラーに誓って)！我々と別れたのはまだ彼が若い時だったし、今は十分に年を重ねて大人となって再会したことになるなあ！」。そこで私は彼の跡を追って行き、ようやく追い付いて彼の腰を掴んだ。「あなたはアブ・ル・ファトフ殿ではありませんか？幼い時私どものところで育ち、何年も一緒に過ごしたではありませんか？サーマッラーに居られる奥さんてどんな方ですか？」と尋ねた³³⁾。

すると彼は私のほうを向いて大笑いした。そうしてこう吟じて答えるのであった；

呪われてあれ、この世は欺瞞だらけぞ

wayha-ka hādha z-zamānu zūru

欺きに騙されては元も子も在りませぬ

fā-lā yaghurranna-ka l-ghurūru

ただに身を退きてばかりは改善は無し

lā taltazim ḥālatan wa-lākin

夜毎月の様変わる如汝も改善のべし

dur bi-l-layālī kamā tadūru

(バスイート basīt 調 rā'iyya r 脚韻詩)

第1話 カリード(詩評)のマカーマ 完

第1話の訳者解説

内容が高尚であるため、写本によっては第6話に、或いは第8話に配されている。またマカーマの題名も al-Shu‘arā’ (詩人達) とより平明なタイトルとしている写本もある。このマカーマのテーマは教養あるアラブならば、話題として事欠かないカリード、即ち「詩評」である。己の素養として持っているアラブ詩及び詩人のあれこれを語り合ったり、論じ合ったり、またコンテストのようにどちらが優れているか、どの分野では誰が最も達人かなどを論じ合ったのである。ここではその場が軒先狭しと並び建っているハーヌート(小店舗)で行われているところが面白い。客が来るまで、何人かが日陰を選んで、椅子を持ち寄りくつろいで閑談をする光景は現地をよく目にする。その話題としたのは、誰も知っているイスラム以前のジャーヒリッヤの巨匠たち、彼らはすべて一級詩集『ムアッラカート』に選ばれている詩人たちである。それからイスラム時代の初期の、と言ってもウマイヤ朝期に移っているが、ここでも三大詩人の二人が詩評に供されている。最後にムフダスーン(近代派)とムタカッディムーン(古典派)が問われその特徴が俎上に乗せられる。このカリードの主題は、後輩であるアル・ハリリーの方では、さらに一篇の長さ・内容・文体とも加味され、より重厚で洗練された形で展開されている。たとえば第2話「文学サロンの席で」では、詩の叙述における比喩の巧みさがテーマに、アラブ詩の奥深さを開示してくれている。マカーマの題

33) ここまでのサジュウの語は下線の順に：tāḥa, rāḥa / khishfān, jilfan / ithri-hi, khaṣri-hi。

名となっているカリード qarīd もその第2話中に用いられており、影響関係は指摘できよう。

全体の構成は、一応マカーマのスタイルを踏まえている。それゆえに編者が冒頭の第1話に配置したのであろう。主人公が本舞台で技芸、この場合古今の詩及び詩人の教養の領域の温蓄^{うんちく}を披露する。こうして聴衆の賛同・賛嘆を得てから、己の零落と妻子の不遇を盛り上げの詩で訴えて、それで稼ぎを得て主舞台を去る。不審に思った語り手が、後を追って主人公と二人きりで会う。主人公の正体暴露と妻子の不遇は騙りである内容で裏舞台が構成される。しかし若者で登場した主人公が、お涙頂戴の部分でいつしか年老いた人物に代わっている点、妻子の哀れさを誘う詩句での言及においても僅か一詩行内で済ませており、貧窮さの具体描写もなく、説得力の欠けるものとなっている。

本話の形式の方に目を移すと、サジュウ文体への配慮は各節ともにしっかりとされている。詩の創作および挿入においては定型通り両方の本舞台、裏舞台で行っている。マカーマ文体として、ほぼ内容・形式とも整っている。これが従ってハマザーニーの第1話であるからといって、マカーマの篇著の「処女作」であるかどうかは問題外である。というのも解説で述べたように各マカーマの配列や題名には異説もあることであるし、以下のマカーマ作品で見ると、断片的な、試作程度の作品も集められているからである。またマカーマ文学に導入されたサジュウ文体及び詩句の多くは、そのクライマックスとなる盛り上げの内容においては、以降の「マカーマ」を見ても分かるように、己の零落と家族の貧窮振り、施しの推奨と神の報奨をテーマとしている。しかしこの種のお涙頂戴文体は、散文だとしてサジュウ（押韻散文）でなされていたし、さらに韻文での詩作は例え稚拙であっても既に開拓されていたものであった。一例を挙げればサーサーン集団（遊行、門付け、雑芸、乞食の集まり、第30話参照）が大道で行っていた口上及び話芸でもあった。こうしたサーサーン集団の俗語や隠語、独特の言い回しや韻文は、2世紀前のアブー・ドゥラフ Abū Dulaf al-Qāsim al-‘Ijī (840年歿、将軍にして教養人、遊牧民情報も詳しく鷹匠でもあった) やジャーヒズ Abū ‘Uthmān ‘Amr ibn Baḥr al-Jāhiz (868年歿) などによって、扱われていたし、集められていた。前者はこれに倣って長大な詩も残している。本話の冒頭詩もアブー・ドゥラフの詩品からではないか、との説もあるほどである。或いは「ホスローのアーチ跡に建てしこと」と詠じているあたり、サーサーン朝と関連付けて自ら Banū Sāsān であることを仄めかしているのかも知れない。

第2話 アザーズ種デーツのマカーマ 旬のデーツを買い求めた時

(原文 M.‘Abduh 編 pp. 10–13 より)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝え、以下のように話した：バグダード¹⁾に滞在中のことであった、折りしもアザーズ種のデーツ²⁾(ナツメヤシの実)の収穫時であった。私はその種中でも選りすぐりのやつを買おうと思って出かけた。程遠くない所に一人の商人がおり、果物を仕分けし等級を定めて(売っており)、ルタブ(熟れデーツ)も又その多くの種類を集め、棚分けして(客に便宜を図っていた)。私はあらゆる果物から最も見目良きやつを一握り取り、あらゆる品種から最も美味しそうなやつを一攫買ったのである³⁾。そしてイザール(外着用腰巻・スカート)の裾を集めて(受け皿の袋にして)買った重荷をその中に入れた⁴⁾。

とその時、私の目は一人の男を捕らえた、彼は恥じらいから頭にはブルクウ(顔覆い)を蔽い、体を痛めつけており(= やつれた病身のなりで)、手を前に差し出していた。さらにその傍らに子供達が居り、幼子を脇に抱えていたのだ。そしてあらん限りの声で以下のように朗読していたのだが、そのために胸がゼイゼイ鳴り、背骨には脆弱振りが顕となっていた⁵⁾：

何と呪われたこと、この私めは両掌一杯のサウィーク粥⁶⁾も

waylī ‘alā kaffayni min sawīqi

小麦粉で混ぜ合わされたシャフマ脂⁷⁾も御座りませぬ身！

aw shaḥmatin tuḍrabu bi-d-daḡiqi

あるは又ヒルディーク⁸⁾で満たすカスア椀⁹⁾も無ければ

aw qaṣ‘atin tumla’u min khirdīqi

飢えの唾重なりて癒すどころではありませぬ

yaftha’u ‘annā saṭawāti r-rīqi

かくて公道に立ちて慈悲乞うを避けざる者と成り果てる身ぞ

yuḡīmu-nā ‘an manhaji ṭ-ṭarīqi

1) バグダード Baghdād: バグダードは、8世紀中葉の建設当時、定まった固有名ではなく、類似の名が幾つもあった。そのうちの一つがバグザーズ Baghdhādhであり、ここでは後節のアザーズ ‘azādhの語とのサジュウ(押韻)の関係から、別名の代表として表記されたのだった。/d/と/dh/の交換である。他にバグダーン Baghdān、時には Baghdain などとも呼ばれた。このように8世紀末頃までは流動的であった。他にも最も良く知られた別名はマディーナト・ッサラーム Madīna al-Salām(平安の都)であり、今日に至るまで用いられている。

2) アザーズ種のデーツ al-‘azādh: 棗椰子 tamr には400種ほどの種類があり、産地としてはアラビア半島のヒジャーズ及びイラクのバスラが名高い。多種あるタムルの中で最も美味なものがアザーズ種だといわれている。後の第12話にも登場。

3) この二文はきれいな対照節を構成している：
fa-qabaḍtu min kullī shay’in aḥsana-hu
wa-qaraḍtu min kullī naw’in ajwada-hu

4) ここまで冒頭段落のサジュウ(文末・句末押韻技法)の語は文中の下線で示した。順に: baghdādh, ‘azādh / anwā’-hi, ibtiyā’-hi / ṣannafa-hā, ṣaffafa-hā / izāri, awzāri。

5) この段のサジュウの語は下線の順に: jasada-hu, yada-hu / ‘iyāla-hu, aṭfāla-hu / ṣadri-hi, ṣahri-hi。なお以下の記述においてはサジュウの配慮は無い。

6) サウィーク粥 sawīq: 大麦(または小麦)を荒く割り少し焙った後バターか油で炊き上げたオートミール粥。大麦粥。薄い粥状であるため「食べる」ではなく、「飲む」に分類される。

7) シャフマ脂 shaḥma: 小麦粉を shaḥm(羊などの油脂)などで捏ね、練り固めた食べ物。アスィーダ ‘aṣīda の一種。

8) ヒルディーク khirdīq: マラク(肉汁)にパンを粉切れにして煮込んだ粥。パン潰し肉汁粥。現在のファッタに当たるもの。

9) カスア椀 qaṣ‘a: 大型木製椀。最大のものは十人ぐらゐが共に食べられるほどの大きさである。第22話注22を参照。

おお、困窮の後に布施与える余裕持ちし方々よ

yā rāziqa th-tharwati ba‘da ḡ-ḡīqi

寛大なる者の与う掌を容易ならしめ給え

sahhil ‘alā kaffī fatan labīqi

その誇りにおいて血統高き者の掌を

dhī nasabin fī majdi-hi ‘arīqi

我らを導き給え、満ち足りた者のせめて足元たりとも

yahdī ilay-nā qadama t-tawfīqi

貧窮の魔の手から我が生活を救い出したまえ！

yunqidhu ‘ayshī min yadi t-tarnīqi

(詩型 ラジャズ rajaz 調 qāfiyya q 脚韻詩)

語り手イーサー・イブン・ヒシャームは続けた：(痛く心を動かされた)私は裾袋の中から一握り
掴み出し、それを彼に分け与えたのであった。(受け取った)彼は(謝意を表して次のように)詠った：

おお、その美しき善行を我に投げかけた方よ

yā man ‘anā-nī bi-jamīli birri-hi

その善行の栄えある意義を我アッラーに伝えん

afḍi ila llāhi bi-ḥusni sirri-hi

彼への十分なる保護を我アッラーに乞いまする

wa-stahḍi llāha jamāla sitri-hi

彼への感謝の念、我相応に出来なくあれば

in kāna lā ṭāqata lī bi-shukri-hi

おおアッラー我が主よ、彼への確かなる返礼願いまする

fa-llāhu rabbī min warā‘i ajri-hi

(詩型 ラジャズ rajaz 調 rā’iyya r 脚韻詩)

語り手イーサー・イブン・ヒシャームはさらに続けた：私もまた彼に言葉をかけた、「私のキース(財布)の中にまだご利益が残っているでしょう。あなたの覆いの内側のものを露わにして頂ければ、キースの残りのものすべてを差し上げることと致しますが」。するとこの男はリサーム(顔覆い)を取り除いた。見ると何と、それは我らが師アレクサンドリア出のアブ・ル・ファトフ長老殿ではないか！私は叫んだ、「呪われたこと、なんとずる賢い人か、あなたと言う人は！」。するとすかさず師は詩でもって答えた：

人生を生きるには偽ることも必要ぞ

fa-qaḍḍi l-‘umra tashbīhā

他人を誑かすことまたやむを得ず

‘ala n-nāsi tamwīhā

我既に達観せり日々同一ならず

ara l-ayyāma lā tabqā

常に変転せりと、されば我これに倣う

‘alā ḥālin fa-aḥkīhā

一日は運無く我害せられる

fa-yawman sharu-hā fiyya

されど他日は運向きて思うがまま

wa-yawman shirrafi fihā

(詩型 ハザジュ hazaj 調 hā'iyya h 脚韻詩)

第2話 アザーズ種デーツのマカーマ 完

第2話の訳者解説

分量が少なく、断片であり、完成品と言えるには程遠い。これぐらいの内容、形式のマカーマならば「400 篇も編み出した」と評されているのも宜なるかなと思われる。但し、才量評価は別となろうが。余りに短すぎて解説も不要と思われるが、幾つか他との関連もあるので述べておきたい。「マカーマ」の一篇としてみると、語りの文体である韻を踏んだサジュウは冒頭部2段落へ配慮しただけで、以降の記述においては押韻への配慮が欠けている。恐らく力点が詩の方に移行してしまったのであろう。本話にはサジュウの欠落を補うかのようには詩が三つ引用されている。著者としては短篇ながらも珍しい詩の部分が多い作品と言えるだろう。短篇の多くは詩行の挿入すら欠けたものも多いからである。場面設定は一場で処理して居り、盛り上げの本舞台と主人公の正体暴露の裏舞台を同一にしてしまっている。往来なので当然人目があるにもかかわらず。

またマカーマ形式としては、語り手の割り込んでの口上、及び詩の導入は両舞台で行っており、端折り過ぎて不完全とはいえ、見出されている。肉付けが、内容・形式ともに不足するこのマカーマは、第2話としておくには編者としては躊躇もあったのであろうか。写本によっては、第9話、第14話、第17話と配し方が異なっており、いずれも後ろに配置していることが分かる。

主人公がマカーマ（稼ぎの舞台＝本舞台）となるとところに、単独ではなく、同情を引くために、子供を登場させている捻りを利かせている。間に合わせの子を何処からか引き連れて、用済みとなれば人混みの中に置き去りにしてしまい、いずことも去ってしまう設定である。もっとも恐らくササーンと呼ばれる特異な遊行集団には「子を提供する」のをこととする者も存在したことであろう。子供、さらには抱いている幼な子まで稼ぎの手段としながら、カモは語り手一人、さらにカセギもデーツ一握りだけである。

子連れとするこの稼ぎの手法の発想は、以降にも何篇も見られるが、より念の入った詐術は後輩のアル・ハリリー作品中にも採り入れられている。後者の『マカーマート』第13話では、語り手も参加している一流どころの詩人たちの座談に、主人公が老婆に身をやつして何人かの子を引き連れて一同の前に踞われる。その場面を再現すると「そんな折老婆が遠方から我々の方に近付いてくるのが視界に入ってきた。その姿は駿馬が駆け寄る如く見る見る我々に近づいた。老婆は後ろに何人かの子供を従えていたが、その子たちときたら編み棒より痩せ細っており、鳩の雛よりひ弱に見えた……」(平凡社東洋文庫『マカーマート』: I 383 拙訳)。

アル・ハマザーニーでは全マカーマ中、子供を連れての登場は本話と第6話だけである。またこの両者として、単にお涙頂戴の同情を引く手段である。但し41話「ワスイッヤ（忠言）のマカーマ」では、親子の対話としてより、遺訓として世渡り商人としての心得を解いているマカーマもある。しかしアル・ハリリーは他にも稼ぎの相棒として息子や妻を登場させているモチーフをも開拓している。前もっての打ち合わせの手筈は整えて稼ぎの場に臨んでいることだろうが、主人公に負けず劣らずの掛け合いを行い、その弁実の巧みさに目を見張らせ、一方では外見で貧しい身なりに目を引かせ、同情や憐憫を大いに誘って、周囲のものから布施を貰う設定はアル・ハリリーにお

いては数多くみられる。息子を相棒にしているのは、早くも第4話に野営地で、隣接するテントの中での親子の対話と言う設定で展開されている。第5話ではモチーフは素晴らしい。主人公は子供連れではない。子供は実際は登場させず、離ればなれになった、と言うより家族を置き去りにされているのだ。放浪の主人公が一夜の宿を求めて訪ねたところが、己の母子の移り住んだところで、名も名乗れず入り口の内外での、顔を見ず終いの父子の問答の悲劇を語っている。同情と奇遇とから、聴き入る一座の人々からこの騙りの主人公に対して妻子の所へ戻って一緒に暮らすよう、資金を受けるストーリーが展開される。他にも驚嘆すべきは、第23話「詩に関するマカーマ」では父が詩を盗まれた、息子に剽窃されたと法廷に訴えて、そこで父子が類語詩法で争う設定を編み出している。さらに第50話の中に息子が主人公より頭脳の切れを見させている一篇もある。

第3話 バルフのマカーマ 高貴なる強請り集り

(原文 M. 'Abduh 編 pp. 14-17 より)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて、以下のように話した：綿の商売のことでバルフ¹⁾に赴くことがあった。それでそこに着いたのだが、当時私はまだ若者の処女期（＝初めの頃）のことで、心には何も煩わされることも無く、身には贅沢な飾り衣を纏っていたものであった。唯一の関心事といえは駆ける思考の駒を如何に手懐けるか、話す言葉の逃げ去るのを如何に狩り取るかということだけであった。だから彼の地に滞在中、私が聞く耳を持ったのは私の言葉より弁舌巧みな者の声のみであった。やがて（この町との）別離の時がやって来て、その弓（から放つ別離の矢）をそちら（の出立）に向けたか向けようとした時、一人の若者が私の許に現れた。人目を引く外装で、口髭も両の頸動脈に達するほど（立派にたくわえており）、その目線もまたラーフィダーン（両の大河＝チグリス・ユーフラテス）の水を湛えたような（澄んで綺麗な）ものであった。（いかに何かしてあげたいという）私の目にこの若者がかくも適ったものだから、彼への蠱虺目はさらに増すことになった。彼が尋ねるには、「旅立とうとする御積りですか？」「そうです、確かに！」、と私が答えると、「あなたの道案内人が豊かな牧場を見出さんことを（＝幸先が良かれ）、あなたの旅の指導者が道に迷うことがありませんよう！それで何時お立ですか？」と尋ねてきたので、私が、「明日の早朝に予定しています」と答えた²⁾。

するとこの若者は詩を詠じて饒としてくれた：

翌朝が聖なるものとなりますよう、別離の朝ではなく

ṣabāhu llāhi lā ṣubhu nṭilāqi

鳥占³⁾が再会を告げますよう、永劫の別れではなく

wa-tayru l-waṣli lā tayru l-firāqi

（詩型 ワーフィル wāfir 調 qāfiyya q 脚韻詩）

それから尋ねてくるには、「何処へ旅立ちですか？」「私の故地です」と答えると、「無事あなたの故地に安着なさいますよう、用向きが上手く運びますよう！それで何時こちらにお戻りなさいます？」「近いうちに⁴⁾」と私が答えると、彼が祝福して言うには、「旅の衣類が折り畳めますよう、折り目に糸が通り、また戻せますように！⁵⁾」ところで（私への）あなたの寛大さは何処で見出されるのですか？」「あなたが望む所で」と私が答えると、「アッラーがこの道を通してあなたを無事お戻りになされ給うたならば、私を（もう一度）お連れください、友人のブルダ（外套）を着てい

- 1) バルフ Balkh：アフガニスタン北部の主要都市。かつてはバクトリアの首邑バクトラで、ヘレニズム時代は幾つかあるアレクサンドリアの地名のついた一つ。イスラム時代前にはトハリスターンの州都として栄えた。正統カリフ・ウスマーン（在位 644～56）の時代 653 年に將軍アル・アフナフ・イブン・カイスによって征服され、イスラム化され、ホラーサーン州に組み込まれる。詩人・天文学者・数学者として有名なウマル・ハッヤーム（1048～1131）はこの町で生まれ、教育を受けた。1220 年蒙古軍の侵攻により壊滅的打撃を受ける
- 2) 今までの冒頭段落のサジュウ（文末・句末押韻技法）の語を順にローマナイズすると；tharwah, muhrah / astaqīdu-hā, aṣīdu-hā / muqāmī, kalāmī / 'ayni, akhdā'ayni, rāfidayni / sinā'i, thanā'i / rā'idu-ka, qā'idu-ka。
- 3) 鳥占 tayr：アラブはイスラム以前の時代から吉兆を占う時、（多くの場合早朝）家を出て最初に行き逢う鳥が左右どちらに行くかで占った。サーニフ sāniḥ（右側に飛んでゆく）のがタファールウ tafa'ul（吉）であり、バーリフ bārīḥ（左側に飛んでゆく）のがタシャーウム tashā'um（凶）であった。又吉鳥はヤツガシラ hudhud であり、凶鳥はカラス ghurāb とされる
- 4) 近いうちに al-qābila：「来る（年）に」即ち「来年に」とも解釈できる。
- 5) 「旅の衣類が折り畳めますよう、折り目に糸が通り、また戻せますように」：旅に出かける人へのドアー（祈願の唱句）。前者が行きの安着、後者が帰りの安着の祈願の呪文である。

る敵の（＝友人と偽っている悪人の）所に。黄金色をちらつかせ、不信仰に誘い込み、指の上で、太陽の暈の如くに踊り（＝周囲でうろつき回り）、借金^{かき}の重荷を軽くしたかと思えば、（その善し悪しや美醜の）両面を平気で行く敵の所に」⁶⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：私はこの若者がディーナール金貨を求めているのだと感じ取った。そこで「さあ、これを現金^{しるし}として受け取りなさい。（ここに戻って来ましたなら）同等のものを約束致しましょう」と言って（渡した）⁷⁾。

若者は謝意を詩に詠んだ：

汝が配慮 我が訴えより良からまし

ra'yu-ka mimma khaṭabtu a'lā

されば続けられよ 寛大なる諸行為^{ふるまい}

lā zilta li-l-makrumāti ahlā

その気風確固として その鷹揚^{おうよう}さ変わらぬことを

ṣalubta 'ūdan wa-dumta jūdan

汝が枝の繁茂らんことを 汝が根の健やかならんことを^{すこ}

wa-fuqta far'an wa-ṭibta aṣlā

汝が与えし贈り物 その重さに耐えぬほど

lā astaṭī'u l-'aṭā'a ḥamlan

物乞いの その重き返礼には耐え切れぬほど

wa-lā uṭīqu s-su'āla thiqlā

配慮の領域^{おもい いき} 汝が究極に我遠く及ばず^{はて}

qaṣurtu 'an muntahā-ka ṣannan

汝が行為 我が想像をはるか越えたり

wa-tulta 'ammā ṣanantu fi'lā

おお時の定めと偉大さの支えとなる者よ

yā rujmata d-dahri wa-l-ma'ālī

切に願う 汝が身に逆境の降りかかりませぬよう

lā laqiya d-dahru min-ka thuklā

（詩型 バスイート basīt 調 lāmiyya 1脚韻詩）

語り手イーサー・イブン・ヒシャームは話を続けた：謳い終わった若者に私は件のディーナール金貨を手渡ししながら、尋ねた、「その嗜^{たしな}みの良さの出所（＝出生地）はどこなのか教えてください」。すると彼は、「クライシュ族が私を育ててくれました、あのバターイフの地⁸⁾で高貴な人々が育成してくれたのです」と答えた。（ところが）居合わせた者の一人が声をかけた、「あなたはアレクサンドリア出のアブ・ル・ファトゥフ殿ではありませんか？イラクでは至る所スーク（市場）を徘徊し、紙に書き付けては他人から無心している所をお見かけしましたが」⁹⁾。

6) この辺りの謎めいた表現はすべて「金貨」のことを婉曲に言ったものである。即ち「敵」'aduww とは「金貨」ḍinār のことである。金貨の善悪の二面性についてはアル・ハリリー¹⁰⁾の第4マカーマがそれを主題に全面的展開を見せて秀逸である。

この段の下線部サジュウ（文末・句末押韻技法）の語は以下のようである：waṭana, waṭana / rayta, khayṭa / ṭarīqi, ṣadiqi / ṣufri, kufri, zufri / 'ayni, dayni。

7) この段のサジュウの語は下線の順に：naqdan, wa'dan。

8) バターイフの地 Baṭā'ih；メッカは居住区が二つに分かれ、カアバ神殿のある低地をバターイフまたはバターフ、中心地から外れる高地はザワーヒル Zawāhir と言った。メッカの主要部族はバターイフの地に住んだ。

9) この段のサジュウの語は下線の順に：'irāqi, aswāqi, awrāqi。

それに対してアブ・ル・ファトゥフ殿は吟じて答えた：

アッラーは多様な僕^{しもべ}を持つものぞ

inna li-llāhi ‘abidā

なかに己^{うきよ}が人生^{まぎ}を紛^{まぎ}れて生きる者あり

akhadhu l-‘umra khalīṭā

夕べには生粋^{きっすい}のアラブとして生き

fa-humu yumsūna a‘rābā

朝^{あした}にはナバティア人¹⁰⁾として生きる

wa-yudhūna nabīṭā

(詩型 ラマル ramal 調 tā’iyya † 脚韻詩)

第3話 バルフのマカーマ 完

第3話 訳者解説

この一篇も短すぎて、解説が不要であるが、マカーマ論やアラブ習俗との関連として二、三点述べておきたい。上品な強請^{ゆす}り集^{たか}りの一例である。サーサーン族のような何らかの低俗な技芸で身銭を得るやり方と好対照に、零落した貴族が裕福そうな者に当たりを着け、言葉巧みに、また品の良さ、嗜みの良さを相手に見せつけて、金品の返礼を乞う筋である。特に旅出する相手には、これから出立であるから十分な持ち合わせがあるのを見越して、声を掛けてきたわけである。主人公によって語り手自身がその騙^はりに遭って、被害を受けることは最後に分かるわけである。語り手までが主人公によって嵌められるこうしたストーリーの展開は、もっと念の入った膨らみを持って、後輩アル・ハリリーによって幾つかのマカーマの中でなされている。

アラブ民族の慣行として興味深い記述がある。旅立つ者への餞言葉：「あなたの道案内人が豊かな牧場を見出さんことを(=幸先が良かれ)、あなたの旅の指導者が道に迷うことがありませんよう！翌朝が聖なるものとなりますよう、別離の朝ではなく鳥占^{とりうら}が再会を告げますよう、永劫の別れではなく」、「無事あなたの故地に安着なさいますよう、用向きが上手く運びますよう！」など。また無事旅から帰ってくるよう安らかな帰着を願う言い返し：「旅の衣類が折り畳めますよう、折り目に糸が通り、また戻せますように！」など、挨拶言葉としても我々異文化の人間には参考になろう。

さらにまた餞の言い返しの中に「別離の朝ではなく鳥占が再会を告げますよう」とあるが、一日の吉凶もまた鳥占で行う習慣は、いまでも根付いている。本話注3でも触れておいたが、さらにアル・ハリリーの方では、鳥占に関する記述が都合4か所に上り、吟味すると民間信仰の一つとしての資料となろう(第26話注14、第37話注26、第43話注31、第49話注39を参照)。

マカーマとしての仕上がり具合だが、分量的に少ないし、筋の展開が不十分である。主人公の正体が暴露される最後の場面では、「居合わせた者の一人が声をかけた、「あなたはアレクサンドリア出のアブ・ル・ファトゥフ殿ではありませんか? ……」と、唐突に第三者を登場させるのは違和感

10) ナバティア人 Nabīṭ; ナバティア人(単数形は Nabat)は、BC4世紀からAD2世紀頃まで現在のヨルダンからサウディアラビア北西部にかけて、交易と農業を営み、ペトラを首都として、王朝を作り栄えた。その後ローマ帝国によって滅ぼされる。マダーン・サーリフ他遺跡が各地に残り、後発のアラブはナバティア人を不信仰ゆえに亡ぼされた古アラブ民族の一つと看做している。そして本文の評価のように、後世の人々はナバティア人を「農業を専らにして、土にしがみ付く百姓根性の抜けない性卑しい人々」とのレッテルを貼っている。

があるのは否めない。ここは語り手のイーサー・イブン・ヒシャームの滞在中の宿の中と想定されている。居合わせた者、しかも複数など想定されていない。語り手にその言行から主人公と気づかせて、この発言をさせる一工夫が出来なかったものであろうか。マカーマ形式としては本舞台と後舞台とのケジメが無い。この舞台回しの工夫があればもっとストーリー展開がスムーズに進行できたのではないか。詩の導入及び語り手の口上は盛り上げ部、正体暴露部共に定型に沿っている。サジュウ文体への配慮もあるにはあるが、短篇故に困難さも窺える。まだ一作品として、完成度は未だしと言ったところか。それ故写本によっては第4話に、第11話に、さらには第27話に配しているものもある。さらにマカーマの題名自体も Paris 写本などのように *maqāmāt al-dīnār* (ディナール金貨のマカーマ) としているものもある。

第4話 シジスターンのマカーマ 口上巧みに特効薬を売れど

(原文 M. 'Abduh 編 pp. 18-23 より)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて、次のように話した：ある火急な用事が私をシジスターン¹⁾へと導いた。私は用向きの意図の鞍をしっかりと据え、乗用ラクダに乗り込んだ。そして道々アッラーに請い願ったものだ、前方の旅先に駆り出す私の決意の幸先の良いことを、又導き手となす手綱の慎重さを。そして遂に我が乗用ラクダは私をシジスターンに導き入れ、その城門まで辿り着いた。しかし折りしも太陽はその西を十分満たしていた(=陽はどっぷりと暮れていた)ために、(市内に入れず、その旅の)終わった所で夜を過ごさねばならなかった²⁾。

夜明けの刃の切っ先(=閃光)が抜き放たれ、曙光の軍団が昇ってきた時、私は(開かれた城門を通して)スークのほうに向かい、宿を捜し求めた。町の周辺から中心部へと、スークの外れから繁華街に向かって行った³⁾。(その中心地に着くや否や)ある声が私の耳を劈いた、どこにも根の張った(=甲高く通る)声であった。そこで一群の人々の方に足を向け、人垣を掻き分けて行き声の主の見える所で立ち止まって見上げた。すると如何だろう、一人の男が馬に乗り、息苦しそうにしていた。後頭部を私のほうに向け、次のように話していたのだ⁴⁾：

「わしを知る者は、わしのことは良くご存じのはず。わしのことを知らない者にはわしのことを十分知らしめねばなりません。このわしは「イエメンの初物⁵⁾」なのです、当今何かと話題になる者⁶⁾でございます！紳士方にとっては難題となり、ハレムの淑女方にとっては謎となっている者なのです！わしに何でも尋ねてみなされ、国々のこと・城砦のこと、山々のこと・その高さのこと、ワジ(涸れ河)のこと・その流域のこと、大河や海のこと・その水の出所のこと、名馬のこと・その背中のこと！砦壁の所有者は誰か・その砦の内情に通じている者は誰か、そこに通ずる道を探し出したのは誰か・その難攻な溶岩砦に侵入したのは誰か？

わしに尋ねてくだされ、君主諸侯のこと・その所持する財宝のこと、また鉱石のこと・その鉱脈のこと、物事の上辺のこと・その隠れた真相のこと、学問のこと・その中心地のこと、何が重大事

- 1) シジスターン Sijistān；イランの東方中央部、東方はアフガニスタン、西方はケルマーン、北方はホラーサーン、南方はマクラーンに接し、大半をルート砂漠が覆う。現在はシジスターンが州都になっているが、古都ザランジュが主邑であった。イランの国民的英雄ルスタムの生まれ故郷とされる。イスラム化される際の約定として、ハリネズミは決して殺すことの無いように、との一条が入った。と言うのもこの地域には小さな毒蛇が多く、それを退治してくれるのがハリネズミであったから。
- 2) 夜を過ごさねばならなかった wa-ttafaqa l-mabītu；イスラム世界の町の城門は日没とともに閉ざされ(マグリブの礼拝のアザーンが合図)、夜明けとともに開かれる(ファジュルの礼拝のアザーンが合図)。この冒頭の段落のサジュウ(文末・句末押韻技法)の語は：ṭiyyata-hu, maṭiyyata-hu / 'azmi, ḥazmi / amāmī, imāmī / durūba-hā, ghurūba-hā。
- 3) スークの外れから繁華街に向かって行った min qilādāt s-sūqi ilā wāsiṭati-hā；直訳は「スークの首飾りからその中心へ」。首飾りの中心部には一際大きな玉が置かれる。その部分はトップとかペンダントとか言うのだが、アラブはワーシタ wāsiṭa と言っている。
- 4) この段のサジュウの語は：ṣabāhi, miṣbāhi / nuqṭati-hā, wāsiṭati-hā / wafda-hu, 'inda-hu / farasi-hi, nafsi-hi。
- 5) イエメンの初物 bākūra al-yamani；自己紹介で己の名前を婉曲に謎めいて表現している。主人公の名前アブ・ル・ファトフ(ファトフの父)の「ファトフ fath」の多義性を利用して分らせようとしているわけである。fath(初物)の一般義で、<果物>を表すのは「ナブウ nab'の実」がある。ナブウの木はビスタチオに似た木で、その果実は赤く甘く丸い。イエメン産が名高く、メッカ辺りには初物として入って来る。ムハンマドの説く新宗教に応じてイエメンからの使者が始めてやってくる。その代表団の指導者が主人公の名と同じアブ・ル・ファトフと言った。この両者を共示しているのが「イエメンの初物」である。
- 6) 当今何かと話題になる者 uḥdūtha al-zamani；上の「ファトフ fath」をさらに外延させている。当時もジハード(聖戦)が盛んに行われ、話題となっていた。その中心となるものは何といても fath(反乱軍や外征での勝利、開城)であった。主人公の名もアブ・ル・ファトフである。「ファトフ fath」の行為者名詞ファーティフ fāṭiḥ は、「開城者、戦勝者、凱旋者」の意味である。

であるのか・その解決する鍵はなにか、戦のこと・何がその難局であったのか、(戦で)財力を掌握したのは誰か・その代価を支払いもせずと、権力の座に通ずる鍵を得たのは誰か・勝利の道を知ったのは誰か……⁷⁾

アッラーに誓って、このわしこそそれらに通じている者なのです！(為政者の相談相手として)権威ある王達の間で仲裁を行なって参りましたし、その黒く生々しい係争の謎を明らかにしてきました。また誓って申しますが、わしは(恋愛相談として)恋愛に陥った人々がどうなったのか有りの儘の現場を目の当たりにして来ましたし、(傷病相談として)病といえば眼の腫の病に至るまで処理経験して来ました。(遊興の相手として)たおやかな枝々(=女性の肢体)を手許に引き寄せて来ましたし、ほの赤き頬の薔薇(の実=うら若き淑女)を摘んだものです⁸⁾。

とはいえこうは言っても結局はこの俗世から遁走してしまった身、高貴なる性向が卑近なる諸相を忌避するように。卑賤なる諸事から一切身を引いたのです、気高き者が淫らな言葉に対しては耳をふさぐように。そうこうするうちに(年をとり)白髪の耀かしさが照り返えり、老いの威厳が身中を覆った時、来るべき事柄(=最後の審判)に対処すべく、(善行の)糧食を増やすべく旅に出たのです。どの道を選んだにしても、わしが辿ってきた道より正しい導きに相応しいものは無かったと信じます⁹⁾。

あなた方の中には、わしを馬に乗かった、戯言^{ざれごと}を撒き散らす者、と思い込んでいる方も居られましょう、「こいつはアブ・ル・アジャブ(驚異の父=法螺吹き・はったりや)だ」と眩く方もおられましょう。とんでもないこと！このわしはアブ・ル・アジャーイブ(諸驚異の父=諸々の不思議の体験者)なのですが、実際それらを目にして来たり、経験もして来た者ですぞ！またこのわしはウンム・ル・カバール(重大事の母=大事件の生き証人)ですぞ、それらにどう計って(=対処して)、切り抜けて来たことか！またこのわしはアフ・ル・アグラーク(錠の兄弟=難問解決者)なのです。どんな難問に出くわしても、容易にそれらを解決して来たり、高く買って(引き受けて)は安く売った(解決して手渡した)ものです。このわしは、誓って申しますが、そうした難問の行列の中に飛び込んで行き、肩を押し合いへし合い解決に導いた者です。また(悩み事あらば)星の運行を見守り¹⁰⁾、(要請あらば)乗るラクダを(急がせる余り)やせ細らせてしまう者ですぞ。重大なる戦場には必ずや駆けつけては、ムスリム達の利益のためならば一歩も引くまいと誓った者なのです！¹¹⁾

さて皆さん、今やこの(ムスリム共同体の)安寧の首輪を、私の首から外してあなた方の首に託さねばなりません。このわしの処方した薬をあなたがたの市場に提示いたします。神の僕の気概持つことを譲らぬ方(=信仰共同体の行く末を真摯に考えている方)、タウヒード(アッラーの唯一性)の定句を唱えるに遠慮されない(=敬虔なる)方はどうか(この特効薬を)私から買い取って頂きたい！祖先が高貴な方には是非保持して欲しいもの、その幹(=身)の清純な方には水で溶かして

7) ここまでの段のサジュウの語は：yamani, zamani / rijāli, hijāli / ḥusūna-hā, ḥuzūna-hā / buṭūna-hā, ‘uyūna-hā, mutūna-hā / aswāra-hā, asrāra-hā / samta-hā, ḥarrata-hā / khazā’ina-hā, ma’ādina-hā, bawāṭina-hā, mawāṭina-hā / maghālīqa-hā, maḍā’īqa-hā / mukhtazana-hā, thamana-hā / mafāṭiḥa-hā, maṣālīḥa-hā。

8) この段落のサジュウの語は下線の順に：ṣīdi, sūdi / ‘ushshāqi, aḥdāqi / nā’imāti, muwardāti。

9) この段落のサジュウの語は下線の順に：lī’āmi, kalāmi / ma’ādi, zādi, rashādi。

10) 星の運行を見守り ra’aytu l-kawākiba：一つは星座や惑星間の動きを見て、それから判断を行う占星術のこと。長くなるので訳者解説の方に回そう。もう一つは心配事や悩み事があって、夜眠れないで朝を迎えてしまうことをこのような表現で言うことがある。アラブの眠る所が、牧民のテントの中であれ、定住家屋の屋上(=陸屋根)であれ、星を見ながら眠りに就いた。こうした彼らの習慣から生まれた言い回しであることも知っておこう。特にテントは縫い間を通して月も星も透けて見える、即ち自然と一体であることを忘れてはならない。

11) この段のサジュウの語は：farasin, hawasin / ‘ajabi, ‘ajā’ibi / ‘āyantu-hā, ‘ānaytu-hā, qāyastu-hā, qāsaytu-hā, wajadtu-hā, aḍa’tu-hā, ishtaraytu-hā, ibta’tu-hā / mawākiba, manākiba, kawākiba, marākiba。

飲んで欲しいもの！¹²⁾

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：(この語りの見事さに驚嘆して) 私は彼の顔をまじまじと見回した、彼は一体どんな人物なのだろうかと思って。すると如何であろう、我らが長老、あのアレクサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師ではないか。そこで私は彼の前から群衆が散って行く¹³⁾のを待った。ややあって私は自らを名乗り出してから、尋ねた、「あなたのこの特効薬にはどれ程支払ったらよろしいので?」。応じて師は「あなたの財布が許す限りで結構!」。こうして(ありったけの布施を行って) 師の許を立ち去ったのであった¹⁴⁾。

第4話 シジスターンのマカーマ 完

第4話 訳者解説

注10で述べた「星の運行を見守り ra'aytu l-kawākiba」についてであるが、黄道に沿って規則的に並ぶ恒星 kawkab (複数形が kawākib) は黄道12宮として配されて、太陽暦の代わりにされていた。イスラム化されて以降、暦およびそれに準拠した月は完全な太陰暦であったため、季節に合わず、農事や遊牧生活には役立たなくなった。アラブ世界はカルデアの古代オリエントからの伝統を継承して、黄道12宮を季節の目安としていた。更に一カ月よりもっと細分した一年を28に分け、月の宿 (manāzil al-qamar) として13日ずつを宿 (manzil) として牧農事暦を伝承し、歳事を行っていた。一年、一年ごとの月星の暦はナツメヤシや小麦の農事、牧地やラクダなどの家畜の飼育管理などが言及され、その宮 (burj)、その宿 (manzil) ごとにサジュウの押印文の言い回しとして伝承されて、今日でも用いられている。雨や風、暑さや寒さ、十二宮星座や28宿が主たる目安であったが、さらにカノプス (suhayl) やシリウス (shirā 第1話参照) などの恒星の出現時、南中時、西没時なども目安にされた。さらに詳しい人は、星座の間を動く惑星達、その星々との間の動き、アスペクトを見て、それから読み込んで様々な判断を行っていた。大きくは天下国家の重要事から、果ては個人個人の失せ物探しや旅行の出発時までも。暑く乾燥した昼に比して、涼しい夜長の砂漠生活では雲にも邪魔されない月星の語り合いの何と果てしなく楽しいことであろうか。

さて本マカーマは、シジスターンの町中で、一人の馬に乗った男が人混みの中で訴えている。様々な知識経験をしてきており「何でも相談」を受け入れると。誰も反応が無いので、特効薬があるから如何かと手を変えて買い求めるよう訴える。それでも反応が無く、(ダチョウの如く?) 群衆は散って行く。この馬上の人物のすばらしい弁舌や訴え口調に、語り手イーサー・イブン・ヒシャームを惹きつけられる。居残ってその人物をまじまじと見ると、それは主人公アブ・ル・ファトフ師であった。そこで語り手イーサーは、その薬を買いましょうと救いの手を述べたところで終幕となる。久しぶりの対面に関わらず、対話もそこそこにあっさり別れる。

全体が短篇過ぎるためか、このマカーマの全体の内容も主人公の弁舌には集中した訴えどころが観られない。聴衆をうならせるには訴える筋の方向性とその強調、畳み込みが必要といえる。万相談は、為政者の、恋愛の、傷病の、遊興の相手として、と訴えるがあっさりし過ぎて総花的である。

12) この段のサジュウの語は: a'nāqi-kum, aswāqi-kum / 'abīdi, tawhīdi / judūdu-hu, 'ūdu-hu。

13) 群衆が散って行く ijfala n-na'āma: 直義は「駝鳥が逃げさって行く」である。これでは説明が付かないので、na'āma (駝鳥) の箇所は 'amma (大衆、群衆) の誤りであろう。アラビア語注釈者の Muḥammad 'Abduh も、又英訳者の Prendergast もこのように述べている

14) この段にはサジュウの技法は用いられていない。

その後の弁舌も、内容的に〈万能薬〉と訳を持って行ったが、この辺りも定かではなく、護符の類かも知れない。「水で溶かして飲んで欲しいもの」との主人公の最後の言葉があるが、かつてのアラブ社会では、護符や呪文を水に溶かしたり、書き込んでそれを飲むことは、繁く行われていた慣行である。

マカーマの形式に触れておくと、主人公アブ・ル・ファトフ師の弁舌巧みな訴えが主要部分を構成し、主人公の正体暴露が最後に来ていること、および語り手イーサー・イブン・ヒシャームの語り手としての、本舞台と後舞台との二度の顔出しとその口上辺りは定型と言えよう。語り手と主人公との再会や終わり方も余程言葉を補っても、唐突であって物語りとしては念が入ったものとはなっていない。ともかく短いため、形式も簡略過ぎることになる。

サジュウ技法が全体に塩梅される中で、裏舞台となる最後の段落に欠如しているのは残念なことだ。本話の最大の欠点は詩の引用部分が全く無いということである。人を集めたマカーマの本舞台での盛り上がりの部分での詩の引用、そして場が変わった語り手と主人公との締めの部分には詩が不可欠なのだが。二つの場は設定されていたにもかかわらず。詩を好むアラブにとっては、明らかにもっと肉付け、盛り上がり、凝った詩句の引用が「マカーマ」としての仕上がりには必要としよう。

本マカーマの異同についてであるが、ダマスカスのカシオン山のトゥルバ（廟墓）に収められている *Fatih* 写本では 20 番目に、パリの国会図書館蔵の *Paris* 写本では 12 番目に配されている。また後者では本話のタイトルが *maqāma al-sahāb*（行雲のマカーマ）とされている。

第5話 クーファ¹⁾のマカーマ 一夜の宿を求める旅人の口上

(原文 M. 'Abduh 編 pp. 24-28 より)

イーサー・イブン・ヒシャームは語り伝えて次のように話した：私がまだ年若かった頃のこと、乗用動物に鞍を着けては(＝資金を十分持つては)あらゆるいかがわしい所へ出かけて行き、ありとあらゆる過ち(＝放蕩)に我が血統馬を突っ込ませた(その資金をつぎ込んだ)。そうしては世上の飲むに易きもの(＝甘美さ)を飲み、また時運の寛衣^{ゆるぎ}を着た(＝運も味方して贅沢三昧の生活を送った)ものである。けれども我が夜(＝黒髪)の傍ら(＝鬢・びん)に昼間(＝白髪)が広がってきて、帰るべきところ(＝来世)に向かって旅の衣の裾をたくし上げた(＝決断した)時、飼いならした乗用動物の背に乗って行動を起こした、負った借金(＝罪過)を返済しようと²⁾。

旅で同行の士となったのは、人品に非の打ち所の無い(高潔な)人物であった。二人でお互いに旅の取り決めを話し合い、自己紹介をしていく内に、読み取れたことは相手が(これから向かう)クーファの生まれで、スーフィー(イスラム神秘主義者)の信条を抱いていることであった。こうして我々は出立したわけであった³⁾。

(旅も順調であってやがて)我々はクーファに安着した、そして(誘いに応じて)彼の家に向かった。彼の家に入った時は、昼(を例えれば)その顔に髭が生えており⁴⁾、その顔の脇は緑濃くなり⁵⁾始めていた。そして(そうこうしている内に)夜が目蓋が閉じられ⁶⁾、夜の口髭が伸びた頃となった⁷⁾。

すると突然我らのドアを叩く者があった。「(着いたばかりの我々に)続いてドアを叩く方はどなたですか？」と我々が誰何すると、次のような返事が返ってきた、「夜(になっても)使いする者、用を足さねばならない者、空腹に打ち負かされ、追い回されている者です。由緒ある家柄の出ですが、災厄が、不運の時にはそうはさせてくれなくなりました。客人としてしばしお世話を願ひ、一切れのパンの無心を願うものです⁸⁾。ひもじさに、また継ぎはぎ衣(着てその寒さ)に助け求める隣人として、道中に(持て成しの)火が焚かれる⁹⁾(のを頼りとする)旅人として。その跡をうるさい犬に吠え立てられながら、またその背中に小石を投げつけられながら。さらにはその去った後では(不浄の者が来たときばかりに)その場が清められるような破目に陥りながら。その疲労した

1) クーファ Kūfa: ユーフラテス河下流沿いに正統カリフ・ウマルの時代に建設された。政治的に、又学問活動において、さらに下流のバスラと覇を競った。詳しくは拙訳アル・ハリリー作『マカーマート』第5話の解説を参照。奇しくも後輩のアル・ハリリーも第5話の表題が「クーファのマカーマ」となっている。

2) この最初の段のサジュウの語は下線順に: 'amāyatin, ghawāyatin / sā'igha-hu, sābigha-hu / laylī, dhaylī / marūḍati, mafrūḍati。

3) この段落のサジュウの語は: tajālay-nā, hālay-nā / kūfiyy, šūfiyy。

4) 昼の顔に髭が生えており baqala wajhu n-nahāri; 「昼の顔」とは、「太陽」のこと。日が髻り、夕方になることを言っている。

5) 顔の脇は緑濃くなり ikhḍarra jānibu-hu; わが国の「緑の髪」同様、アラブでも「緑」は「黒」と同義に理解されている場合も多い。即ち「陽の光が弱くなり、暗くなり始めた」ことを言う。

6) 夜が目蓋が閉じられ ightamaḍa jafnu; 完全な闇になったことを表わす。夜は闇、目蓋が閉じられるとさらにその闇が増す。

7) この短い3段目のサジュウの語は: jānibu-hu, shāribu-hu。

8) 客人としてしばしお世話を願ひ、一切れのパンの無心を願うものです wa-ḡayfun wat'u-hu khafffun, wa-ḡallatu-hu raghifun; 直訳は「その足踏みが軽い客人、その雌の迷いラクダは一切れのパン」。

9) 火が焚かれる ūqidati n-nāru; 砂漠の夜旅をする人のために、寛大なベドウィンはテントの前に焚き火を焚き、迎え入れる美風がある。この風習を「持て成しの火」ナール・ル・キラール nāru l-qirā という。訳者解説を参照。なお Prendergast の英訳では「追い出しの火」ナールッタルド nāru ṭ-ṭard としているが、これは狩猟に用いられるもので、文意にそぐわない。

ラクダは^{こんばい}困憊の極にあります、その生死は境をさ迷いつつあります。ひよこ達 (=我が子達) の所に戻るにはまだ広大な砂漠が横たわっておりますので!」¹⁰⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた: 私は(その見事な受け答えに感じ入り、誰よりも早く)自分の財布から獅子の一掴みを¹¹⁾取り出すと、(扉の外の)その人物にそれを差し出して、「必要な物は何でも言うのですよ、我々の方もそれに答えましょうから」と声をかけた。するとその人物は「最上のウッド(沈香)の芳しさが漂うのは、寛大さの火に焚かれてこそで御座いましょう。最良の美德の使者がめぐり合うのは、ただただ謝意を述べ迎え来る者達で御座いましょう。ですから余裕ある方は、慈善を施すのが宜しいかと。施しをなすはアッラーにおいても人々にあっても、その見返り無しと言うことは御座いませんから¹²⁾。あなたについてですが、あなたの望みとするところは、アッラーが実現なさり、あの高みからの御手をあなたの方へ差し伸べることで実現されましょう!」との言葉が返ってきた¹³⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語を継いだ: こうして我々はこの人物に扉を開いて、「どうぞお入り下さい」と声をかけた。とするとどうだろう、この(姿を現わした)人物はワッラーヒ(紛れも無く)我らが長老アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師ではないか! 私のほうから思わず声が出た、「おおアブ・ル・ファトフ長老殿、困窮がそれほどまでになっていようとは、いやことほど左様の様とは!」。すると師は笑みを浮かべ、詩で答えたのである¹⁴⁾;

我が要求にいささかの虚言ありとせも

lā yaghurranna-ka lladhī

汝を誑かしてまで受け取るまいぞ

anā fī-hi mina ṭ-ṭalab

我貧窮にあらずして偶さか現る

anā fī tharwatin tushaqqu

遊び心の外套綻ばす気紛れが

la-hā burdatu ṭ-ṭarab

なにその気になりさえすれば楽なもの

anā law shī'tu la-ttakhadhtu

山吹色の金の山を築くことなど

suqūfan mina dh-dhahab

(詩型 ハフィーフ khafīf 調 bā'iyya b 脚韻子音詩)

第5話 クーフアのマカーマ 完

10) この段のサジュウの語は: bābu, muntābu / barīdu-hu, ṭarīdu-hu / ḍurru, murru / khafīfun, raghīfun / jū'i, marqū'i / safari-hi, athari-hi / ḥuṣayyātu, 'arāṣātu / ṭalīhun, tabriḥun, fīhun.

11) 獅子の一掴みを qabdata l-laythi: 同じ一掴みであっても、指先の一掴みではなく、掌全体まで使った一掴みのこと。大型獣の獅子を例にした掴み方の表現。わが国の「鷲掴み」に相当しよう。勿論、財布の中身はディーナール(金貨)ではなく、ディルハム(銀貨)の方である。

12) 施しをなすはアッラーにおいても人々にあっても、その見返り無しと言うことは御座いませんから lan yadhhaba l-'urfu bayna llāhi wa-n-nāsi: この言い回しは、謂わば本歌取りであって、預言者と同時代、風刺詩で名高い詩人フタイヤ Ḥutay'a の詩行から採られ、言い回しとして一般化したもの。

13) この段のサジュウの語は: su'ālan, nawālan / 'ūdi, jūdi / birri, shukri / yu'āsi, nāsi / āmāla-ka, la-ka.

14) この段のサジュウの語は: khaṣāṣatu, khāṣṣatu.

第5話 訳者解説

語り手イーサー・イブン・ヒシャームは気心知れた道連れを得て、クーファに向かう。安着して、道連れの家へ厄介になる。休むもつかの間、その家に一夜を求めて、困窮した旅人がやってくる。その口上の見事のこと、二人はこの旅人を中に入れる。するとこの旅人は主人公アブ・ル・ファトフ師であった。師は、遊び^{すき}として楽しんでいるだけ、と。

旅では道連れを選ぶことが大事である。さもないと、時と場所をすべて共有するため（相手次第では）逃げ場が無くなってしまふ。逆に善良な道連れを得れば、旅はこれ以上楽しいことはない。「旅で同行の士となったのは、人品に非の打ち所の無い（高潔な）人物であった。二人でお互いに旅の取り決めを話し合い、自己紹介をしていった」背景がここに描かれている。しかも相手はスーフィー（イスラム神秘主義者）の信条を抱いている様子であったから、謙譲を旨として、敬虔な信者であることが、安心材料を増している。

「昼の顔に髭が生えており、その顔の脇は緑濃くなり始めていた。そして（そうこうしている内に）夜の目蓋が閉じられ、夜の口髭が伸びた頃となった」。興味深い、そして新奇な比喩表現である。人間の外姿、言動を自然現象に喩えることがあるが、逆の自然現象を人間の外姿、言動に喩えるこのような事例は奇異といえるであろう。恐らく著者アル・ハマザーニーのパディーウ（新奇、驚異）振りの一端がここに見られると思われる。

「最上のウッド（沈香）の芳しさが漂うのは、寛大さの火に焚かれてこそで御座いましょう」。この言い回しの中には香を「焚く」優雅なアラブの伝統と、持て成しの火を「焚く」アラブの寛大さの風とが合わさっており、言い得て妙と言えよう。注9の所で「持て成しの火」のことに言及したが、砂漠の夜旅が日常化した中で、飢えや疲労で悩む旅人のために、寛大なベドウィンはテントの前で火を焚き、迎え入れる美風がある。特に寒風吹きすさぶ冬場、テントで風を防ぎ焚かれる火はことの外喜ばれた、例え一杯のお茶の馳走でも。この風習が「持て成しの火」ナール・ル・キラール nāru l-qirā なのである。Prendergast の英訳では「追い出しの火」ナール・タルド nāru t-tard としているが、これは獲物を嚇かす火のことで、獵場での用語である。詳しくは拙著『砂漠の文化』第9章「砂漠と火」を参照。「持て成しの火」は本マカーマートの中でも、第9話注26、第14話注14の辺りにも再登場する。

マカーマの形式から観ると、本舞台には上がっていない主人公がその袖ないし花道でストーリーを展開している体裁となっている。そして主人公が本舞台に上がった時には、すでに結末を迎えているという設定である。それゆえ今回は舞台の袖が本舞台であって、本舞台は主人公の正体暴露の後舞台となっている構造である。この家の内外、玄関の扉を挟んでの問答で筋立てを作り上げるマカーマは、もっとも印象深くはアル・ハリリーーの『マカーマート』の奇しくも同じ第5話で観られる。主人公が一夜の宿りと食べ物求めて戸を叩いた先は、捨てた妻と子供が引っ越した新居であった設定である。扉の外の主人公は、内の我が息子との応答から、次第に真相を思い知らされることになる。自分の妻はおろか、わが子さえ一目も会えずに後ろ髪を引かれる思いで引きあげざるを得ない、そうした興味深いストーリーが展開されている。本話と比較すると、その充実ぶりには、大成者としてのアル・ハリリーーの才覚が窺えよう。しかもアル・ハリリーーはそれだけで一話完結とはせずに、「ここに辿り着いて休ませてもらう前に、こんなことがあったんですよ」と、この切ない打ち明け話を単なる挿話として、マカーマを進めているのであるから。

詩の引用は盛り上がりの本舞台の場面には見られず、終末の正体暴露、語り手と主人公とのやり取りの場面での一か所になっている。サジュウへの配慮、語り手の二度の口上はほぼ定型となって

いる。それもあるのか、現存する最古の写本とされる 1225 年にまとめられ、1492 年にワクフ（寄贈）で出版された Aya Sofya 写本では巻頭を飾る第 1 マカーマに配されている。他に Paris 写本では第 12 話となっている。この Paris 写本では第 5 話タイトルは *maqāma al-ṣūfī* (神秘主義者のマカーマ) とされている。旅人＝主人公と見立てているのであろう。

第6話 獅子のマカーマ 獅子に殺され、盗賊に殺され、さらに二つの殺し屋に悩まされて

(原文 M. 'Abduh 編 pp. 29-37 より)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて次のように話した：私にはあのアレキサンドリア人¹⁾のマカーマ集と彼の語りが逃亡者の耳すら奪い、小鳥達にさえ刺激を与えているほどだ、との噂をことあるごとに聞き及んだものである。彼の詩はその繊細さときたら聞く者の五体の隅々までに浸透するということだし、その微妙さは巫者²⁾の透視をも影薄くしてしまうということだ。私もまた彼の末永く生きられんことを、また彼に再会の機会が与えられ、相変わずの創意の健在ぶり、技巧の冴えの驚異を味わいたいことをアッラーに祈ったものであった³⁾。

しかし時が(彼に味方せず)あらゆる機会を捉えては、彼が幸運に向かうを妨げ、追い討ちをかける有様であった。そしてそれは私がある商用でホムス⁴⁾に出かけた折のことであった。同行者には切に望んだもののだ、夜の綺羅星の如き(=何不自由無き)、また馬の背の鞍覆いの如き(=平らに和を重んずる)一団の面々と、彼の地に向かえる様にと。我々一行は出来るだけ距離を短縮し、旅程を詰めるよう⁵⁾心掛けた。ラクダの瘤の如き岡を突切って行ったのだが、乗る高貴な駿馬を頼りにしていた。しかし(強硬な行程のため)さすがの馬達も杖のように痩せ細り、弓のように体が曲がってしまった。そうした折、我々の前にアラウ⁶⁾とアスル(ギョリュウ)が生える山の麓のワジが開けて見えて来た、その樹影は髪の房を伸ばしお下げ髪に垂らした娘のようであった。(熱い陽射しと疲労感から)我々はその木陰に避難するを余儀なくされ、動物から降りて休息をし、昼寝をとることにした。乗馬をつなぎ輪に結わえた後、一同午睡^{まどろみ}に入ったのであった⁷⁾。

と、突然馬の嘶きが我々を驚かせた。私は己の愛馬の方を見やった、馬は(緊張の余り)両の耳をピンと立て、両の目を血走らせているではないか！手綱の縋り紐を口先で噛み切ろうとしており、(力む余り)蹄で大地を削り上げているのだった。次の瞬間には(すべての)馬達が大地を蹴り立てて、放尿をしたかとおもうと、手綱を千切って、山の方に駆け去ってしまったのだ。我々は誰しも己の武器の方に飛んで行った。するとどうだろう、そこに殺しの衣を纏った一頭の獅子が茂みから姿を

1) アレキサンドリア人 al-iskandariyy; 本マカーマの主人公アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフのこと。ここで初めて執筆中のマカーマートについて言及しているが、一書として完成していないのに、その作品が好評を得ているとの著者の認識があるということは、マカーマ1篇ないし断章を折に触れ、公にして世の品定めを受けていたものと思われる。アル・ハマザーニーがいくつかのマカーマを編んだか、その作品数は明らかでない、恐らく400篇を超えるであろうといわれるのも、結局その一因は断片的に公にしていたからなのであり、また断片的な作品であったため、この故に散逸の憂き目にあった作品があったろうことは想像に難くない。

2) 巫者 kahana; カーヒン kāhin の複数形。カーヒンとは「見えないものを予言する者」であって、感性や想像に特異な能力、透視力をもっている者であり、従って「巫者」とか「予言者」とかに当たる。預言者ムハンマドも初期には敵対者にカーヒンと呼ばれていたものである。

3) この冒頭の段のサジュウ(文末・句末押韻技法)の語は下線部順に: nafūru, 'uṣfūru / riqqatan, diqqatan / baqā'a-hu, liqā'a-hu / hālātī-hi, ālatī-hi。

4) ホムス Hims; 古くはエメッサ Emessa として知られる、シリアの中央部にある都市。オロンテス河が貫流し、南北にダマスカス・アレppoを結び、東にシリア砂漠を越えてバルミラそしてユーフラテス河に至る交通の要衝である。637年イスラム化され、その征服將軍「神の剣」と謳われたハーリド・イブン・ワリードの廟墓が祀られている。

5) 旅程を詰めるよう nasta'silu sha'fata-hu; 直義は「我々はその元を根こそぎにする、根絶する」であり、根絶やしにする、可能な限りゼロに近づけること。sha'fa とは「根」であるが、「根元」の意味で植物以外のものにも使われる。上の句を用いた有名な諺、というより呪い言葉に、ista'sala llāhu sha'fata-hu「アッラーが彼の根を根こそぎにしますよう！→彼の一家を根絶やしにしますよう！」がある。

6) アラウ alā; Muhammad 'Abduh の注釈によれば、アラウとは「その葉も実も苦味のある木、常緑樹で樹形が美しい。」そのため、「外見は美しいが内実は醜い人」に例えられる。

7) この段のサジュウの語は下線の順に: himsa, hirsa / layli, khayli / masāfata-hu, sha'fata-hu / nijādi, jiyādi / 'išiyyi, qisiyyi / jabalin, athlin / ḍafā'ira, ghadā'ira / nughawwiru, naghūru / afrās, amrās。

現す⁸⁾ではないか！皮膚（＝体）を膨らませ、牙を剥き出し、威厳に満ちた目つきで、誇り高さをうかがわせる鼻つきをし、闘争心を失うことなどおおよそ無く、怯えなど微塵も感じさせない胸つきをしていたやつが！⁹⁾

我々は危ぶんで嘆き合ったものである、「深刻な事態だ、大変なことになった！」と。ところが急ごしらえの我々の軍団の中から一人の若者が（勇敢にも）獅子の方に立ち向かっていくではないか！；
黄褐色の肌をした¹⁰⁾ 高貴なアラブの出の者 皆に水汲むとせば

akhḍaru l-jildati fī bayti ‘arab

皮パケツの最上部 十字の取っ手に至るまで水滴たせし者ぞ¹¹⁾

yamla’u d-dalwa ilā ‘aqdi l-karab

（詩型 ラマル ramal 調、bā’iyya b 脚韻詩）

この若者、宿命に導かれたような決断力を見せ、抜き身全体が切れ味鋭き剣を手に、立ち向かった。しかし獅子の獰猛さの方が立ち勝り、その脚でいい様に若者をもてあそんでいた。そして遂に若者の手と口に襲い掛かった。しかしすぐさま獅子は闘争の場を今までの相手から、仲間（達）の方に移したのだ。今や死の瞬間がその仲間（＝新たな死すべき若者）を呼ぶに至った、恰も死が呼んだ前の若者がそうであつたように。その若者は刃向かっていったが、恐怖が彼の手に枷をかけてしまって、地面に倒された。獅子は若者の胸をベッドとした（＝若者に覆いかぶさってその口に血煙りを浴びせた）¹²⁾。

（折を窺っていた）私はすかさず己のターバンを投げて、若者にそれで口をふさぎ、己の流血を防ぐよう指示した。若者は（そうすることで気力・体力を持ち堪えと）立ち上がって、獅子の体に致命的な一撃を突き刺した。若者は（最後の勇気を振り絞った後）恐怖に怯えたまま死んでいった。一方獅子の方も腹部に負った深手から死んでいったのである。

とりあえず我々は（取り戻すべく）馬の後を追った。立ち止まっていた馬は戻すことが出来たが、さらに逃げ去った馬は当座は放置した。すぐに現場に戻った我々は死んでいった仲間に対して手厚い埋葬をしたのであった¹³⁾。

死者となった同僚 その遺体の上に土降り掛ける時となるや

fa-lammā ḥathawna t-turba fawqa rafiqi-nā

我悲しみに泣き暮れたり その悲嘆の時たるやこれ程の時があつたろうか！¹⁴⁾

jaza’nā wa-lākin ayyu sā’ati majza’i

（詩型 タウィール ṭawīl 調 ‘ayniyya ‘ayn 脚韻詩）

8) 一頭の獅子が茂みから姿を現す tala’a l-asadu min ghābi-hi；この表現は「茂みのライオン」asadu l-ghāba の言い回しから採られている。「茂みのライオン」とは茂みにカモフラージュされて、獲物を待ち構えるライオンの習性を言ったもので、「機会を狙う、好機を待つ」の意味で一般に用いられている。イブヌ・ル・アスィール・アル・ジャザリー Ibn al-Athīr al-Jazarī の記したサハーバ（預言者の教友）達の伝記のタイトルも、この *Asadu l-Ghāba* になっている。

9) この段のサジュウの語は下線の順に：udhnay-hi、‘aynay-hi / mashāfiri-hi、ḥawāfiri-hi / abwāl、ḥibāl、jibāl / ghābi-hi、ihābi-hi、anyābi-hi / ṣalafan、anafan / qalbu、ru’bu。

10) 黄褐色の肌をした akhdar al-jilda；直義は「緑の肌」した。akhdar とは、注釈者 Muḥammad ‘Abduh によれば、ここでは asmar（黄褐色の）の意味と解釈する。高貴な、血統高いアラブは、「samra（黄褐色）の肌をしていること」を非常に誇りにしていた。この誇りはイスラム以前から存在していたものであり、アフル・ル・バイト（お家の人々）と尊崇される預言者ムハンマドの血統とは別であった。

11) この詩行はウマイヤ朝の大詩人ファラズダク（170/786 歿）と同時代詩人ラハビー al-Faḍl ibn ‘Abbās al-Lahabī からの詩から引用したものである。

12) この段には別説あり。訳者解説を見られたい。この段のサジュウの語は下線の順に：qadrūn、athrun / qadami-hi、fami-hi / akhā-hu、da’ā-hu / ilay-hi、yaday-hi。

13) この段のサジュウの語は下線の順に：fama-hu、dama-hu / khawfi-hi、jawfi-hi / thabata、af lata。

14) この詩行の後半部は、英訳者 Prendergast の注釈によれば、プレイスラム期の詩人 Ka’ah の作品から採られたもの

(気を取り直して)我々一行は再び旅路につき砂漠に分け入って行った。(高地から)低地へと下っては旅を続け、遂には水袋の底が見え、糧食が尽きたか、殆んど尽きかかったのだ。先へ進むか戻るかの判断が難しかった。何はともあれ、二つの殺し屋を我々は恐れたものだ、咽喉の渇れと空腹とである。そんな折都合良く一人の馬に乗った人物が視界に飛び込んで来た。ともかくも我々は彼の進行方向へと向かい、そちらの方角に歩を進めていった。騎乗の人物は我々が合流すると、フル(高貴)な乗り馬から降り、(神に感謝の礼拝を捧げるかのように)大地に唇をつけ、両手で土に接し(額づい)た。その後この人物は一行の中から私を選んでやって来て、私の馬の鐙^{あぶみ}に口づけすると、私の傍らに身を寄せてきた¹⁵⁾。

そこで私は彼をまじまじと見た。何とその顔は光る雨雲から発する閃光のように輝いており、またその造作の何と立派なことか！(恰もかくの如し)「視線上げその顔に移せば、はた視線下げその脚見やれば、(思わず溜め息の出るほど)！頬には既に濃き髯の生え、口には新鮮な髭生じ腕の筋肉締めまりよく、そのしなやかな体つき！」。この若者の出自を辿れば元はトルコ人、装いも王家の風であった。(溜め息をついた)我々の口からは思わず出ていた、「如何されたのです？そなたの父親など亡くなればよいのに！¹⁶⁾」との言葉が。若者が答えるには、「私はある王に伺候していた者ですが、(王の不興を買ってか)王は執念として私を亡き者にしようと決めたのです。仕方なく私は盲滅法逃げ廻りました¹⁷⁾。その果てにこうしてあなたがたが御覧になるように私はここに至ったわけなのです」。彼のありのままのその姿は、彼の言ったことが本当であることを証明していた。ややあってこの若者が言葉を掛けてきた、「私はあなたの召使と今日はなりましょう。私のものはあなたのものとなりましょう」と。答えて私は、「吉報はむしろあなたからなのです、が、あなたのためでもあるのですよ。旅はあなたを広大な空間に、新鮮な環境に導いてくれたのですからね」と応じた。一行の面々も私に祝福の言葉を掛けてくれた¹⁸⁾。

この若者は一同を眺め回したが、その一瞥は我々を射殺す程であったし、また彼の言葉はその一言一言が我々を十分魅了するものであった。それから若者は言った、「お偉方の皆さん、この山の麓に泉があります。水を欠く荒地を皆さん渡って来られました。ですからあそこへ行って水を補給されたら宜しいと思います」。そこで我ら一行は乗る馬の手綱を彼が指差した方向に向け出かけた。そうしてそこに到着したわけであったが、猛暑は容赦なく我らの体力を消耗させたし、(その猛暑を喜ぶ)イナゴは木々の枝に登っていた¹⁹⁾。若者が言うには、「このたっぷりとした木陰で、この甘い水場の

と言う。しかし、その注の典拠である *Kitāb Ash'ar al-Hamāsa* (p. 95) をみると、カアブ Ka'b のミスプリントと判明。カアブ Ka'b ibn Zuhayr (d. 622 頃)。ムアッラカートに選ばれた大詩人ズバイルの息子。最初はムハンマドに敵対していたが、改倭して有名な詩 *Bānat Su'ād* (スアードは去れり) を預言者に献じてムスリムになって以降詩作活動を止める。ここでは以下の詩行の下半詩行を著者が本歌取りしたもの：

彼を殺したは我なるか、かくなる自覚我襲いし時

wa-lammā ra'ytu anna-nī qad qataltu-hu

我悔悟に明け暮れたり その悔悟の時たるやこれ程の時があったろうか！

nadimtu 'alay-hi ayya sā'ati mandami

15) この段のサジュウの語は下線の順に：mazādu, zādu, nafādu / rujū'a, jū'a / šamda-hu, qašda-hu / shafatay-hi, yaday-hi / rikābi, janābi。

16) そなたの父親など亡くなればよいのに！ lā abā la-ka!；相手が余りに美しかったり、醜かったりした時の、また自分で判断能力がつかない時の慣用表現。相手に面と向かって直接に言わず、その親を羨んだり、腐したりする言い回しである。類似した言い回しに後述する「お前の母などくたばっちゃまえ」がある。なお第14話注9も参照。

17) 盲滅法逃げ廻りました himtu 'alā wajhi；直義は「私は咽喉が渇れて顔にまで表れた」であり、余りに咽喉の渇きが激しく、水を求めて気遣いのように盲滅法歩き回ることから由来する。

18) この段のサジュウの語は下線の順に：mutahallil, tushil / ikhḍarra, ṭarra / mal'ānu, rayyānu / turkiyyun, malakiyyun / hamm, hamm / ḥālī-hi, maqālī-hi / raḥbin, raṭbin。

19) イナゴは木々の枝に登っていた rakiba l-janādibu l-'idāna；イナゴ(単数形は jundub)は、カメレオンと共に暑さに強く、強烈な日射に対しても向かい合って対抗する、と言われる。

ほとりで昼寝をされたら如何ですか?」。頷いて私達は、「あなたもそうされたら」と誘った²⁰⁾。

若者は乗馬から降りると、締めていたミンタカ腹帯²¹⁾を外し、クルトカ外着²²⁾を脱いだ。我々の眼から遮られたのはギラーラ下着²³⁾だけであったが、それとて体が透けて見えるものであった。あの体ならば疑いも無く(楽園の美少年達) ウィルダーン²⁴⁾と競い合えるであろうし、(変幻自在の容姿を持つ守護天使達) ジナーン²⁵⁾と争った末に(楽園の番人) リドワーン²⁶⁾の許から逃げ出して来たとしても宣なるかなと思わせた。こうした出で立ちになると若者は、馬鞍のところへ行き、それを馬体から取り外した。それから馬群のところへ行き、鯀の面倒をみた。一座の場に戻ってくると、その場に香水を振り撒いたのである。一同の(魅入られた)良識は彼に向けては戸惑いを見せ、我々の視線はただただ彼を追うだけであった²⁷⁾。

そこで私は彼に声をかけた、「オオ、お若い方、あなたの奉仕の何と気の利いたことよ、一連の振る舞いの何と手回し良いことよ!それにしてもあなたを見限った主人は何と呪われたことか、またあなたが鼯鼠にしてくれた者は何と祝福されたことでしょう!あなたに具わった善意を如何にアッラーに感謝して良いやら!」。すると若者が応答するに、「こんなことで驚いているようでは、これからやる私の振る舞いをどう評しますことやら。我が技の軽快さに、一連の振る舞いの隙の無さにあなたがたが賛同してくれますかどうか、一座の皆さんはわたしを如何思いますことやら。我が才能の一端をあなた方に披露させてもらった後では、私への好意が増すことにはなりますまいと思いますよ」。そこで我々は懇願した、「どうぞ、ぜひ見たいものです!」と。応じた若者は我々の一人の所有する弓のところへ行き、それに矢を番えと、弓を一杯に引き、中空に放った。すぐさま二の矢で追いかけて、空中で前の矢を引き裂いて見せたのである。若者がさらに言うには、「皆さんには別の技芸をお見せしましょう」。こういつてから若者は私の箠を置いた所に足を延ばし、それを手に取ると今度は私の馬のほうに向かい、それに乗り込んだ。そして矢を番えや、あろうことか我らの仲間の一人に放ったのである!矢は違わず我が同僚の胸を射当てた。次の瞬間には他の矢が(後ろ向きに倒れる)彼の背中を貫いていたのだ!²⁸⁾

(この事態の急変に驚いて)私は怒鳴った、「恐ろしいこと!何をしますのですか?」。若者は(平然と)答えるには、「黙りなさい、不埒者奴が!さあ、あんた達皆、互いに相手の手を縛り上げるのだ、さもないと己の唾で息の根を止めることになる(=首を絞め殺してやることとなる)からな!」。何がなんだかわからぬまま私達は命令に従っていた。(逃げるにせよ戦うにせよ)我々の持ち馬達は枷を掛けられ、馬鞍は外され、所持する武器は遠ざけられてしまっていたのだから。若者は馬上の騎手となり、我々

20) この段のサジュウの語は下線の順に: alhāzu-hu、alfāzu-hu / 'awrā'a、mā'a / abdāna、'idāna / rahbi、'adhibi。

21) ミンタカ腹帯 mintāqa; または mintaq、複数形は manātiq。ヒヤーサ hiyāsa とも言い、腹帯 (hizām) でも、幅が長いものを言う。女性用で高価なものは宝飾される。

22) クルトカ外着 qartuqata-hu; カパーウ qaba' (袖のたつぷりとした男子用外着) の中でも短めのもの。チュニックとかジャケットと訳される。ペルシャではクルタ kurtah と呼ばれ、そこから外来した。

23) ギラーラ下着 ghilālā: 肌と上着の間に着るもの、下着、胴着。より一般的な「下着」はシアール shi'ār。 「ギラーラ下着をつける、着用する」動詞は ghalla、aghalla である。語根義は「何かの間にはめ込む、入れる、挿入する」。

24) ウィルダーン wildān; 単数は walid で「少年、若者」の義、アラビア語注釈者の Muḥammad 'Abduh によれば「天国にいて、その住人達に仕える者」とある。グラーム ghulām のイメージ、即ち姿・形良く、見目麗しい若者が想定されているのであろう。『コーラン』56: 17、73: 17、76: 19 他にもその記述がある。

25) ジナーン jinān; 単数は jinn、前のウィルダーンと同じく天国の住人に仕える者達、ということだろうが、むしろ変幻自在で容姿をいくらでも変えることが出来るジン (jinn 精霊・魔精) との関連で捕らえていたほうが良いであろう。

26) リドワーン riḍwān; 天国を守護し、管理する天使。

27) この段のサジュウの語は下線の順に: mintāqata-hu、qurtuqata-hu / wildān、jinān、riḍwān / hashsha-hā、rashsha-hā / fi-hi、'alay-hi。

28) この段のサジュウの語は下線の順に: khidmati、jumlati / fāraqta-hu、rāfaqta-hu / khidmati、jumlati、rufqati / ṭurafan、shaghafan / samā'i、hawā'i / ṣadri-hi、ṣahri-hi。

はただ歩かされ、弓は彼的手中にあり、それで背後からいつでも撃てる体勢にあった。その矢で腹部を撃とうが胸を射抜こうが自在であった。ようやく若者が本気であることを感じ取った我々は、皮紐を手にとって、お互い同士で手を縛りあった。私だけ一人残った。私の手を縛ってくれる相手がいないのである。すると若者が「袖から腕を裸出しておけ！」と命じてきたので、その通りにした²⁹⁾。

彼は馬上からやおろ降りと、我ら仲間の一人一人に平手打ちを食らわせると、すぐに着ている衣類を剥いで廻った。私のところにやって来た。私は新調のブーツを履いていた。若者は怒鳴った、「それを脱いだらどうだ！お前の母などくたばっちまえ！」。「この靴は生乾きのまま履いたものですから、自分ひとりでは抜くことは出来ないんです」と私が答えると、「それじゃあ俺が脱がせてやろう」、こう彼は言うのと私の間近に寄ってきて靴を脱がせようとした。私はもう片方のブーツの中に潜ませておいたナイフに手を伸ばした、若者はもう一方のブーツに掛かりきりであった。機を見て私は彼の腹部にナイフを突き刺した、思い切り突き刺したので刃先が奴の背中に突き出たかと思うほどであった。奴は口をたった一口大きく開いてうめいたかと思うと、石を一口に飲み干した(＝顔面から地面にドウと倒れた)³⁰⁾。

私は体勢を立て直し仲間の方に歩いて行き、彼らの(結わえられた)両手を解いてやった。我々は二人の死体(や遺物)の処分をする羽目になった。(射抜かれた)仲間の方とは見ると、既に犠牲者となっており³¹⁾、墓場の土に帰してやることにした。

(彼らを葬った後で)我々は再び旅を続け五日目の夜、目的地ホムスに到着した。そしてスークの広場で荷下ろししていると、一人の男に目が留まった。彼は(空の)ジラーブ(旅用袋)と旅杖を前に差し出し、後ろには幼い息子と娘を従えていた³²⁾。そしてこう訴え掛けていた：

神の祝福があらんことを、我がジラーブに

raḥīma llāhu man ḥashā

施しもので満たしてくれる奇なお方に

fī jirābī makārīma-h(u)

神の御慈悲垂れ給わんことを、高貴なる出の

raḥīma llāhu man ranā

サイード家³³⁾ ファーティマ家³⁴⁾ の者慈愛まんとする方に

li-sa'īdin wa-fāṭimah

まことこの息子はあなたがたの奉公人になりましょう

inna-hu khādimun la-kum

またこの愛娘はあなたがたの召使女として仕えましょうぞ

wa-hya lā shakka khādimah

(律格型 ハフィーフ khaffīf 調 mīmiyya m 脚韻詩)

29) この段のサジュウの語は下線の順に：taṣna'u, luka'u / rafīqi-hi, rīqi-hi / marbūṭatun, maḥṭūṭatun / ba'īdatun, rajālatun / zuhūra, ṣudūra / jidda, qidda / waḥdī, yadī / ihābi-ka, thiyābi-ka。

30) この段のサジュウの語は下線の順に：ilayya, 'alayya / naz'u-hu, khal'u-hu / khuff, khuff / baṭni-hi, matni-hi / faghara-hu, ḥajara-hu。

31) 既に犠牲者となっており qad jāda bi-nafsi-hi；直義は「彼は既に自らをもってよき者・優れた者としていた」であり、普通は＜殉教者＞に対しての用語である。

32) この段のサジュウの語は下線の順に：nafsi-hi, ramsi-hi / furḍatin, bunayyatin, 'uṣayyatin。

33) サイード家 Sa'īd；より一般にはサイイド Sayyid と称され、預言者ムハンマドの家系(Ahl al-Bayt)に繋がり、その子孫を言い、社会からの尊崇を受けた。

34) ファーティマ家 Fātima；同じく預言者ムハンマドの家系に繋がり、預言者の娘ファーティマをその祖とする子孫である。ファーティマはキリスト教のマリア信仰とおなじく女性の尊崇を受けた。シーア派では特にこの傾向が強く、エジプト・北アフリカにファーティマ朝(909～1171)を成立させている。

語り手イーサー・イブン・ヒシャームは話を続けた：私は己に問いかけた、「ひょっとしてこの御仁はあのアレクサンドリア人では？その噂は聞き及んでいるし、かねてから尋ねてみたいと思っていたあの？」。(改めてよく観た)するとどうであろう、彼はあの方だったのだ！³⁵⁾そこで私はいそいそと彼に近寄って行き、言葉をかけた、「あなたの裁量を決めてください(=いくら欲しいのですか)」。すると彼は「(たった)一ディルハム(銀貨)です」との返事。私は謳い掛けた：

ご希望とあらばディルハム貨 その何倍も与えましょうぞ

la-ka dirhamun fī mithli-hi

我が余命、我を安全^{やすら}くしている限りにおいては

mā dāma yus‘idu-ni n-nafas

されば汝が要する金額^{がく}勘定されたし

fa-ḥsub ḥisāba-ka wa-ltamis

要求^{もと}められしもの必ずや叶えられましょうから

kaymā unīla l-multamas

(律格型 カーミル kāmīl 調 sīniyya s 脚韻詩)

吟じ終えてから私は長老に語りかけながら(手渡していった)、「このディルハムで二つ目、これで三つ目、これで四つ目、次に五つ目……」。こうして二十ディルハムまで渡し続けた。それからまた尋ねた、「ご家族は何人です？」。長老は「二十斤³⁶⁾」でと答えたので、人に命じてその相当額を渡した。その折にも私は懇^{ねんごう}の言葉をかけてやったのであった、「神の助け無しには勝利は御座いません、また不運に対抗する手段などあるものでは御座いませんから！」³⁷⁾

第6話 獅子のマカーマ 完

6話 訳者解説

今回のマカーマはアル・ハマザーニーのマカーマ集の中でもよく取り上げられる傑作である。著者アル・ハマザーニーのパディーウ(驚異)振りが面目躍如とした、彼のマカーマの作品群でも代表作の一つに数えられるに十分値しよう。本話以前の作品は、一篇一篇が短かすぎたし、内容も形式も全体に整った纏まりがあるわけではなく、いわば断章と称してよいような、一部を切り取ってストーリー化しているだけで、いわば試作品と言った態であった。従って解説をする必要にも迫られなかった。今回は一篇として十分な体裁を整えており、内容も起伏に富み充実している。山場が三つ設定されており、そのうち二つは殺人が生じるショッキングさを内包する。いずれもシリア北部の町ホムスに至るシリア砂漠の途上で生じている設定である。

一つは木陰で小休止しているところをライオンに襲われる。隊商仲間の一人の若者が、そして次の若者が敢然と立ち向かう。二番目の若者は倒されて口から血を吹き出しながらも、ライオンに致

35) 彼はあの方だったのだ fa-idhā huwa huwa：英語の It is he か、It is him かの表現法であり、前者の言い回しはバスラ派が採り、後者の言い回しを採ったのがクーファ派であった。後者は fa-idhā huwa iyyā-hu としたのだが、これは強調構文なので英語では厳密には It is him that it is と言うことになる。両派は初期アラビア語の確立を目指して互いに研鑽に励んだ。

36) 二十斤 ‘ishrūna raghīfan：raghīf(複数形は arghīfa)とは、パンの一塊をいい、わが国の「一斤」が相当しよう。扶養家族の表現を何人と言わず、卑下して「パン」の単位を換喩としたわけである。sāsān(乞食・門付)集団、ṭufayf(食客)集団の隠語の可能性も否定できない。

37) この段のサジュウ語となるのは、最末の khidhlāni、ḥirmāni のみ。

命的一撃を与えて、果ててゆく。仲間の二人のまさに「獅子」奮迅の働きであった。字面では二人の犠牲者が出たにも拘わらず、死者のもとに戻り、埋葬したのは *rafiq* (道連れ、仲間、同僚) 一人であり、アラビア語に厳然としてある双数形 *rafiqān* (二人の道連れ 斜格は *rafiqayn*) と表記されていない(この部分は韻の関与はない)。また死を悼んでの詩の前半詩行にある「死者となった同僚」の原語も *rafiq* である (こちらは韻の関与の可能性はある)。それ故前者は殺されずに済み、犠牲者となった勇敢な若者は二人目であったと解釈する。

二つ目の殺人は糧食も、飲料もか細くなって、助けを必要としていた時、折りよく通りがかった若者に、親切にされ水場に案内されてくつろぐ。ハンサムでよく気付き、世話好きと思われたこの若者は、一行の世話をして、武器や馬から遠のかせた。しかしそうしたのもすべて強奪が目当てであった。語り手から弓矢を借り馬上の人となり、弓術の腕前を一同に披露すると、その直後に豹変して盗賊の本領を露とする。隊商仲間の一人を射殺してしまうのである。瞬時にこの残忍な荒業をやつてのけ、一同への見せしめとした。それから皆にお互いの両手を皮ひもで縛るように命じ、それが完了すると一人一人に平手打ちを食らわせ、上着を剥いでゆく。語り手の所まで来て新調の靴を脱がせようとする。語り手はペアが居らず、一人縛られもせず両手を挙げたまゝの状態にさせられていた。若者が一方のブーツを脱がせにかかったとき、他のブーツの中に潜ませて置いたナイフで若者の腹部を力任せに一突きした。若者は「石を一口に飲み干し」て悶絶して果てていく。

この二つの山場の間に人間が三人殺されているのである。殺人のような深刻なシーンはまさに「劇」であり、筋の展開を相当集中させることになり、残虐な行為は動きのある舞台回しを提供し、物語性を面白くさせることになる。しかし殺人を組上に上げること自体、道徳や人倫の問題を生ずることにもなる。本著者のアル・ハマザーニーに続いて、『マカーマート』を大成したのはアル・ハリリーである。訳者は既に後者のもの50篇を訳出しているが、こちらには殺人の類は一切出てこない。せいぜい睡眠薬を飲ませて眠らせて金品を掠め取るぐらいで、残虐な行為や血みどろのシーンや動きは姿を見せない。アル・ハリリーの引っ込み思案で小心者の道徳観や考えを表わしており、この辺りが旅好きで、定着しないアル・ハマザーニーの、両著者の違いの一つと言えそうである。描写に迫力があるのも、二度盗賊にあっている実体験の産物であったろう。

第三の山場はホームスに着いてから生ずる。ここで初めて主人公アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフが登場する。彼は「二つの殺し屋」に苛まれていると、物乞いとして二人の子供を連れて登場する。そして哀れみを乞う詩を訴え掛けている。語り手イーサー・イブン・ヒシャームはすぐにそれがアブ・ル・ファトフ師だと気付き、いくら欲しいのかその相談に乗ってやるところで終幕となる。

ストーリーとしては、主人公の活躍の場が少なく、最後にとって付けて登場させた感が否めない。前の二つの山場のなかに、主人公の活躍の場を設定できなかったものか。翻って物語の中では客観的に徹するはずの語り手が、本話では主人公張りの活躍を見せているのである。第一の山場でライオンに襲われ、隊商仲間の二人目の若者が敢然と立ち向かって行き、力及ばず倒されて口から血を吹き出してしまふ。すかさず語り手は己のターバンを投げ流血を防がせる。そしてライオンに致命的一撃を与える手助けをする。第二の山場では、補助的な役割どころか主役となって、無慈悲で逞しい強盗の若者を刺し殺している。この活躍ぶりは「語り手」の役割としては場違いの感を否めない。この役割を主人公に振る配慮は出来なかったものか、一考を要するところと言えよう。

獅子に殺され、盗賊に殺され、二つの殺し屋に悩まされる。ところで、本話のタイトル「ライオンのマカーマ」とは意味深い。第一の山場は本物のライオンが登場し、第二の山場では人間のライ

オン、ここではその残忍性・獐猛性が比喩化されていよう。そして第三の山場は同じく人間のライオンであるが、その意味するところは「他人から物品を掠め取るにこの人以上はいないペテンの<王者>」が主題となり、いずれもアナロジーを効かせたライオンで統一されている、と言う見方が出来よう。

サジュウ（押韻散文）の文体は、ほどほどに保たれており、各段落が終わるたびごとに記しておいたが、これまでの作品よりもサジュウ体で通す配慮も見えてとれる。詩に関しては、短いながらも何箇所かにわたって挿入されている。それに何の断りもなく急に詩が挿入されている。おそらくこの詩を時折散りばめてストーリーを展開させるのが、マカーマの創作としてアル・ハマザーニーの意図したものではなかったろうか。この作品はその意味でもマカーマのひな形の一つと言い得るであろう。本舞台を三つ揃え、最後の舞台を裏舞台ともしている配慮。この演出は、二度目の語り手の口上をその裏舞台とする直前に据えていることから読み取れ、なかなかの工夫である。

写本の異同は Fātiḥ 版では第9話に、Paris 版では第16話に配している。そして後者ではマカーマの標題も maqāma al-sab‘ (野獣のマカーマ) となっており、この標題にも首肯ける。

第7話 ガイラーンのマカーマ 中傷された詩人の敵対者への苦悶

(原文 M. 'Abduh 編 pp. 38-42 より)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて次のように話した：我々がジュルジャー¹⁾に留まっていた頃、よく集まりを催していたものであった。話題をあれこれ閑談したもののだが、そんな或る日のこと記憶力と語りの才で定評のあるアラブの貴紳が同席したことがあった。この方はイスマ・イブン・バドゥル・アル・ファザーリー²⁾と言う名であった。議論を重ねていくうちに、敵対者を許すに誰が一番寛容を持って遇したか、誰が一番侮蔑を持って対したかの話題に及んだ。我々の結論は前者がサラターン・アブディー³⁾であり、他はアル・バイース⁴⁾であると言うことになった、この二人は当時の大詩人ジャリールとファラズダクに軽蔑されてはいたのだけれども。

ところがイスマ殿は次のような別の発言をした：「私は皆様方にこの目でしかと見たことをお話ししましょう。私ではない他人情報を話すわけではありません。私がタミーム族⁵⁾の領地を旅した折のことです。血統高いラクダ⁶⁾に乗り、予備のラクダ⁷⁾も引き連れて旅をしておりました。その折、眼前に灰色の⁸⁾、口に泡を溜めたラクダに乗った人物が現れたのです。この人物は私と向かい合うように接近して来て、遂には体が体にぶつかり合うぐらいになりました。すると彼のほうから声が掛かりました、「アッサラーム・アライカ (あなたの上に平安あらんことを) !」。すかさず私も「ア

- 1) ジュルジャー Jurjān：(ペルシャ語読みではグルガン) Bahr Qazwīn (カスピ海) 東南部地方、また首都名。中央部を東方からアトレク河がカスピ海に流れ込む。西暦 716 年將軍 Yazid ibn Muhallib によってイスラムの軍門に下る。アッバース朝時代北方のマー・ワラーア・ナフル、東方のホラーサーン、南部のラッイ、西部のタバリストーンを境として行政府を形成。農産物及び織物が盛ん。都市名は現在はアステラバードと改名。南部をイランが、北部をトルクメニスタンが領有している。第 9 話は「ジュルジャーンのマカーマ」と表題になっている。
- 2) イスマ・イブン・バドゥル・アル・ファザーリー 'Iṣma ibn Badr al-Fazārī：この人物については注釈者 M. 'Abduh のほうには何の注が無いが、英訳者 Prendergast の注ではマルワーン・アル・ファザーリー Abū 'Abdullāh Marwān ibn Mu'āwiya ibn Badr al-Fazārī (d. 193 ~ 94A.H) のことであろうとして、ハディース学者としての彼に学んだ学徒として、ハンバル派法学を開いたイブン・ハンバル (d. 241A.H) を挙げている。普通には人名として適当に選んだ、と見てよいであろう。アル・ハマザーニーのマカーマには架空の人物の登場が多い。サジュウの韻合わせのためもあるが。
- 3) サラターン・アブディー al-Ṣalātān al-'Abdī：ウマイヤ朝期の名だたる詩人。サラターンの属するアブド族は領地に多くのナツメヤシ畑を有していたが、それをみすみす手放さねばならないことになり、部族の勇気の無さを露呈した。この情けない部族の一員であったサラターンが、詩人ファラズダクとジャリールのナカーイド (非難中傷合戦詩) を評するに「ファラズダクは筋筋において優り、ジャリールは詩人において優る」と言い放った。この言に怒ったジャリールが、「ナツメヤシの切り株 (が如き人物) に何時神の裁定が下ったと言うのか？」matā kāna hukumu llāhi fī karabi n-nakhli と声を荒げたと言う。「評する資格も無い人物が何を言っておるのか」との意味合いである。その情けない部族の一員たるサラターン如き切り株のような役立たない詩人が何を言うか、と蔑まれ、上のようなた佻語として広まってしまった。この風評に対してもサラターンは、他の中傷・侮蔑に対しても鷹揚であった。
- 4) アル・バイース al-Ba'īth：ウマイヤ朝期ジャリールと同時代の詩人。雄族クライブ族が輩出した多くの詩人達を向こうに回して怯むことなく中傷・風刺詩で挑んで高名になる。
- 5) タミーム族 Tamīm：ムダル系アラブ諸族の中の最有力部族。アラビア半島東部バハレーン、ヤマーマ、ナジュド地方に大きな勢力を占め、アラビア語の標準語、模範語の役割を果たした。アディー・イブン・ザイド他多くの詩人がこの部族から出ている。ファラズダクとジャリールもこの部族出を誇りにしているが、高貴さではファラズダクの支族の方が上であった。
- 6) 血統高いラクダ najība：najīb、即ち「高貴なる = karīm」の女性形で、この前に nāqa (雌ラクダ) を補って解釈されるが、それを省いても普通に持ちいられるほどに、乗用ラクダや旅用ラクダとして繁用されていることが分かる。
- 7) 予備のラクダ janība：「横 (janb) に連れ添うもの」が原義で、長旅や道程の厳しい旅においては、複数の乗用・駄用ラクダを用意し、順番に配慮して、また交互に使用する慣行があった。この慣行を表わす用語である。冒頭から今までの文でサジュウ (文末・句末押韻技法) の配慮は見られない。この文の下線部が最初のサジュウ語となる：najībatan、janībatan。
- 8) 灰色の awraq：ラクダの体毛色別名称のうちの一つ。アウラク awraq は灰色種であっても白に近い「灰色」であって、「濃灰色種」はアクハブ akhab と言い、純白種はアードム ādam と言う。awraq 種は夜旅に最適と言われている。

ライカ・ツサラーム・ワ・ラヒマトゥ・ツラーヒ・ワ・バラカートゥ・フ（あなたの上にもまた平安あらんことを、アッラーの慈悲とご利益もまた）！誰で御座りますかな、明瞭な言葉でイスラム流の挨拶を送ってよこされた騎乗のお方は？」と反応した。彼が答えるに、「私はガイラーン・イブン・ウクバ⁹⁾と申します」。「ようこそ、その力量が高雅で、由緒正しく、その行状が良く知られたお方よ！」「あなたの（住まいとされる）ワジ（＝涸れ川）が幅広からんことを、またあなたの（催す）集いの場が盛大でありますよう！ところであなたどなたで？」。「私の名はイスマ・イブン・バドゥル・アル・ファザーリーと申します」。「アッラーがあなたを長生きにされますように！良い方に恵まれました、友として、仲間として、道連れとして！」¹⁰⁾。

こうして我々は旅を共にしたのであった。行進はハージラ（日中の最も暑い時間帯）まで続けられたのであったが、その折になって彼が言うには、「イスマ殿、タグウィール（日盛り時の、日中の休息）を取りませんか。陽射しが我々の脳を溶かしてしまいそうだ！」。私も同感で、「あなたもそう思っていましたか」と答えた。そこで我々はアラウ¹¹⁾の木の茂みの方に寄って行った、その茂みたるやまるで髪の毛を垂らして飾り立てている乙女達のようにであった。それらと向かい合うようにアサル（タマリスク^{御柳}）が立っていた。我々はラクダ鞍を下ろして、食事をとった。（が意外なことに）ズー・ルンマ殿は食欲がなかった。食事を済ませると礼拝を共にし、それぞれが別のアサルの木陰に行き、昼寝をとることにした。

ズー・ルンマ殿が横になったので、私も彼に見習って同じようにした。身を横たえたものの、私の両目を眠気がなかなか支配してくれなかった。ふと目を転ずると遠くない所に一頭のカウマーウ（瘤の肥えた）雌ラクダが視角に飛び込んできた。このラクダは陽に晒され、その窪地¹²⁾（＝鞍）は取り払われていた。（さらに視線を固定すると）なんと一人の男が、そのラクダを見守りながら身を横たえているではないか！恰もその雇われ人か奴隷であるかのように¹³⁾。私のほうはその人物とラクダについては関わっていられず、寝返りを打つことにした。私の関心を引かないことを問題にして何になろうか。ズー・ルンマ殿は一頻り¹⁴⁾眠ったようだったが、やがて目覚めた。当時彼はムッラ族出の男¹⁵⁾を敵に回して風刺詩を作ることに明け暮れていたところであった。そして声

9) ガイラーン・イブン・ウクバ Ghaylān ibn 'Uqba；この詩人は実名よりズー・ルンマ Dhū al-Rumma の綽名で知られる。この由来は彼が砂漠を長旅していて、咽喉の渇きを感じ、近くのテントを訪ね、水を所望したところ、中から美しい娘が水を持ってきて、「どうぞ、ズー・ルンマさん！」と声を掛けて水を渡したと言う。その折彼はラクダから降り、ルンマ（手綱）を肩に引っ掛けていたので、娘（名前はマッヤ）は彼をズー・ルンマ（手綱の所有者）と呼び掛けたのである。これが縁でその後二人は恋愛に陥り、「ズー・ルンマとマッヤ」のカップルとして世に知られた。ズー・ルンマは砂漠や遊牧生活を愛し、都会や定住生活を嫌った。マッヤとの恋歌およびイスラム時代以前から伝承され、描写された伝統を尊び、それを範として牧歌を謳いあげた。そうした砂漠派詩人達の最後の継承者と評される。735年頃歿した。第28話「イラクのマカーマ」は15の詩芸が扱われ、その中の第4問、8問がズー・ルンマ作品から採られている。

10) 注7以降今までの文の段落でサジュウ（文末・句末押韻技法）の語がみられたのは下線の語で順に；ḥasabu-hu、nasabu-hu / wādī-ka、nādī-ka / ṣādīqu、rafiqū。

11) アラウ alā；砂漠地帯に生育する常緑樹で、外見が美しく、本文のように葉の茂みがどちらかに傾くと、乙女が長い髪を垂らした格好に見える。砂漠にあつては日陰を提供する絶好の材であるが、その美景からかジンの一種のグールの潜み場所ともいわれる。たとえグールがいたとしても、昼間は悪さは仕掛けないと。第6話注6) 参照。

12) 窪地 ghayt；状況から「鞍」と訳したが、語根√gh/w/īは＜砂に沈む・のめり込む＞であり、ghaytの直義は「窪地・低地」であつて、派生的に「用便をたす所」の意味を持つのは説明の要は無かろう。「鞍」の意味に至るのは瘤上の鞍の両突起・前輪と後輪が天に伸び、鞍部が低くなっている所から「窪地・低地」の例えとされたと理解するが……。

13) 雇われ人・奴隷；この人物が大詩人ファラズダクである、という想定に立つ。また、この両語は、'asīfun、asīfunと脚韻への配慮がある。注10以降サジュウ技巧の配慮があるのはここだけである。

14) 一頻り ghirāran；ghirārはラクダの乳の出の少ないことをいい、darr（たつぷりのミルクを出す）と対義語となる。ミルクの量は睡眠の量にも転じられ、「少しの、僅かの眠り」の意味にもなった。

15) ムッラ族出の男 al-Murriyy；ヒシャーム Hishām al-Murriyy という男がマルア Mar'a という所でズー・ルンマを客人相手として、あるまじき礼を失した遇し方をした。それに対しての風刺での詩作を捻っているところであった。しかし以降の文意から明らかであるが、ズー・ルンマの頭の中のより大きな比重を占めていたのは、詩の割

を高めて、次のように朗詠したのである：

おおマッヤの、風と砂で吹き消された あのテント跡が見出せるというのか

a-min mayyata t-talalu d-dārisu

かの地繰り返し襲い埋め尽くす 雨嵐吹きすさぶ中で今もなお

alazza bi-hi l-‘āṣifu r-rāmisu

また圉^{いろり}跡か、かつてはその場にありて

fa-lam yabqa illā shajīju l-qadhāli

火炭守る者もありしに今は影も無く

wa-mustawqadun mā la-hu qābisu

あるはただ家畜の水やり場か、その両脇割れ目もあらわな

wa-ḥawḍun tathallama min jānibay-hi

共に集いし客間はいかん 風砂で消され跡形も無きが

wa-muḥtafalun dārisun ṭāmisu

されど我が記憶^{ちきり}すべてが彼の地にあり 住みし住人にこそ

wa-‘ahdī bi-hi wa-bi-hi saknu-hu

そうとも優しく気遣^{いと}う愛しきマッヤ それに彼女の家族

wa-mayyatu wa-l-insu wa-l-ānisu

マッヤとの馴^なれ初^そめをいえば 彼女恰もガゼル鹿 我はそを追^とい散らしき者の如し

ka-annī bi-mayyata mustanfīrun

黎明に両者行きあいてその出会い頭^{がしら}面くらいて逃げ惑わせる

ghazālan tarā’ā la-hu ‘āṭisu

見知らぬ者が娘に近づいた刹那ゆえに 近親^{ちか}し男どもすわと構えて洪顔^{うた}つくり

idhā ji’tu-hā radda-nī ‘ābisun

我が振る舞い危ぶむ目線^{めせん}で追^おい 近づけまいと彼女の間に

割^きって入り来たり

raqībun ‘alay-hā la-hā ḥārisu

風の便りに伝わり来よう あのイムルウ・ル・カイス¹⁶⁾の知られた詩歌が

sa-ta’ti mra’a l-qaysi ma’tḥūratun

そは今や口遊^{くさ}まれてあり 行き交う人の間に座して閑話する

人の間にも

yughannī bi-ha l-‘ābira l-jālisu

思わずやイムルウ・ル・カイスの編み上げる

a-lam tara anna mra’a l-qaysi qad

詩作の中に病あるなどと 病み憑^つかれているなどと

alazza bi-hi dā’u-hu n-nājisu

窃で訴えている傍にいるファラズダクへの対応であった。

16) イムルウ・ル・カイス Imru’ al-Qays；ここでは有名なジャーヒリッヤの大詩人ではなく、ズー・ルンマと同時代の、タミーム族出身のベドウィン詩人のこと。あるラクダ市でズー・ルンマがこのイムルウ・ル・カイスの詩を詠じていたところ、当時大詩人となっていたファラズダクが通りかかって耳を済ませて聞いていた。そこでズー・ルンマが詩評を求めたところ、伝統墨守の詩に過ぎないと評され、大いに面目を失った。その詩が、ズー・ルンマの一件とともに巷間に広まっていることをいっている。

されど彼の部族も無関心 風刺された心の痛みなどこ吹く風

humu l-qawmu lā ya'lamūna l-hijā'a

然もありなん 乾いた岩¹⁷⁾になどて湿り持つ微細な痛み理解
できようぞ

wa-hal ya'lamu l-hajaru l-yābisu

あの部族にありて何処^{いずこ}に居ろう 並み居る者の上に立つ騎士など

fa-mā la-humu fi l-'ulā rākibun

彼らの何処に見い出せるや 戦にて馬上で奮迅する英雄など

wa-lā la-humu fi l-waghā fārisu

中傷者の非難が渦巻く給水所^{みずば}にて 矢面^{やおもて}に立たされ泥まみれとなる

mumartalatun fī hiyāḍi l-malāmi

恰かもよく鞣^{なめ}されんとする皮革^{かわ}が^おその職人により汚泥で踏
みつけられるが如

ka-mā da'asa l-adama d-dā'isu

例え何がしかの慈善求めんと 部族の者に手を差し出すものあらば

idhā ṭamaḥa n-nāsu li-l-makrumāti

ただ彼らの視線あらぬ方を向き 眠たげな風^{うつゐ}に俯いて応ずる
気配無し

fa-ṭarfu-humu l-muṭriqu n-nā'isu

されば如何な高貴の出の者なろうとも その娘達と縁付く^{いと}を厭うて避ける

ta'āfu l-akārimu iṣhāra-hum

かくて彼らの娘達嫁にも行けず 自宅^{おのれ}のテントで老いゆく
「行かず後家」

fa-kullu ayāmā-humu 'ānisu

(詩型 ムタカーリブ mutaḳārib 調 sīniyya s 脚韻詩)

この詩行に至ると眠りに落ちていた如くにガイラーン殿は、目を覚まして目蓋を擦り始めた。そして言うには、「ズー・ルマイマ¹⁸⁾ (軽蔑すべき別の私) が私を眠ることを邪魔したのであろうか、教養^{げい}も無い、知られてもいない詩行で!？」と。私は言葉をかけた、「おおガイラーン殿、その詩は誰^いに対してのものなのですか?」。「ファラズダクに対してですよ」。こう答えたズー・ルンマ殿は興奮して、次のように詠じた:

あやつの祖先マジャーシウ¹⁹⁾に連なる 落ちぶれ果て見下げた末裔ども

wa-ammā majāshi'u l-ardhalūna

17) 岩 hajar; ここでは二重の意味を持たせた「掛け言葉」の工夫が見られる。3文字のみの√h/j/rで構成される単語は hajar (岩) の他に hujr と読まされると、固有名詞・人名になり、イムルウ・ル・カイスの先祖フジュルを意味させる。ここでは従ってイムルウ・ル・カイスの属する部族の祖先までを対象にしたことになる。

18) ズー・ルマイマ Dhū al-Rumayma; Dhū al-Rumma の指小辞である。指小辞はアラビア語の場合 fu'ayl(a) の形をとる。直義的には「より小さいもの」を表示するが、さらには両義的で良くも悪くも受け取られる。すなわち「可愛さ・愛らしさ」を一方では、
<卑しさ・侮蔑>を他方では意味している。ここでは後者の用いられ方であって、ズー・ルンマが夢現の中で意中にも無い非難中傷する詩句を口ずさんでしまったため、己の意思の統制の無さを嘆いたわけである。

19) マジャーシウ Majāshi'; ファラズダクの属する部族の祖先の名前。Majāshi' ibn Dārim.

物皆を生育させるその牧地には 雷鳴伴う黒雲来るとも雨
齋^{もたら}すこと非ず

fa-lam yasqi manbita-hum rājisu

必ずや断たれよう高貴なる諸行 お高く留^とまろうが赦されず

sa-ya'qilu-hum 'an masā'i l-kirāmi

あのイカールの枷²⁰⁾ が彼らを封じ込めて雁字搦めとなるは必定

'iqālun wa-yahbisu-hum hābisu

(詩型 ムタカーリブ mutaqārib 調 sīniyya s 脚韻詩)

この折私は言ったものである、「今やズー・ルンマ殿は睡で息を詰まらせたり、苛立ちを露^{あら}わにしながら、思いのたけをファラズダクとその一族に風刺詩でやり込めたのだなあ！」と。しかし(聞こえる距離にいた)ファラズダクはただこう答えるだけであった、「見下げた者よ、おおズー・ルマイマ²¹⁾よ、そなたは剽窃^{ぬす}み採った作品²²⁾で私と張り合おうというのか?」。

さて、この後ズー・ルンマ殿は再び寝に就いたわけであった、恰も何も聞こえなかった様子であった。それから旅を続けた、私も彼のお供をして従った。途中で別れることになったが、(敵対者を許すに誰が一番寛容を持って遇したか、また誰が一番侮蔑を持って対したか、について)まこと彼ほど己を卑下・謙遜する人物を見たことが無かった²³⁾。

第7話 ガイラーンのマカーマ 完

第7話 訳者解説

この作品は主題の一貫性も、形式の統一も取れてない、一言で言うと未完成で訳者泣かせの一篇といえる。「マカーマ」としての体裁も内容も整えられていないのである。まずは文体から述べよう。驚くことに、全篇の文でサジュウ(脚語押韻技法)がみられたのは、注7で述べた1箇所、注10で延べた3箇所、都合4箇所に留まる。注10以降皆無である。マカーマは文体がサジュウ(脚語押韻)でなければならない。逸脱はあっても、それが指摘できるぐらいの少数では、サジュウ文体とは言えないことになる。ところが本マカーマは全く上述の如くであり、作者のサジュウへの配慮、マカーマ文学開拓への意図や配慮がどれ程あったか、疑問視せざるを得ない。

次に主人公および語り手の役割が全く考慮の外なのだ。語り手イーサー・イブン・ヒシャームは冒頭に出てくるだけで、語りの主役はイスマ・イブン・バドゥル・アル・ファザーリーというストーリーのなかの登場人物に任せてしまって、そしてそのまま、この一話を終えてしまっているの

20) イカールの枷 'iqāl; ラクダの動きを制御するための紐や綱で作る輪型の足枷。ラクダの前足の片方を膝のところで折り曲げて、そこにイカールの枷をはめる。ラクダは3本足でかろうじて動き回れるが距離が限られる。人間の頭衣・頭巾であるクーフィッヤを上から締める輪もイカールと呼ばれる。同じ語根から派生するアクル'aqlとは「理性」の義だが、<感情を制御する>ところから由来する。

21) ズー・ルマイマ Dhū al-Rumayma; 注18を参照。指小辞を侮蔑に用いた事例。

22) 剽窃^{ぬす}み採った作品 maqāl muntahā; アラブ文学においても、他の世界同様、他人の作品を(殆んどがその一部であるが)借用・引用して自分の作品として世に出すこともあった。本歌取りもまた技法として研修された。この「剽窃」のことを、用語ではインティハール intihāl といっている。「剽窃する」という動詞はインタハラ intahala、またはタナッハラ tanahhala とされ、前者の受動分詞が本注の muntahā である。この muntahā は従って厳密に訳せば「剽窃された、剽窃み採られたもの」ということになる。ズー・ルンマもまた、詩の研鑽に励み、いくつかの作品に剽窃が見られ、断わり無しでの発表であったために、「剽窃者」のレッテルを貼られている。

23) 注10以降サジュウの配慮は見られない。

ある。語り手イーサーが舞台を回して、マカーマを締めくくる口上も述べられてはいないのである。主人公アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師に至っては一語の言及もない、すなわち全く登場していない。

次に内容である。ストーリーが大雑把であり、飛躍しており、完結してもない。ある集いである話題に及び議論している中でイスマがこんな人物がいると、ズー・ルンマとの同行体験談を語り出す。そして中途半端ながらその語りが終わったところで、この一話も終わってしまっている。集いの場に戻っていないし、話題の締めくくりも欠如した、尻切れトンボなのだ。筋の細かい所においても、訳では大分補ってはいる。しかし補いきれない部分も多々出てしまった。例えば話し手イスマとズー・ルンマとが樹陰で午睡を取っていると、近くの樹陰で「なんと一人の男が、そのラクダを見守りながら身を横たえているではないか！ 恰もその雇われ人か奴隷であるかのように」、とある。この人物がズー・ルンマの敵対者であるファラズダクかと想定して、訳出の配慮をしていった。その場でイスマが彼の言を聞き及んだと解する。しかしそうだとするとズー・ルンマの対応が焦点になってくる。「恰も何も聞こえなかった様子であった」がその対応であって、「敵対者を許すに寛容であった」の例となったことになるのか。ともかく簡略で説明不足が多く、解釈が訳者に任されることが多い。アル・ハリリーに比してこの簡略さには悩まされ続けることになる。

夢うつつでズー・ルンマが吟じた詩行に対して、同伴者イスマが尋ねる件^{くだり}：私は言葉をかけた、「おおガイラン殿、その詩は誰に対してのものなのですか？」「ファラズダクに対してですよ」の部分。文法的にも、原文により近い訳は「おおガイラン殿、その詩は誰の作なのですか？」「ファラズダクの作詩です」、である。しかしそれでは詩行の内容の筋もストーリーの展開もが追えない。冒頭詩行は明らかにズー・ルンマの有名な恋人マッヤを詠った作である。

また時代設定の持って行き方もいい加減である。時代設定はあくまで主人公および語り手が活動する同時代である。時代を昔に持ってゆくとしても飽くまでも、主人公が語り手の話の中、劇中劇ないし枠物語の中である。しかし本話では冒頭から8世紀初頭ウマイヤ朝時代に設定されており、語り手イーサー・イブン・ヒシャーム自身ウマイヤ朝期の時代人になりきっていることになる。本マカーマに登場する詩人達および語りを進めるイスマもすべてウマイヤ朝期に活躍した人物で一貫している。その点は評価に値する。

内容は詩行の剽窃インティハール *intihāl* についてであり、本話に出てくる詩行の幾らかはそれに関与していよう。本文中の終わりの箇所ではファラズダクの言がヒントを与えてくれるように。しかしこの書の校訂・注釈者 *Muhammad ‘Abuduh* も英訳者 *Prendergast* もそこまでは言及してくれてはいない。

本話の異同であるが、さすがに好評に値しないとしているのか、順序にしても後ろに配している。*Fatih* 写本は第25番目に、*Aya Sofya* 写本は17番目に、*Paris* 写本では18番目になっている。標題もまた50話揃う *Cambridge* 写本では *maqāma Dhī al-Rumma* (ズー・ルマのマカーマ) と、*Paris* 写本では *maqāma al-sā’il bi-Jurjān* (ジュルジャンでの物乞いのマカーマ) となっている。最後者の標題が *sā’il* (物乞い、乞食) とは内容に合致しない。このマカーマは欠落・欠損カ所があることを物語っているように思われる。

第8話 アゼルバイジャン¹⁾のマカーマ 困窮の旅人対句を駆使して神を賛美し布施求める

(原文 M. 'Abduh 編 pp. 43-45 より)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて以下のように話した：裕福さが私をその寛着の
 靡く裾で守ってくれていた頃のこと。私に嫌疑が掛かってしまった、不正に得た財産であろうと。盗
 んで獲たものか、それとも偶々見つけ出した財宝ではないかと。私としては夜の闇に乗じて逃げ出さ
 ねばならなかった。馬が私を先へ先へと運んでくれた。この逃避行はすごいもので、どんな旅人も踏
 破したことの無い道を踏み分けて行っだし、どんな鳥も導いてはくれない道を突き進んだものである。
 そしてついに恐怖の地を通過し、その境界を乗り越えて、身の安全が保証されるに至ると、ほっと一
 息ついたのであった。私はアゼルバイジャンに導かれていたのである。旅の足となってくれた旅用ラ
 クダ (rawāḥil) の蹄は磨り減り²⁾、きつい旅程はその体力を食いつぶしていた³⁾。

そして目的地に達し（暫らく滞在してから、安堵したのであろうか、自然に詩行が口からこぼれ
 出ていた）：

滞在期間三日との定め⁴⁾ なれど 余りに心地宜しければとて

nazalnā 'alā anna l-muqāma thalāthatun

一日一日と延ばしに延ばして 遂には滞留まるは一月に至りたり

fa-tābat la-nā ḥattā aqamnā bi-hā shahrā

(詩型 タウィール ṭawīl 調 rā'iyya r 脚韻詩)

アゼルバイジャンでこうして過ごしていた或る日、幾つかあるスーク（市場）の一つに出かけた
 折のことであった。旅人と思われる一人物が突如姿を見せた、ルクワ（皮袋）を脇に抱え、アサー（杖）
 に縋^{すが}って立って、ダニッヤ（丸い背高帽）を頭に被り、フータ（腰巻）をタイラサーン（マント）
 代わりに着けていた。そして金切り声でなにやら訴え始めた⁵⁾；（訳者注、以下散文ながらサジュ
 ウをも含みこんだ見事な対句技法であるので、原文ローマナイズを本文の中に割り込んで記す）

おお神よ！

(1) 万物を創造し給い、それらを再び元にお戻しなさり給うお方よ！

遺体の骨を生き返らせてはそれらを再び朽ち果てさせ給うお方よ！

mubdi'a l-'ashyā'i wa-mu'ida-hā

wa-muhyiya l-'izāmi wa-mubīda-hā

- 1) アゼルバイジャン adhrabjān：カスピ海の南西部、イランとロシアに国境を接する。アラス川を中心とするカフカース地方であり、北のカスピ海岸のバクーと南西の内陸部のタブリーズを主邑とする。アッバース朝時代は行政区画「アゼルバイジャン州」として、首都をタブリーズに独立州となっていた。アゼルバイジャン人は自らをアゼリーと呼んでいる。
- 2) 蹄は磨り減り ḥafīyat；ḥafīya という動詞は＜裸足で歩く＞が原義で、馬ならば「歩きすぎて蹄が磨り減る」の義となる。蹄鉄の装着しない馬のことは、この派生語 ḥāfī (pl. ḥufāt) と言っだし、磨り減った蹄のことは ḥafā と言った。ここでは乗用動物に如何に無理を強いたか、の換言である。
- 3) この冒頭段のサジュウ（文末・句末押韻技法）の語は下線の順に：salabtu-hu、ʿasabtu-hu / laylu、khaylu / sayru、ṭayru / ḥadda-hu、barda-hu / rawāḥilu、marāḥilu。
- 4) 滞在期間三日との定め al-muqāmu thalāthatun；これはアラブの砂漠の掟を踏まえての言い方である。即ち、何らかの理由で疲労困憊した旅人がどこかのテントに頼った場合、客は三日間の歓待を受ける、というもの。＜共食＞をしてその誓いとなる食べ物三日間は体内に留まる、と考えられていた。「客もてなしは三日間 inna l-diyāfata thalāthun」とは預言者ムハンマドのハディース（言行録）にもある。
- 5) この段のサジュウの語は下線の順に：i'taqada-hā、i'tamada-hā / taqallasa-hā、taṭallasa-hā。

- (2) 光照らすものを創造り給い、それに周期運動を司らせ
黎明を切り裂き⁶⁾、そしてその曙光をあたえ給うお方よ！

wa-khāliqa l-miṣbāhi wa-muḍīra-hu

wa-fāliqa l-iṣbāhi wa-munīra-hu

- (3) その恩恵を我らが許に遍く垂れ給うお方よ！
天を我らが上に落下せぬように支え持つ方、

wa-mūṣila l-ālā'i sābiḡhatan ilay-nā

wa-mumsika s-samā'i an taqa'a 'alay-nā

- (4) 生あるものに対する性 (男女・雌雄) 与え、
太陽を光源となし給い、

wa-bāri'a n-nasami azwājan

wa-jā'ila sh-shamsi sirājan

- (5) 大空を天井となし、大地を敷物となし、
夜間は休息をとるもの 昼間は稼ぎ活動するもの、

wa-s-samā'i saqafan wa-l-arḡi firāshan

wa-jā'ila l-layli sakanan wa-n-nahāri ma'āshan

- (6) そして雲は重く垂らし給い、
また返報をば雷鳴にて答え給い、

wa-munshi'a s-saḡābi thiqālan

wa-mursila ṣ-ṣawā'iqi nakālan

- (7) 星々の上に在るものを知らしめすお方よ！⁷⁾
そしてまた地底の下に在るものをも

wa-'ālīma mā fawqa n-nujūmi

wa-mā taḡta t-tukhūmi

あなた(がた)に預言者たちの長ムハンマドと、清純なるその聖家族⁸⁾に礼拝を捧げんことを
希います！また異郷にあるわが身を、またその拘束の煩いの最中にあるわが身を助け給わんこ
とを！困窮が重なりその行き着く果てまで行ってしまった⁹⁾ わしを助け給え！わしの前に居られる
皆さん、敬虔な心お持ちの、清純さ一層高める皆さん、堅固な宗教のもと安寧に生きられる皆さん、
明らかな道理を弁えている皆さん、どうぞお恵み下さい、このわしにこの道を乗り越えるべきラー
ヒラ (rāhira 乗用ラクダ) を、必要とする糧食と旅の連れとなる人を！¹⁰⁾

6) 黎明を切り裂き fāliq l-iṣbāh: 『コーラン』6章96節の引用。96節のこの後に続く聖句 ja'ala l-layla sakanan は「夜間を休息をとるものとされ給う」の動詞文を、(5) の jā'ila l-layli sakanan 「夜間を休息をとるものとされ給う方」の分詞構文に変えて、この直後に見事な隠喩として生かされている。以下の神の天地創造の賛美の章句も多くは『コーラン』からのアルージョンであり、従って敬虔なムスリムは聞いてすぐに情動的反応・対応があった。

7) この段の主人公の説教は巧緻を極め、サジュウをも含みこんだ対句法は見事である。分かり易いように対句を上下段に示した。またサジュウは対句の末語であり、訳は下線で示してある。注6に記したように、これらすべては『コーラン』の文体を模したものである。

8) その聖家族 Āl Muḥammad: 直訳は「ムハンマドの家族」。アフル・ル・バイト Ahl al-Bayt = 「お家の人々」とも言われて、預言者ムハンマドと従兄弟で義息のアリーの血筋を引く一族のことで、敬虔な信者にとって尊崇されている。

9) 困窮が重なりその行き着く果てまで行ってしまった wa-'ala l-'usrati a'dū zilla-hā: 直訳は「わしがその陰に駆け込む困窮に対して」。陰 zill とは「日陰」のことで、本体は勿論その影の部分まで、の意味であろう。

10) この段のサジュウの語は: mursālīn / ṭāhirīn / ḡabla-hā, zilla-hā / fiṭratu, ṭuḡratu / maṭīni, mubīni / ṭarīqa, rafīqa.

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：私は心の内に問い掛けた、「この御仁はあの我らのアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師よりも雄弁じゃないかな」と。そして（師と比較すべく）注意深い一瞥を彼に向けてみた。と、どうであろう、まさしくアブ・ル・ファトフ師本人だったのだ！そこで私は彼に声を掛けた、「おおアブ・ル・ファトフ殿 あなたの^{しか}策略がこんなところ

ろにまで及ぶとは！^{あいて}獲物がこんな人々にまで及ぶとは！」¹¹⁾。

するとアブ・ル・ファトフ師は詩でもって答えた：

我は諸国を渡り歩く者

anā jawwālatu l-bilādi

地平の境無く乗り越え行く者ぞ

wa-jawwābatu l-ufuq

時の糸に操られる^{こま}独楽の玩具に過ぎず

anā khudhrūfatu z-zamāni

わが一生は旅の途上にあると心得よ

wa-‘ammāratu t-turuq

^{せめ}難詰る勿れ ^{なか}わが^{かた}騙りの中にも

lā talum-nī la-ka r-rashādu

汝の導きあらん さらばよく^{あじわ}鑑賞うべし

‘alā kudyatī wa-dhuq

(詩型 タウイール ṭawīl 調 qāfiyya q 脚韻詩)

第8話 アゼルバイジャンのマカーマ 完

第8話 訳者解説

このアゼルバイジャンのマカーマは、前作ガイラーンのマカーマに比して、小篇ながらまとまった作品になっている。語り手と主人公は定型通りの登場がある。語り手イーサー・イブン・ヒシャームは本舞台と裏舞台と同一ながら区切りに二度顔を出す。物語の出だしと場面転換のところでの口上である。また主人公アブ・ル・ファトフ師を、マカーマ即ち「稼ぎの場」をスーク（市場）に選んで出現させている。圧巻は主人公の訴えの前半部、神の天地創造を賛美する部分である。注6で示したように二つの文を対句にして、7つの文のペア、すなわち14の文を、サジュウを含めた対句法でやってのけている。しかも綿密に調べ上げていくと、どうやらすべて『コーラン』の聖句からの引用か、少しひねった語句を編み出して用いている。その語彙の蘊蓄には恐れ入るし、また『コーラン』に慣れ親しんだ人々には視覚・聴覚印象、訴えは琴線に触れることだろう。

しかし残念なことに「稼ぎの場」をスーク（市場）に選んでおきながら、聴衆の様子も聴衆から稼いだのかも、何の記述の配慮も無い。つまり字面だけを追うと何の稼ぎも無いことになる。布施の具体的要求はすごいものである。ラーヒラ（乗用ラクダ）とラフィーク（旅の連れとなる人）とザード（旅の糧食）というのであるから！主人公と気付いた語り手と公衆の面前で一対一の対話に入ってしまう。つまり本来は裏舞台でなされるべき正体暴露が公衆の面前で、さらには主人公の正当化も公衆に聞こえる形で終幕に突如入ってしまう。

11) この段のサジュウの語は：fathi, fathi / kaydu-ka, saydu-ka。

詩の引用も二箇所ですべて定型通りと言える。二箇所目の大団円となる部分は主人公の騙りの正当化する内容の三詩行であり、少し短めではある。但し、一箇所目は定型ならば盛り上げの部分に来るはずなのに、詩の代わりに対句サジュウで済ませている。一箇所目は出だしの部分にあり、しかも唐突に一行のみボツンと置かれている。その唐突さを訳出するのに、だいたい文意上補わざるをえなかった。アル・ハマザーニーは散文については、ラサーイル（書簡集）に観られるようにバディーウ（創造的）性を発揮している。しかしマカーマ篇の中においては韻文挿入は少なめであって、マカーマのスタイルはこれで良しとしているようでもある。というより詩作の重点は『詩集』の方に回したと受け取っておきたい。

マカーマの文体であるサジュウの配慮はほぼ行き届いており、前作の形式・内容ともに無策振りを露呈したものと比して、その落差には驚くばかりである。登場人物の設定、物語の展開、詩行の挿入、サジュウへの配慮。これらすべてが一応整った本マカーマは、著者アル・ハマザーニーが恐らくマカーマを文学のジャンルとして確立してゆこうと意図した初期作品と窺える。ピカレスク（悪漢）小説への影響関係が指摘されるマカーマ文学ならではの、「騙りの詐術」の作法披露の配慮は未だ欠如するものの。

マカーマ文学の創始ないしその主要素をイブン・ドゥライド (d. 321/933) とする説やタヌーヒー (d. 384/994) さらにはジャーヒズ (d. 255/868) に持っていく説が現地の学者やオリエンタリストの間で喧しく議論^{かまびす}されていた。しかしこのアル・ハマザーニーのマカーマの一篇一篇を分析して行けば、その不備性は中途過程を明らかにしている。訳者はアル・ハリリー¹の50篇の作品を訳出し、分析した。その上でアル・ハマザーニーのマカーマを本篇まで訳出し、述べている積もりである。現地では1930年代雑誌ムクタタフ *al-Muqtataf* に展開されたザキー・ムバーラク *Zakī Mubārak* とアッラーフィイー *Muṣṭafā Ṣādiq al-Rāfiʿī* との論争、すなわち前者がマカーマ文学の創始者はアル・ハマザーニー以前であるとして例証をしてゆくのに対して、後者はアル・ハマザーニーであることは間違いないとして反証している。（詳しくは A.F.L. Beeston によって書かれた論文 “The Genesis of the Maqamat Genre,” *Journal of Arabic Literature*, 第2巻 pp. 1-12 を参照）訳者の能力は古典を渉獵するには及び難いが、アル・ハリリーの全作品を訳出した上でアル・ハマザーニーを比較の俎上に乗せると、明らかに後者アッラーフィイーに組する者である。アル・ハマザーニーのマカーマ自体の多くが形式においても、内容においても纏まっておらず断片的であり、試行的であり、一貫したスタイルとしては確立していないのである。つまり手本とするマカーマ作品の雛形があるのであれば、内容・形式の試行錯誤は無くして済むはずである。全51篇中、マカーマのスタイルとして統一のとれた作品も幾つかある。数あるマカーマを編んでゆく中で、徐々に統一されていったものと思われる。しかしそれならば篇著の問題点として、こうした試作品から完成品まで順序よく配置できなかったのだろうか。アル・ハリリーの大成者の作品群の如くに。

写本の異同に関しては、Paris 写本では第17話に、Fātiḥ 写本は第16話に、Aya Sofya 写本では第10話に配されている。マカーマの標題については、Cambridge 写本では *maqāma al-duʿā*（祈念のマカーマ）、Paris 写本では *maqāma al-sāʾil bi-Adharbījān*（アゼルバイジャンでの物乞いのマカーマ）とされている。

第9話 ジュルジャー¹⁾(ゴルガーン)のマカーマ 接待が過ぎて逃げ出して

(原文 M. ‘Abduh 編 pp. 46–50 より)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて、次のように話した：我々がジュルジャー¹⁾に滞在していた折のことであった。我々はある会合を催して、語り合っていた。集う面々はすべて顔見知りであった²⁾。そこへある男が不意に現れた、身長は丈伸びやかとも言えず、また縮こまっているほどに寸足らずでもなく程々であった。髭を厚く蓄えており、傍らに襁褓をまとった子供を連れていた。彼はサラームの挨拶を、イスラームの流儀で送ってきた。それから気品溢れる歩き方で我々に近づいてきた。我々の方も丁重に迎えた³⁾。

この男は次のように語りを始めた：お集まりの皆さん、私はアレクサンドリア⁴⁾から、ウマイヤ帝国の最前線からやって来た者です。スライム⁵⁾が我が祖先、その支族アブス⁶⁾が我が直接の部族なのです。幾つもの地平を越え、イラクを横切^{わかれ}って参りました。バドウ⁷⁾(遊牧民)の所にもハダル(定住民)の所にも、ラビーア⁸⁾の領土にもムダルの領土にも滞在したことがあります。何処に滞在しても、等閑にされることはありませんでした。どうぞ軽蔑などなさりませんよう、御覧のように継ぎはぎ衣、擦り切れ衣を着てあなたがたの前にいる私を！かく言う私だとて、ワッラーヒ(アッラーに誓って)、かつては人助け世直し^{さば}し人⁹⁾の一人でありました。朝にはラクダを屠^{さば}り¹⁰⁾(人々をもてなし)夕べには羊を捌いて¹¹⁾(救済して)いた

- 1) ジュルジャー¹⁾ Jurjān; ペルシャ語ではゴルガーン。カスピ海東南に位置し、前話の舞台アゼルバイジャンとは丁度カスピ海を挟んで向かい合う。この地もアッバース朝時代は帝国北限の行政区画「ジュルジャー州」として、首都を同名のジュルジャーンとして独立州となっていた。著者は381/991年の頃、滞在していた。
- 2) すべて顔見知りであった mā fī-nā illā min-nā; 直訳は「我々の中には我々より他は居なかった」、すべて見知った人であり、gharīb(異邦人・見知らぬ人)はいなかった、の意味。
- 3) ここまで冒頭段落のサジュウ(文末・句末押韻技法)の語は文中の下線で示した。順に: la-nā, min-nā / mutamaddidi, mataraddidi / salāmi, islāmi / jamīlan, jazīlan。
- 4) アレクサンドリア al-Iskandariyya; 注釈者 Muḥammad ‘Abduh は、この場合有名なエジプトのアレクサンドリアを指すのではなく、アンダルシアの「ウマイヤ帝国の最前線」の地名を言うのであろう、と説いている(p. 46 注7)。エジプトをウマイヤ帝国の最前線としてしまうと、既にイスラム化され統治がなされていたそれ以西のイフリーキヤ(北アフリカ)地域やさらにスペイン・アンダルシア地域はどうなるのかという疑問点はある。ここは、しかしながら主人公「アレクサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師」の定句通りエジプトのアレクサンドリアと採っておきたい。
- 5) スライム Sulaym; ムダル系カイス・アイラーンに属する雄族の祖の名前。スライム族からは有名な女流詩人ハンサーウ al-Khansā’が出ている。
- 6) アブス ‘Abs; 同じくスライムから出て、ハンサーウの属するシャリード族とは孫の代から別の支族を形成する。アブスからは奴隷上がりの黒騎士にして詩人のアンタラが出ています。
- 7) バドウ badw; 「遊牧をすること」。アラブ民族の住居形態に基づく二分概念、ハダル「定住すること」と対置。この概念に基づき、バダウィー badawī が「バドウの民・遊牧民」と言うのに対して、ハダリー ḥadārī が「ハダルの民・定住民」の二分概念もある。「アラブ遊牧民」を「バドウィン」というがこれは上のバダウィーが訛ったものである。
- 8) ラビーア Rabī’a; 後語ムダルとともにアドナーン(アラブ北族)を代表する部族。この当時両部族ともチグリス・ユーフラテス両河間のメソ地域ジャジーラ地域に移動していた。ラビーアの主たる領土はディヤール・ラビーア Diyār Rabī’a と呼ばれ、イラク北部シンジャールやナスィーブーンを主邑とした。
- 9) 人助け世直し ahl thammin wa-rammin; 直訳は「修理と改善の人々」。率先して善行を為し、世を教導する人々のこと。語呂の良い成語になっている。
- 10) ラクダを屠 nūrghī; ラクダは遊牧民や旅人にとっては身近の存在であったため、「ラクダの鳴き声」といっても、さまざまな用語に分節されている。その中でラーギヤ rāghiya とは人が乗ったり・物を載せたりする時ラクダが不平を言うように「低く唸り声を上げること」。この用語の日常化は換喩となり、「ラクダ」そのものをさすようになった。それを動詞化したアルガー arghā とは「ラーギヤ化する＝ラクダを低く唸らせる」であり、さらにここでの用い方、「ラクダを屠る」をも意味するようになった。ラーギヤおよびラクダの鳴き声について、詳しくは拙著『ラクダの文化誌』第13章を参照されたい。
- 11) 羊を捌いて nuthghī; 直義「我々はサーギヤさせる」。ラクダの鳴き声ラーギヤを元に作り出された語でサーギヤ thāghiya とは「羊の鳴き声」であり、またそれを動詞化したアスガー athghā 「サーギヤさせる」から「羊を屠る」の意味となる。「彼はサーギヤさせなかったし、ラーギヤもさせなかった mā athghā wa-mā arghā」とは「彼

ものです¹²⁾。(こう言ってから次のような詩行を吟じた):

我らが仲間内に先に立つ者¹³⁾あり その顔の何と美形くしきことか

wa-ḥi-nā maqāmātun ḥisānū wajūhu-hum

また各種団体を導く者あり その言行の何と一致せしことか

wa-andiyatun yantābu-ha l-qawlu wa-l-ḥi'lu

支援策さまざまに講じて 頼り来る者に真摯に対応す

‘alā mukthirī-him rizqu man ya‘tarī-him

財産持たぬ者として気持ちは同じ 度量大きく寛大さ心持つ者ぞ

wa-‘inda l-muqillīna s-samāḥatu wa-l-badhlū

(詩型 タウイー ル ṭawīl 調 lāmiyya 1脚韻)¹⁴⁾

(それから元の語調に戻って) 私もこのように詠われた一人でありましたが、ああ皆さん、時の運が彼らから私を引き剥がし、盾の背をひっくり返し(=見放し)たのです。安らかな眠りが(不安と焦燥の)不眠に取って代わられました。安住していた者が旅を流浪する身に成り下がってしまいました。当所無く彷徨う身となってしまったのです。砂漠¹⁵⁾を一つ越えると次の砂漠が私を導くのです。折々に生ずる厄事が私の肉体を削ぎ落としてゆくのです、スムグ樹脂¹⁶⁾がその木肌から削ぎ落とされるように。朝に夕に掌ほどに痩せこけ、赤子の顔ほどに裸出となってしまったのです。かつて繁茂していたフィナーウ(中庭)も寂れ果て、満たされていた什器類も空になりました。私に残されたものといえただ重なる旅の辛苦ばかり。旅のラクダのシファール手綱¹⁷⁾を固く握り締めるばかり。困苦にひたすら耐え、砂漠行に妥協するが日常化してしまいました。固き大地が我が寝台に、石の一塊が我が草枕と成り果てた次第です:¹⁸⁾

流浪の旅はアーミド¹⁹⁾の砦に導き またあるときにはラッス・アイン²⁰⁾の泉へと

bi-āmida marratan wa-bi-ra’si ‘aynin

また時にはマッヤーファールキーン²¹⁾へと 時の変転に身

は羊肉の持て成しもしなかった、ラクダを屠つての馳走もしなかった」=「十分な客扱いをしなかった」と言うことで大変な不名誉の、ないしはケチを指す言い回しなのである。

12) この段のサジュウ(文末・句末押韻技法)の語は順に: iskandariyyati, umayyati / āfāqa, ‘irāqa / ḥaḍara, muḍara / huntū, kuntu / thammin, rammin / ṣabāḥi, rawāḥi。

13) 先に立つ者 maqāmātun: ここでのマカーマートとは「率先して立つ者達」の意味で用いられている。

14) この二詩行は、ジャーヒリYYa(イスラム前)時代の大詩人ズハイル Zuhayr のカスイダ(長詩)から借用したものと。

15) 砂漠 mawāmī; mawmāt の複数形。マウマーとは、「砂漠」を分節する用語の中で<道無き・未踏の>砂漠の謂いである。拙著『砂漠の文化』28頁、砂漠の語彙29を参照。

16) スムグ樹脂 ṣumgha: アラブ世界では粘性のある樹脂利用は、乳香・もつ薬他多くあるが、ここではアラビアゴムの樹脂のことである。アラビアゴムの樹脂のことをスムグと言ひ、光沢あるこげ茶色を呈し、水にすぐ溶ける糊の材料として重宝がられた。わが国も含めて世界中でかつては多くに用いられた。

17) シファール手綱 sifār: シファールとはラクダのヒターム(khitām 鼻面)を着装する頭絡または鼻輪のことである。この用語はラクダのみに用いられ、馬のそれはハカマ hakama と言ふ。シファールは頭絡の場合は細綱や皮紐で頭のぐるりを回されるが、鼻輪の場合鉄製のものが多くなる。複数形は asfira(少数)、sufur(多数)、safār(複数の複数)。動詞サファラ safara は「ラクダにシファールを着装する」の意味を持つ。

18) この段のサジュウの語は順に: sahara, safara / marāmī, mawāmī / finā’i, ‘inā’i / asfārī, sifārī / faqra, qafra / madaḥu, ḥajaru。

19) アーミド Āmid: 現トルコ領東南部ディヤールバクル。チグリス川の上流部。

20) ラッス・アイン Ra’s ‘Ayn: 同じく現トルコ領東南部の町、ナスィービーンとハッラーン間にある

21) マッヤーファールキーン Mayyāfāriqīn: マッヤーファールキーンというこのアラブの慣習に馴染まない長たらしい地名の在所は、ジャジーラ(チグリス・ユーフラテスに挟まれた地域)のディヤール・バクル(現シリア・イラク・トルコにまたがる地方)の町であった。この地方の最大の町が、ナスィービーンである。この長い地名のため、しばしばファールキと略称され、ここ(の)人々、産物、その他形容的に言う時はファールキ(女性形 ファールキYYa)であり、本マカーマ名もこれ採っている。本詩行の脚韻語は mayyāfāriqīnā であり、

をまかせ流されるまま漂う

wa-ahyānan bi-mayyāfāriqīnā

ある晩はシリアの地に留まり 次に見出した地はるか東のアフワーズ²²⁾

laylatan bi-sh-shāmi thummata bi-l-ahwāzi

ラクダの鞍に身を任せては流離う 次の晩はイラクの地に向
かうやもと

rahli wa-laylatan bi-l-‘irāqi

(詩型 ワーフィル wāfir 調 qāfiyya q 脚韻詩)

さまよい
流浪は私をありとあらゆる異境の地に投げ出したものです。そして遂に岩場多い一帯²³⁾を踏み
越えてハマザーンの地²⁴⁾に行き着かせました。その住人は私を温かく迎えてくれ、その連れ合
い仲間達は(興味しんしんと)私の方に首を長くしておりました。しかし私は招待してくれる人の
中で、持て成しの器^{うつわ}の最も大きな人の許に頼りました。無作法とは最も遠そうな人物を選んだもの
でした²⁵⁾。

彼見晴らし良き所に用意せり 旅人招く持て成しの火²⁶⁾ 焚くを

la-hu nārun tushabbu ‘alā yafā’in

心細さ募る時その火の炎 身も心も温かく包めり

idha n-nīrānu ulbisati l-qinā‘ā

(詩型 ワーフィル wāfir 調 ‘ayniyya ‘ain 脚韻詩)

かの人物は私のために寝床をしつらえてくれ、なにくれとなく臥所^{ふしど}を按配してくれました。我が
郷愁が生じ、我が息子への思いが募ると、彼はイエメンの剣²⁷⁾のごとく(素早く察知しその対応
に当たってくれました)、あるいは雲・埃一つ見当たらない空に現れる三日月の如く(その思い遣り
が冴え渡っていたの)でした。彼はあらゆる便宜を図ってくれ、私のその当時の分際^{ぶんざい}では身に余る
ほどでしたし、私の胸襟を開いてくれたものです。部屋の家具を調べてくれましたし、果てはディー

脚韻文字は /n/ ではなく、/q/ としていることに留意されたい。百科事典 *Munjid* (p. 526) によれば、「殉教者の町」として知られ、十字軍時代のキリスト教徒の騎士達の墓が多数集まっている、とのことである。ハムダーン朝(905～1004)の君主サイフッダウラ(在位 945～967)の時代には大いに栄え、この君主の母堂が町の一角に安置されている墓を持つことから、死後自分も同じ墓地に埋葬してくれるよう遺言し、死後そのとおりになされた。大詩人アル・ムタナッビー(915～965)にもこの町を讃えた詩が残されている。(拙訳 アル・ハリリー作『マカーマート』第20話の解説より。アル・ハリリーの方では第20話「ファエリクのマカーマ」として出てくる)。

22) アフワーズ Ahwāz: イラン南西部ペルシャ湾に注ぐカールン河沿いにあり、湿地帯シャット・ル・アラブを介してバスラとの交易幹線にあった。砂糖の生産で名高い。第11話は表題が「アフワーズのマカーマ」になっている。他に第16話、43話に登場。

23) 岩場多い一帯 bilād al-hajar: 文意から察するに、最後の地アフワーズからハマザーンにいたる道のりは4千^{ふた}級の山々を擁するザグロス山脈を越えて行かねばならない。「岩場多い一帯」とはしたがってザグロス山脈を指していると見られる。

24) ハマザーンの地 Hamadhān: イラン西北部の古都。著者アル・ハマザーニーの故郷。

25) この段のサジュウの語は順に: ahyā‘u-hā, aḥibbā‘u-hā / jafnatan, jafwatan。

26) 持て成しの火 nār al-qirā: 遊牧アラブの美風の一つ。余裕あるベドウィンは夜間テント前で焚き火を焚き、通りかかる者を呼び止めて持て成しをした、夜間の旅人には有難い恵みとなった。「持て成しの火」については、第5話の訳者解説参照。

27) イエメンの剣 sayfun yamānin: この表現は韻を合わせるために、文法的には逸脱しており、正しくは as-sayfu l-yamāni が正しい。古来アラブの剣および鋼はディマシュキー dimashqī (ダマスク鋼)として、そのしなやかさと切れ味鋭さが知られた。それと並んでイエメン製も有名で、いずれも鍛錬法により、日本刀とは対照的な刃紋を呈し、多くはより円形に近いもので、それがしなやかさを生んだ。彼らの剣の舞は従って剣を横に振って抜き身の震えを見せることなのである。ここでは察知や感の鋭さや反応の素早さをイエメン鋼の刃のそれに例えているわけである。

ナール金貨一千枚ほども差し出されたのです。私がそこを飛び出したのは他でもありません、彼の余りの物惜しみの無さ故なので御座います。贈り物は引つ切り無しに続き、進物の雨は止むことはなかったのですよ。結局私は逃亡者のように、(人を見て)逃げ去る野獣のようにハマザーンを後にせねばなりませんでした²⁸⁾。

幾つもの街道を踏み越え、難所続きの所も何とか克服し、国々(の治安の悪い所)も切り抜けてきました。心に残るは、我が故郷の妻²⁹⁾と一粒種の息子のこと。我が子は例えてみれば銀製の腕輪、貴重この上なきもの。されどわが屋敷も今は壊されうち捨てられ、辺りの女子供達の遊び場^{もてあそ}で弄ばれていることでしょう。

さて皆様、今や私の許から無心の風があなたがたに吹いております、懇願の薫風が！御覧ください、アッラーがあなたがたに慈悲を垂れ給わんことを！この一人の瘦せこけた風晒し^{さら}の人間を、困窮に導かれるまま、貧困の喘ぎに追い立てられている者を；

旅の兄弟^{とも}となりて大地をおちこちと 彷徨^{さまよ}い砂漠の果ても何処^{いずこ}の地やら

akhā safarin jawwāba arḍin taqādhafat

彼の様は頭髪梳^{くしけず}ることなく縛^{もつ}れ絡まり 晒^{もつ}されし身体身奇麗^{みぎれい}
にも出来ず埃だらけ

bi-hi falawātun fa-huwa ash'athu aghbaru

(詩型 タウイール *tawīl* 調 *rā'iyya* r 脚韻詩)

あなたがたの上にアッラーがより良きよう導き手を垂れ給わんことを、あなたがたの上にアッラーがより悪しき道を敷きませぬよう希^{こいねが}います！³⁰⁾

イーサー・イブン・ヒシャームは語り続けた：一座の人々は、ワッラーヒ(神に誓って)、この御仁の訴えに痛く心を動かされていた！彼らの目はその洗練された言葉に煽られてもらい泣きをしているのではないか！そして(見てみると)一座の人々は皆その時に持ち合わせるだけの金品を彼に施したのである。こうしてその後この御仁は我々に感謝の言葉を述べながらこの場を去って行った。私は一人、彼の後を追ったものだ。すると何と、この人物こそ、ワッラーヒ、我らがアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師ではないか！³¹⁾

第9話 ジュルジャーンのマカーマ 完

第9話 訳者解説

本話はマカーマ文学の内容としては新機軸を開いていよう。稼ぐ労力の必要ない待遇を与えられて、食客としてそのまま居候できたはずなのに、それを敢えて甘受せず逃げ出す設定を組み込んで

28) この段のサジュウの語は下線の順に：maḍja'an, mahja'an / yamānin, qatamānin / qadrī, ṣadrī / dāri, dīnārīn (このペアーは厳密には不一致) / tawālat, inthālat / shāridi, ābidi。

29) 我が故郷の妻 umm mathwāya：直義は「我が家の母」。自分の妻のことを婉曲に「ウム・マスワーヤ」と言ったり、シットゥ・ル・バイト(家の女主)、あるいは「ウム・アウラーディー」(umm awlādī 我が子供達の母)と言ったりする。わが国でも「妻」と言わず、わざわざ「妻」と別称したり、「奥」とか「連れ」、子供がいる場合「(お)母さん」などと言う発想と同じ。

30) ここまでのサジュウの語は下線の順に：masālika, mahālika, mamālika / ihtiyāji, ilfāji / hājatu, fāqatu。

31) この段のサジュウの配慮は欠如しており、どこにも見当たらない。

いる。普通ならば心身を勞して活を入れ、人の集まりに姿を見せ、巧みな弁舌で聴衆の同情を得て、彼らから何がしかの鑑錢びたぜにを受けてその場を去る、と言うのが見せ場の筋である。そしてその舞台を主人公の滞在地ハマザーンでのこととしている。市民の申し出が多くある中で、一人の裕福な市民の世話になることにしたと。そしてホストが物惜しみせずなんでも与えるものだから、その善意に耐えられず、さしもの騙り手も騙りをするどころではなく、^{たき}堪らず逃げ出した、というのだ。善意に縋り、好意を利用するマカーマの主人公も、その血筋と元の身分と教養が差し障ったのであろうか。ホストの寛大ぶり、物惜しみの無さに、居ても立ってもいられなくなってしまったのだ。部屋の提供、家具の整え、食事や日常品までの提供、さらに小遣いや細々とした贈り物までもたらされる。小遣いも半端ではない。ホストは「ディーナール金貨一千枚ほど」主人公に渡している。ディーナール金貨といえば、我が江戸時代には「大判」のも匹敵する金額。それが一千枚である！

この寛大者がどの町の人物であったかも重要である。主人公がこの町に辿り着くと、「その住人は私を温かく迎えてくれ、その連れ合い仲間達は（興味しんしんと）私の方に首を長くしておりました。しかし私は招待してくれる人の中で、持て成しの器うつわの最も大きな人の許に頼りました。無作法とは最も遠そうな人物を選んだものでした。」とあるように、町の住民がこぞって善意に満ちた人々であった、と言う設定である。町の名はハマザーン、著者の名はハマザーニー、即ちハマザーン出の人。町の噂として有名な例に「メルウ（イラン北部の町）の人々のケチぶり」、「ホムス（シリア中西部の町）の人々の間拔ぶり」、などがある。著者の伝記の中で言及していたようにハマザーンは、メルウ以上にケチで評判の町であった。ここでハマザーンを場所として選んだについては、皮肉とか風刺とかで選んだのではあるまい。著者の魂胆はそうした不名誉の挽回の意向が働いたものであつたらう。明らかに出身地の不評を否定したいという「おらが町」の郷土愛が魂胆にあって、こうした「接待が過ぎる」話と舞台とすることで、聴衆や読者に無意識裏に「おらが町」の評判を向上させたい、是正したいという設定意図が絡んでいたのであろうと推測出来る。

マカーマのジャンルとして、筋の粗さもサジュウの不十分さも目立つ作品である。筋の方は、主人公は「傍らぼろに檻ぼろをまとった子供を連れて」登場しているはずなのに、しかも複数表現になっているため、少なくとも三人以上は連れての舞台のはずである。この子らを連れてのアレクサンドリアからの流浪の旅であったのだろうか。その後の物語の展開に、この子らについての言及は一言も無い。ハマザーンでの満ち足りた滞中で、故郷を思い出すシーン「郷愁が生じ、我が息子への思いが募ると」の折ですら、「この子ら」が同行していることを全く失念しているのである。

詩の挿入にしても、盛り上がりの部分と締めくくりの部分にまとまった十分な詩行の展開を見るのが定型だが、それとは程遠い。四箇所うなの詩の挿入はあるものの、僅か一・二詩行の短いもので読者を唸らせる趣向にまでは至っていない。著者ハマザーニーはマカーマは形式として「詩の挿入はほどほど」で良いとする向きがあるとすれば、本話はそんな事例にもなろう。

語り手イーサー・イブン・ヒシャームは場面切り替えの冒頭と終盤に顔を出し口上を述べており、それはそれとして定型としての配慮はある。主人公との対応が最後となるのは、正体暴露との関連で仕方ないにしても、ストーリーに変化をつけても良いはずである。というのも主人公はアレクサンドリア出身とその登場の名乗りの場面で言わせているのであるから。もっと早い対応をさせ、筋への絡みや変化を見せることが出来たはずである。

サジュウについては、これは予め意図していたはずであるのに、粗さが目立つ。段落毎の訳注でそれを示しておいたが、意図通りのほぼ行き届いた段落がある反面、全く配慮が掛ける段落が出てしまっている。厳密にはサジュウとは取れない逸脱や誤魔化しがある。例として挙げると、注 28

の *dāri*、*dīnārin*/ は、脚韻子音 /r/ 及び属格までは合致しているが、限定・非限定の差を最後に露呈してしまい、サジュウ逸脱と看做される。もっともこの点、聴取と読書とでは評価が異なろう。最後の逸脱にしても、聞いて理解する分には問題とはならない。さらには著者の物書きの態度はマカーマにも顕われ、一気呵成に書きあげ、その後は手を入れるという作業はしなかったのではないか、と疑われる節が見て取れる。形式においても内容においても。辻褄を合わせていない面が露呈していることが多く、訳においてはカッコで文意を合わせたり、方向性を示す補いを行っていてもいるが、それでも齟齬をきたしており、救いようのない点が見られる。とくに話の導入部と帰結部において。

本話の写本の異同に関しては、Paris 写本 (19 話しかない) では欠如している。Fātiḥ 写本では第 19 話に、Aya Sofya 写本では第 12 話に配されている。標題については Cambridge 写本 *maqāma al-mustamīḥ* (執り成しのマカーマ) とされている。

第10話 イスファハンのマカーマ モスクの早朝礼拝に立ち寄ったばかりに

(原文 M. ‘Abduh 編 pp. 51–54 より)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて次のように話した：私はイスファハン¹⁾に滞在した時のこと、ラッイ²⁾へ旅することを思い立った。そこで日陰の伸びぐらいに(時を置かず)旅支度を整えた。そして(ラッイ方面に行く)カーフィラ(キャラバン)を瞬時も逃さず期待して待った。毎朝ラーヒラ(ラクダ隊)が出立しないか目を皿のようにしていた。さてある朝私が期待していた一隊が到来した。(早速加わって出かけたのだ)がそのとき折悪しく、(ファジュール＝早朝の)礼拝の誘いの呼び声があって、それを(微かに)聞いてしまったのだ。(耳にしてしまったら)それに応えるのが(信徒の)義務である。(仕方なく)同行の士達から身を退いて、いずれはわが身にご利益が跳ね返って来るであろう集団礼拝へと赴いたのだ。後にしたキャラバンが去ってゆくのは流石に後ろ髪を引かれる思いであった。しかし(すぐに追い着けるとして)砂漠行の難儀を(軽減してもらうべく)礼拝の祝福がありますよう神に祈念することにした。礼拝者達の横列の先頭を選んで並び、(礼拝手順の)ウクーフ(立行)に入った³⁾。

イマーム(導師)がミフラーブ(礼拝方向を示す壁龕)の方^{へきがん}に歩み寄って、コーランの開扉の章を唱えた。それも(選りによって)ハムザの流儀⁴⁾に従って、例の「伸ばし」と「声門閉鎖音」の特徴を十分効かす発声法で……。私のほうはキャラバンが遠ざかり、ラクダ隊が離れ去るのが気になって居ても立ってもいられなかった。導師は(私の個人的事情など知るわけはなく)開扉の章に続いて、「来るべき時」の章⁵⁾の詠唱に入っていた。私のほうでは忍耐の炎で焙られ通しで、煮えたぎっていた。怒りが熾きた炭ようになってわが身を焼いた、ひっくり返しては焼かれる思いであった。だがその場に要求されるのはただに沈黙それに忍耐⁶⁾だけであった、(導師には)張り上げる声、(参集者には)墓(の如き沈黙)！その場における信者の宗教的高揚は身をもって知っていたから、(礼拝所作の最後の)サラームの挨拶も無く、礼拝を端折って立ち去ろうなどとはとても。仕方なくそのままのポーズでその章の詠唱が終わるまで立ち続けるほか無かった。キャラバンのことは諦めねばならなかった、乗用ラクダもラクダ鞍(や荷物)も断念せねばならなかった⁶⁾。

- 1) イスファハン Isfahān; イスパハン Ašbahān とも。ペルシャ語ではエスファハン。イラン中部の古都。ヒジュラ暦 23～4 年、正統カリフ・ウマルの時代イスラム化される。11 世紀のセルジューク朝時代に繁栄を迎え、さらに 16 世紀サファヴィー朝の首都となるに及んで、旧市街の西南に発展して現在の形を整える。王の広場は新旧市外の結節点に設けられ、それを囲むように王宮、大モスク、バザール他美観を呈し、今に至るまでイラン随一の観光名所となっている。
- 2) ラッイ al-Rayy; ペルシャ語ではレイ Rey。イラン中西部ダイラム州の州都として重要な都市機能を果たしていた。が 13 世紀モンゴル軍の侵略に会い、以降廃れ、北部に新たに現在の首都となるテヘランが建設され、併吞されていった。アラビア語では、語末処理が難しいため、ラッイのニスバ(形容辞)は、ラッイーではなく、ラーズイー Rāzī と呼び習わしている。西欧でもラーゼスの名で知られる哲学者・医学者ラーズイー(925 歿)はこの地出身であった。著者の故郷に戻らぬ旅の最初の寄留地となった都である。
- 3) ここまでのサジュウ(文末・句末押韻技法)の語は下線順に: rayyi, fayyi / lamḥatin, ṣabḥatin / tawaqqā‘tu-hu, sami‘tu-hu / ijābati, ṣaḥābati / udriku-hā, atruku-hā / falāti, ṣalāti / ṣufūfi, wuqūfi。
- 4) ハムザの流儀 qirā‘a Hamza; コーランのキラア(読誦法)には最も権威ある流儀として七派あり、その一つがハムザの流儀である。ハムザ Hamza ibn al-Habīb (d. 156/773) は、同じ正統七読誦者のアースィム ‘Āsim ibn Abī al-Nujūd (d. 127/744) に師事してクーファ派を継承する。彼のキラアの特徴は、マッダ(母音の伸ばし方)と子音で声門閉鎖音であるハムザの強調にあった。したがってどの流派よりゆっくりと時間を掛ける読誦法であった。
- 5) 「来るべき時」の章 sūra al-wāqī‘a; コーラン全 114 章のうち、第 56 章にあたり、「来るべき時」即ち「終末」が主題となる章である。96 節からなり、しかもマッダとハムザを用いた語句が多いため、ハムザの流儀の最も聞かせどころでもある。
- 6) ここまでのサジュウの語は下線順に: mihrābi, kitābi / hamzata, hamzatan / qāfilati, rāḥilati / ataṣallabu, ataḥallabu / ṣabru, qabru / qawmi, maqāmi, salāmi / ḍarūrati, šūrati, sūrati / qāfilati, rāḥilati。

イマーム（導師）は背中^{かが}の弓を屈めルクーウ⁷⁾の所作に入った、恐れ畏敬^{かしこ}む風に、ひたすら謙遜するように。その様子はかつて目にしたことが無いものであった。やがて頭を上げ、また彼の手を上に上げながら、「アッラーは聞き入れ給う、彼を賛美する信者の言葉をば！」と唱えた。それからまたウクーフの立拝に入ったのだが（その時間をかけること）眠ってしまったのではと疑われるほどであった。やがて（スジュード＝伏拝に入って）右手を地面に付け、額^{ぬか}を額づけ、そして顔も伏せる所作に入った。（一同が平身低頭の中これ幸いとばかり）私は頭を上げ（見回して）逃げ出す機会を窺った。しかし礼拝者たちの列には僅かな隙間も見出せなかった。それで仕方なく私もスジュード（＝伏拝）に復したわけである。

導師は最後の礼拝所作クウード（座拝）に移って（「アッラーは至大なり」と唱える）タクビールを朗読した。そして立ち上がると二番めのラクア（礼拝所作一順）に入って、ウクーフ（立拝）のまま、再びコーランの「開扉の章」と「来るべき時の章」の朗詠を始めた。その詠法と言ったら「その時（＝終末）」が来てもおかしくない位に時間をかけるものであった。参集する信者達の宗教心を削ぐことにならないかと恐れるほどであった。ようやく二つ目のラクアが完了すると、両の顎鬚の間からシャハーダを唱えた⁸⁾のであった。また（左右の）両顎を用いてタヒYYA⁹⁾を送ったのであった。

（そこで礼拝が終了となったので内心ホットして）私は言ったものである、「ようやくアッラーが出口を容易にしてくれ給うた、救出^{おんじゅう}を近づけ給うた！」と。ところがである、一人の男が立ち上がって音声を張り上げた、「皆さんの中で、サハーバ（預言者の教友達）を、そして信仰共同体を大事に思われる方々をお願い申し上げる、暫らくの間私の話に耳をお貸し下さいませ！」¹⁰⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：（こう声を掛けられると）私の方では尊厳を保つためにも、いやでもそこに留まらねばならなかった。この人物はこう訴えを続けていた「皆さん、真実以外は述べてはならないと言うのが、自分自身への義務と心得ておりますし、また他人の言も誠言^{まこと}の証言^{あかし}として採る、と言うのが私の信条です。私がここへ来ましたのも、あなた方の預言者からの有り難きお言葉を伝えるためなのです。けれどもすぐにはそれを伝えることは出来ません、と申しますのもアッラーがこのマスジドを清浄にしてくからの話ですから、神の預言者として聖性を疑う不埒な者はここから排除されねばなりません」¹¹⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームはさらに語りを続けた：（何とまあ 逃げ出そうにも）彼は私を足かせで結わえてしまい、黒鉄^{はがね}の綱できつく縛ってしまったのである。この人物が述べ立てるには、「私の夢の中に預言者様——彼の上に祝福と安寧がありますように！——が出現れました、恰も雲間の太陽のごとく¹²⁾、真つ暗な闇夜の満月のごとく。あのお方は歩いておられました、星々が後に

7) ルクーウ rukū'：「背中を曲げる、屈めること」。ラクア（礼拝所作一巡）の2番目の所作であって、①ウクーフ（立拝）、②ルクーウ（屈拝）、③クウード（座拝）、④スジュード（伏拝）の順に所作を行う。そして①に戻って繰り返す。その間には定まった唱句を小声で唱えることになっている。ここでは①ウクーフの所作と唱句を今までしていたことになる。定句及び第56章の分量から勘案してもおよそ20分はかけていたであろうか。

8) シャハーダを唱えた tashahhud：直義は「シャハーダを唱えること」。シャハーダとは以下の誓句を唱えること、「我は誓う、神はアッラー以外に無きことを！」(ashhadu an lā ilāha illā llāhu)、「我は誓う、ムハンマドはアッラーの使徒であることを！」(ashhadu anna muḥammadan rasūlu llāhi)。神の唯一性とムハンマドの使徒性の表明。

9) タヒYYA tahiyya：一般義は「挨拶」であるが、ここでは礼拝所作の最後、はじめとなるもので、礼拝者一人一人が己の両肩に居てその信者の善行、悪行を書き留めるとされる＜天使への挨拶＞とされている。顎を向け、口を開いて行う。

10) ここまでのサジュウの語は下線順に：rukū'i, khushū'i, khudū'i / yada-hu, ḥamida-hu / yamīni-hi, jabīni-hi / furṣatan, furjatan（一文字違い）/ sujūdi, qu'ūdi / sā'ati, jamā'ati / rak'atay-hi, lahyay-hi, akhday-hi / makhraja, faraja / jamā'ata, sā'atan（語尾子音不一致）。

11) ここまでのサジュウの語は下線順に：'irdī, ardī / ḥaqqi, šidqi。

12) 恰も雲間の太陽のごとく ka-sh-shamsi tahta l-ghamāmi：直訳は「雲の下太陽のごとく」である。文意の流れを

従い、衣の裾を引き摺っていましたが、天使たちがその端を持ち上げておりました。やがてあのお方はあるドゥアー（祈祷文）を私に授けられました。そしてそれをウンマ（信仰共同体）に教諭すようお願いになったのです。そこで私はその祈祷文をこれらのキルターシュ紙¹³⁾に記しハルーク¹⁴⁾と麝香、それにサフランとスック¹⁵⁾で香り付けを致しました。このもったいない紙を是非にと思われる方にはお分けします。また必要とは思わないから戻すが、キルターシュ紙の足しにと（施しをな）される方には喜んでお受けいたします¹⁶⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：聞いていた回りの信者達からは、ディルハム銀貨が次々と彼の上に降り注がれ、遂には本人が困惑するほどになった。こうしてこの人物は退いていった。私は彼の頭の良さと詐術の巧みさに、またその生活の糧を得る巧緻さに驚き呆れて後を付いていった。彼の境遇について尋ねてみたいと思ったからだ。が、思いとどまった。彼と話を交えることは……私は沈黙を保つことにした。（思い当たる節があり）考え込んでしまったのだ、彼の厚顔不遜さの際立っていること、人に慈悲を乞う巧みさ、他人を話術で引き留める術、手練手管で金銭を掠め取る術……そして彼を見つめた。と、矢張り彼、アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師であったのだ！思わず私は声を掛けていた、「なんでまたこんな騙くらかしをしなさったのです？！」。すると師は笑って、詩を吟じて我が返事としたのである¹⁷⁾；

人なんて皆口バなのさ だから好きなように導けば良い

an-nāsu humrun fa-jawwiz

争う者あらばそれに勝て それを凌駕して行くのだ

wa-bruz ‘alay-him wa-barriz

獲物たる人々より望むもの獲たならば

ḥattā idhā nilta min-hum

何の躊躇いがあるう 直ちにそこを離るが良ろしかろう

mā tashthā-hi fa-farwiz

(詩型 ムジュタッス mujtathth 調 zā’iyya z 脚韻)

第10話 イスファハンのマカーマ 完

阻害しないよう本訳のようにした。次句の「真つ暗な闇夜の満月のごとく」の直訳は「完全な夜（における）満月のごとく」となる。

- 13) キルターシュ紙 qirtās；現今では「紙」はワラク waraq と呼ばれ、植物の「葉」と同義となっている（わが国の紙の数え方一葉、二葉と同じ考え）。キルターシュは今のエジプトなどでは豆や種などを入れる円錐型の紙容器の意味に使われている。
- 14) ハルーク khalūq；khalāq とも言われる。サフランを主体とした、色が黄色から赤みがかった濃度の濃い香水。女性のみで使用される。ハルーク khalūq の語義は「美しく作り上げる」ことであり、外延として「香り化粧する」こと。派生形ハッラカ khallaqa とは「他人にハルークを付けてやる」＝「香水・芳香を付けてやる」。タハッラカ takhallaqa とは「自分自身にハルークを付けてやる」→「香水・芳香を自分の体に付ける」となる。
- 15) スック sukk；麝香を主体にして、ラーマク rāmak と呼ばれる原料とともに突き砕かれ、ヒーリー khīrī と呼ばれる特性油で捏ね上げられたビッチ状の黒い濃い香水である。スックは濃厚な原液であるので、スッカ (sukka) で掬い取って希薄にして用いられる。これがスックの由来であって「狭い・細い針または釘」で、小さな耳掻き状のものである。スックは欧名でも socc として知られている。
- 16) ここまでのサジュウの語は下線順に：quyūdi, sūdi / manāmi, ghamāmi, tamāmi / tatba’u-hu, tarfa’u-hu / miskīn, sukkīn / wahabtu-hu, akhadhtu-hu。
- 17) ここまでのサジュウの語は下線順に：zarqi-hi, rizqi-hi / amsaktu, sakattu / waqāḥati-hi, malāḥati-hi, istimāḥati-hi / ḥīlati-hi, wasīlati-hi, ḥīlati-hi。

第10話 訳者解説

内容的には変化があつて、また独自の慣習が述べられていて興味深い。ある町や都市から長旅にはどういう手立てで出かけるのか、キャラバンの加わり方、モスクでの礼拝の仕方、礼拝後のよくある出来事、特に今回のマカーマの舞台がモスクであったことは幸いであつた。異教徒の我々にも、礼拝の実際を例示してくれているからである。マカーマの舞台となっているので、礼拝自体多少日常のそれとは異なつていようが。注7で記したように、イスラムのサラート(ṣalāt 礼拝)はラクア(礼拝所作一巡)を何回繰り返すかにより成り立つ。細かく言うと、日に五度の礼拝が信徒への義務であり、それらのラクアの内訳のおおよそは早朝の礼拝が二度(本話でもこれに当たり、二度のラクアを行っている)、正午の礼拝四度、午後の礼拝四度、日没の礼拝三度、夜の礼拝四度、ということになる。本話では早朝の礼拝であるから、最も短い二度のラクアで済む。早ければ十分間ほどで終わる。語り手もその積りでキャラバン隊を離れた、と想定して宜しかろう。さらに中座して抜け出す手段、我が国での落語や物売、見せ物師が行ったような集まった客の逃げ出しを防ぐ手段など、の披露があつて彼此の別が見えて興味深い。

しかし本話は別の例を示してくれてもいる。礼拝を主導するイマーム(導師)次第では小一時間ほども掛かる場合もある事例である。一般には、何か特別の日の場合の礼拝は、より長めのラクアが採られることは間々ある。大モスクに行くとき参集した横並びの礼拝者に対して、ムアッジンなどが後列の少し高い所からイマームの動作を見守って、次の所作に移ると信者に大声で念唱してそれを伝える。するとそれを合図に礼拝者達も次の所作に移る算段が採られている。ここではイマームが自ら声を出して、次の所作に移る時も自ら報せていたことが記述から推断できる。従つて時間をたっぷり取れる①ウクーフ(立拝)、③クウッド(座拝)などではコーランの聖句が普通に小声で詠まれるが、ここではイマームが結構大きな声でムクリウ(コーラン朗詠者)まがいに読み聞かせていたのであろう。しかもハムザ流と来ているから、本格的なイルム・ル・キラーア(コーラン読誦学)を収めたイマームであることが分かる。ハムザ流はこのキラーア(読誦法)において、最も正統と看做されている正統七読誦(al-qirā'a al-sab'a)の一つであるが、たっぷり聞かせる詠唱(即ち音楽的要素)を多分に加味した流派であつた。従つて時間を気にしなければ、聞くに好まれたのだが、ここでは如何にせん、時間に追われている語り手であつたため、否定的に捉えられている。

この一篇もマカーマ文学としては、断片を切り取って成立させている、と見てよいだろう。ストーリーとして、離れ去ったキャラバンはどうなったのか、己の乗っていた乗用ラクダ及び積荷とした全財産はどうなったのか。何の配慮も無く終り、尻切れトンボである。ましてはキャラバン隊を離れる時、驚くことに身一つで抜け出していたことになる。前後の隊員もいたはずで、それらの人物にも断わりをいれず。最後列であつたということであろうか。興味深くまた不審に思えたのは、キャラバン隊の団員だと皆ムスリムのはずだ。ファジュール(早朝)の旅立ちなので静寂であつて、隊員だれだとして礼拝のアザーン(呼び声)が聞こえなかったはずは無く、その時刻であれば自発的に礼拝への備えを行うはずである。そうした不審の点を補うべく、訳ではそこところは大方状況説明的に付加したのであるが。

主人公の騙りの手口が披露されたのは、これまでのマカーマにもあつた。しかしその騙りで儲けが出来たかどうかを記したものは無かつた。今回初めてそれが功を奏して、儲けた記述が加わったことになる。「聞いていた回りの信者達からは、ディルハム銀貨が次々と彼の上に降り注がれ、遂には当人が困惑するほどになった」、と。

今回のマカーマでは、語り手が進行役としての登場を行つて口上を述べる事が多くて、文意の

流れを殺ぐ結果となっている。欧劇のコロス（choros）の如くに都合四度も顔をだしているのであるから。定番のマカーマは、出だしの本舞台導入部と、後舞台の帰結部分のみの二回であるから、まだその辺りのスタイルが定着していなかったことになるだろう。

サジュウ技法への配慮と詩行の挿入についてであるが、サジュウの方は一応の体裁を整えており、その技法の配慮はあったとみて良いであろう。詩の導入に関して、本舞台の盛り上げの部分、後舞台の帰結の言い訳の部分は如何であったか。前者においては全く欠如し、後者においては僅か一行の韻文で終わっている。つまり詩行の入れ込みに関しては、このマカーマ全篇を通じて一詩行のみの挿入で終わっていることになる。作者アル・ハマザーニーのマカーマの少なめの詩作導入の意図がここでも指摘できよう。

本話の写本の異同であるが、Aya Sofya 写本では第2話に置いており、面白さからしても首肯できよう。Fātiḥ 写本では21話に、Paris 写本では第19話に配されている。標題の異同に関しては Cambridge 写本はタイトルが欠如しており、一方 Paris 写本では maqāma al-imām（イマームのマカーマ）としている。イマームとはこの場合、最前列のさらに前にいて礼拝を先導する「導士」のことである。

第11話 アフワーズ¹⁾のマカーマ 棺持ち出され逸楽を止められる

(原文 M. ‘Abduh 編 pp. 55-58 より)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて次のように話した：私は（まだ若かりし頃）仲間と共にアフワーズに逗留していた。その住人達は大したものだ、何時であっても誰の目から見ても、頭在天辺から足の先まで申し分の無い品の良さを保っていた。そして我々の方であるが仲間全員はまだ鬚の生えない若者、望み多き^{うぶ}初心者であり、あるいは鬚が生えなかった青二才、受容力^{うけりき}持った青年であった。皆、一日一日朝は朝で、夕は夕で、その来るのが（話に興ずのが）待ち遠しくさえあった。そうする中で我々はどのようなことが最低限守るべき約束事なのか、付合う決まりを定めたものである。同胞愛^{なかつまうち}、その絆をいかに強めるか。快楽、その過ごす時間帯を何時にするのか。また飲酒するとして、飲み交わすのは何時頃が良いのか。交際するとして、お互いになんていう点を心掛けるのか。付き合いが不運にして上手くいかなかった場合、どのようにして元の鞆に収めるのか。飲み会をするとして、何処からそれを入手するのか。改まった会合を開くとして、どのように取決めたら良いのかなど²⁾。

仲間の一人が声を上げた、「兎も角^{とかく}今回は）私に場所と食べ物を受け持たせてくれまいか」。他の仲間が「じゃあ私は飲み物とヌクル（摘みやデザート）を担当しよう」と応じた。こうして我々は集って、然るべき所に（浮かれ気分）で出かけたのであるが、その途次一人の男に出会ってしまったのだ。身につけているものは上も下も襦袢衣^{ほろ}で、右手には尖り取っ手杖³⁾を持ち、何と肩に担いでいるのは棺ではないか！我々一行はその棺を目にした時、不吉な予感に襲われた。顔をそれから逸らし、それに対してわき腹を折り畳んだ⁴⁾（＝近づくまいと身を避けた、身を反転した）のである。この男は我々に向かって絶叫するかのように叫んだ、その大音声は、それによって大地が砕け散り、星々が飛び散ってしまうのではないかと思うほどであった⁵⁾。

「矮小^{かろう}んじましたな、皆さんはこれを見て！忌避しましたな、見下しましたな、いずれはあなたがたが乗せられる物を目にして！どうしたというのです、不吉な予感とするとは、皆さんの祖先がかつて乗せられて行き、子孫もまたやがて乗せられるであろう乗り物（＝棺）を前にして！皆さんの父親達がそれを踏みつけ（＝利用し）、また皆さんの息子達も踏みつけるであろう寝台（＝棺）を忌むべきものと看做すとは！アッラーに誓っていうが、皆さんはこうした木棺に運ばれてあの蛆虫となる場に行くのですぞ！皆さんはこうした早馬⁶⁾（＝棺）に乗せられて地中の窠みに行くのですぞ！呪われてあれ、不吉と看做すとは、皆さんは占い師になったとでも！忌み嫌うとは、皆さんは聖別された方々であるとしても！そんな占い（棺桶＝死＝不吉と言う判断）に何の益が在るとい

1) アフワーズ Ahwāz；ペルシヤ湾に接するイラン東部の町、既出、第9話注27を参照。

2) ここまでの冒頭段のサジュウ（文末・句末押韻技法）の語は下線順に：āmāli, iqbāli, layāli / qawā‘ida-hā, ma‘āqida-hā / (nataqāda-hu, nata‘ātā-hu, natahāda-hu, natalāfā-hu)。

3) 尖り取っ手杖 ‘ukkāza；杖の取っ手の部分が両端で異なり、右が普通の握りの部分とすれば、左は zuji（槍の穂先、矢尻）となっているもの。鈍角の、触ったら切れるほどの物ではない。同じく縦長の斧状の物もあり、旅などでは重宝する。

4) わき腹を折り畳んだ ṭawaynā dūna-hā kashḥan；直訳は「それに対して横腹を折り畳んだ」。類似した言い回しに ṭawā kashḥa-hu ‘an-hā（彼は彼女と関係を絶った）、ṭawā kashḥa-hu ‘ala l-amri（彼はひそかにそのことを決意した）など。

5) ここまでのサジュウの語は下線順に：nuzlu, naqlu / ‘ukkāzatun, jināzatun / ṣafḥan, kashḥan / tanfaṭiru, tankadiru。

6) 早馬 jiyād；棺台を早馬に例えている。イスラム教徒自身、死んだ後の遺体を、午前中ならば午後に、午後ならば翌朝に、棺台に乗せて埋葬してしまう慣行に対しての判断が吐露されている。死者の早急な対応に対しての尚早観があることの一つの証左となろう。著者アル・ハマザーニーの予感であろうか、早馬に乗せられ生きながら墓中の人となった逸話を自分自身持つことになろうとは！序の伝記の項参照。

うのか、(浮世の)まやかに踊らされる者達よ！」⁷⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：この男は我々がこれから行なおうと決めていることを止めさせようとしていたし、また我々がこれからしようとする欲求を不首尾に終わらせようとしていた。そこで我々は彼のほうに近寄り、持ち掛けた、「あなたの訓戒に我々は如何応ずれば良いのです？あなたの発言を愛でて報いるには如何したら良いのでしょうか？それとももっと続けたいのですか？」。彼が答えるには、「皆さんの行く先には、目指そうとする水場があります、皆さんが二十の年月⁸⁾をかけて旅して来た所です⁹⁾。

人は誰も旅する者 二十の巡礼月を重ねながら

wa-inna mra'an 'ishrīna hijjatan

果ての水場を辿りゆく その水飲むは直ぐそこぞ

ilā manhalin min wirdi-hi la-qarību

(詩型 パスイート basīṭ 調 bā'iyya b 脚韻子音詩)

皆さんの頭上には、皆さんの隠し事まで知り給う方がまします。お望みとあらば皆さんを覆う衣服まで取り払ってしまわれましょう。皆さんを現世では寛大に扱われ、来世では知識によって判断を下されましょう。ですから死を絶えず念頭に置かねばなりません、邪^{よこし}まな雑念が入り込まないように！もしも邪気が内々に入り込み巢食ったならば¹⁰⁾、それは手に負えないことになりましょう！それを念頭に絶えず対処すれば、その時からでも(神が)見過ごされることは無いでしょう！もしも忘れたままでいるならば、それは何時までも(最後の審判の)悔いる起因として残るでしょう！無視して眠りに就こうものなら、呼び起こされること¹¹⁾になりましょう。疎んじ嫌っても、執拗に付いてくることになりましょう」¹²⁾。

我々はさらに質した、「兎も角あなたの狙いは何なのです？」。この男の答えるには、「境界あるものより長く、数えられるもの以上に沢山のものです」。我々が「今この時間何をお望みで？」。「過ぎ去った過去(の罪)を振り返って戻し、これからの(誤った)出来事を予め防ぐことです」。我々は語気を強めた、「そんなことは我々に関係ないことだ。それより現世の楽しみを、浮世の花飾りを一緒に味わおうとは思いませんか？」。こう話を向けると彼は、「わたしにはそんな欲求はありません。こうなった以上わしの望みは、あなたがたがわしの訓示を肝に銘ずるというより、(悪行に)突っ

7) ここまでのサジュウの語は下線順に：ṣuḡhran, qasran / aslāfu-kum, akhlāfu-kum / ābā'u-kum, abnā'u-kum / 'idāni, dīdāni / jiyādi, wihādi / taṭayyarūna, mukhayyarūna / tatakarrāhūna, munazzahūna / ṭiyaratu, fajaratu。

8) 二十の年月 'ishrīna hijjatan；直訳は「二十の巡礼」。この場合 hijjatan < hijja は連接語 dhū (～の持ち主) の前語が省略された形で使われている。ズー・ル・ヒッジャ dhū l-hijja とは「巡礼の持ち主」> 「巡礼持つ月」> 「巡礼月」。ムスリムにとっては一年に一度の年祭に当る。それゆえ春・夏・秋・冬同様「年」の換喩に用いられる。以下の詩行でもそう詠われている。詩はタイマ族詩人イブン・アフマド Ibn Aḥmad al-Taymī から採ったものとされる。その本歌では二十ではなく、五十 khamṣīna である。我が国同様アラブも伝統的には人生五十年、その後の、つまり死後の、来世のことを言っている、とする。

9) ここまでのサジュウの語は下線順に：'aqadnā-hu, aradnā-hu / wa'zi-ka, lafzi-ka。

10) もしも邪気が内々に入り込み巢食ったならば idha stash'artumū-hu；直義は「あなたがたがそれを肌着としたならば」。「肌着を着る istash'ara」と言う動詞は「肌着 shi'ār」と言う名詞からの派生形である。「肌着・下着 shi'ār」に対して dithār (上着・外着) が対応する。

11) 呼び起こされること thā'iru-kum；直訳は「あなた方を仇と狙う者」。イスラム以前の砂漠の民の不文律として、仇討があった。殺された者の魂は己の血が救済されるよう、夜な夜な梟のような鳥となってイスキーニー（私に相手の血を吸わせてくれ）！と近親者の住まいの周りを飛び回っていたという。仇討すべく近親者はそれが果たされるまでは安眠は出来なかった。匿われたり逃げ廻っている殺害者のほうも同様であった。

12) ここまでのサジュウの語は下線順に示した。また最後の三文は見事な対句になっており、連語サジュウの修辭は縦に分かりやすく示した：asrāra-kum, astāra-kum / bi-hilmin, bi-'ilmin / dhikrin, nukrin / tajmahū, tamrahū / wa-in nasītumū-hu fa-huwa dhākīru-kum
wa-in nīmtum 'an-hu fa-huwa thā'iru-kum
wa-in karihtumū-hu fa-huwa zā'iru-kum

走らない¹³⁾ ことの方ですよ」¹⁴⁾。

(気に掛かった私は彼の方に近づいた。すると如何だろう、この人物は我らが師アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師ではないか!)¹⁵⁾。

第11話アフワーズのマカーマ 完

第11話 訳者解説

この作品も掌編であって、ストーリー性としてあっさりしている感がある。しかし主人公が棺を担いで登場するモチーフは衝撃的であって、(浮かれ気分を) 一挙に死および死後の世界に集中させ、深刻な気分へ陥らせる効果を演出している。我々にとっては異教であるイスラム教徒の死に関して考え方、習俗の一旦を知ることが出来る。「あなたの棺が高められせんよう wa-lā rufi'a na'shu-ka」という言い回しがある。棺は出来るだけ低くして運び、その棺を目にした者はそれに触れることが出来るよう、悲しみを共有できるよう、そして可能ならば、モスクまでの葬送行進及び墓地までの野辺送りに加わるよう、教えている。葬儀には一般信徒の参加も望ましいとイスラムは教える。それ故、棺は誰でも触れられるよう、また肩代わりできるよう、出来るだけ低い位置で運ばれる。その習慣を言ったものである。従って逸楽に出かける語り手たちの、棺を見ての動転振りは察することができる。葬儀の場もまた騙りのマカーマ(舞台)となり得るのだ。人が集まり、それを当て込んで稼ぎの場とする。アル・ハリリーの方には埋葬所がマカーマ(舞台)とする第12話「サーワのマカーマ」が墓地での垂訓をやって、お涙頂戴で稼ぎする。当時の風俗も目で確認できる挿絵もあり、形式・内容の出来も素晴らしく参考として欲しい作品である。

語り手は「20の巡礼月」を経た若者達の一団の中に登場し、その後の進行を務める役割を果たしている。語り手の役付は枠としては填まっていようが、ストーリーが一貫してエンディングまで完結しているかという点、中途で終わっている。また相変わらず主人公が曖昧である。内容上、「身につけているものは上も下も襦袢衣で、右手には尖り取っ手杖を持ち、何と肩に担いでいるのは棺台ではないか」として登場し、若者達に死とその後について訓戒を垂れる人物が主人公であろうことは推測できる。しかし最後まで、主人公であること、アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師の言辞が出てこない。本文の結語である括弧内の一文は、本文ではなく校訂者が他の写本から補ったものである。この異写本の存在とそれからの引用は、この一篇のマカーマ作品の不備があり、それを補う意図が編者それぞれに働いていたのであろう。

主人公の騙りや稼ぎであるが、マカーマ文学を齧った者ならば誰でもマカーマ(舞台)で主人公がどんな演技や技巧の冴えを示すのか、それらを期待して読むなり、聞くなりするはずである。騙りのヴェテランである主人公が衝撃的に舞台上に上がりながら、騙りが一切ない。逸楽を謹み来世に備えるよう訴えるまともな説教だけである。十分に稼げる対象である若者達を前にして彼らから何

13) 突っ走ら(ない) takhidū; 直義は「あなたがたは猛突進する」。語根 wakhada は<ラクダの歩態>に関与しており「両足を出来るだけ伸ばし、駝鳥のように全速力で駆ける」である。この歩態をワフド wakhd と言い、<ラクダの歩態>は常足(naṣb)から始まって10種以上に上り、馬で言うギャロップ・襲歩の一つに当る。アラブ文化の特徴としてラクダの関与、および今や死滅してしまった駝鳥が身近にいたことを裏付ける文化項目である。

14) ここまでのサジュウは対句技法をも兼ねており、その連語サジュウの修辞は縦に分かりやすく示した:

aṭwalu min 'an tuḥadda	↓	fā'itī l-'umri	↓
aktharu min 'an tu'adda	↑	nāzili l-amri	↑

15) 最後のカッコ内の一文は本編の校訂・注釈者 Muhammad 'Abduh が他の異本から、補注の形で入れ込んだもの(原文58頁注3)を、訳出しておいた。さすがに不十分さを補わざるを得ない、としたのであろう。

を稼いだのか、稼ぎがあったのかの具体的描写が無い。「我々はさらに質した、「兎も角^{とかく}あなたの狙いは何なのです？」」の辺りで、騙りの場面設定をしてよかったはずである。それどころか、実際には主人公が善人ぶって正論を吐いてしまっている。この時点で主人公が「からかい半分」なのだ、と解することもできるのだが。少しでも出来を良くしようとしたら、その工夫がいくつもすぐに用意されるマカーマとしての一編である。

このように進行役の語り手、稼ぎを行なう主人公も曖昧なら、物語の内容も締まりが無い。若者達の一団はこれからある「逸楽」に耽りに行こうとするところである。その途上引っかかって立ち往生してしまっている。また主人公らしき男もそれを見透かして接近してきたはずである。物語は唐突に端折って終わってしまっているが、続きがあるとしたら、どうやらニュアンスの背後にもっと若者らしいかわい性^なの話の展開を筆者アル・ハマザーニーは意図したのではないか。集まった若者たち、男女隔離社会では隠然として存在する性の問題である。アラブ社会では倫理道德の律している日常生活を皮剥けば、グラミッヤ (ghulāmiyya ≡ 稚児愛) やルーティッヤ (lūṭiyya = 男色) など、同性愛が存在していたし、今も存在している。文学であるから、それをテーマに踏み込んでみたい意向であったのではないか。再読して裏の意向を汲むのも興味深いところである。本書を編集した M. ‘Abduh は全篇 52 話構成されていたものを、意図的に第 26 話を省いて 51 話構成にしているが、この第 26 話のマカーマは「性」をテーマとしていることが知られている。

聞かせどころの詩の挿入は、確かに盛り上がるの部分に入れ込んであるが、僅か一詩行である。それも己の作詩ではなく、タイマ族詩人イブン・アフマドの作品の流用ということであるから、趣向^{うな}を喰^くらせてくれている。代わりに対句技法の修辞を 2 か所見事に披露している (注 12、注 14 を参照)。結末の詩行も欠如している。

本話の異同であるが、矢張り不備と観てのことであろうか、Aya Sofya (33 話まである) 及び Paris の両写本には欠落している。また Fāṭih 写本では第 23 話に配されている。

第12話 バグダードのマカーマ ^{おこ}奢りに奢ってドロンを決める

(原文 M. ‘Abduh 編 pp. 59-62 より)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて以下のように話した：私はアザーズ棗椰子¹⁾を食べなかった、折りしもバグダード滞在中のことだった。^{あいにく}生憎現金の持ち合わせが無かった。外に出て店みせをほつつき歩いた、挙句にカルフ地区²⁾に行き着いた。するとそこに見たのはサワード出³⁾の田舎者であった！彼はロバを一生懸命導いていた。彼の腰帯には巾着と思しきものを覗かせていた。私は内心叫んだ「しめしめ、獲物にありついた！」と。そしてこの田舎者に声を掛けた、「おおアブー・ザイド殿、お達者で！ 何処からお出でで、何処に留まるお積りで、また何時こちらにお着きで？ さあ、私の家にいらっしゃい！」⁴⁾。

サワード出の男は「おらアブー・ザイド⁵⁾でねーだ。アブー・ウバイドと言うだ」と応じてきた。私はすかさず「そうでした、アッラーがサタンを呪いますように！ 思い違いなんて何処かへ行行ってしまえ！ 長い間会ってもいないし、住む所がかけ離れているものですからね、あなたの名前も忘れてしまったんです。あんたのお父さんの具合は如何で？ あたしが最後に会ったときと変わらず元気ですか、それとも別れた後お老けになられましたか？」。田舎者が答えるには、「おとつつあん（はとつくに亡くなって、今ではそ）の墓跡^{おほか}もその上には雑草が生えちまっているぐれーだ。アッラーがおとつつあんを天国に送ってくださることを願ひやす」。私も（さも悲嘆にくれたようにその際の弔いの言動に入った）、「まこと我らはアッラーに帰属する者、まこと我らはアッラーの許に帰り行く者⁶⁾。権力も権能もただただ偉大でいや高きアッラーに拠るもの！」。こう言いながら急いで手を己のスイダール胴着に伸ばして、それを破ろうとし（て悲嘆の素振りを見せ）た⁷⁾。するとサワード出の男は私の腰を拳で握り締めた⁸⁾のである、そして言うには、「後生ですからそのようなことはしねーで下せまし」。私もすかさず、「じゃあ（是非とも）家にいらっしゃって食事^{のぞ}を共にして下さいよ。そう今ならスーク（市場）へ行行ってシワーウ（焼肉）を買ひましょう。スークはすぐ近くだし、そこの料理は絶品ですから！」。この田舎者は肉を食べたい欲求⁹⁾に駆られ、一口入

- 1) アザーズ棗椰子 al-‘azādh; 棗椰子 tamr の一種。第2話ではこのアザーズが表題になっているので、そちらを参照。
- 2) カルフ地区 al-Karkh; 西暦762年円城都市バグダードが築城され、以降1258年のモンゴル軍の破壊にあうまでアッバース朝の首都として栄えた。円城都市は繁栄と膨張とですぐに円城都市郊外に隣接して市街が広がった。まず円城都市の西部にひろがったのがカルフ地区であり、商業の発展は主にここ中心になされた。
- 3) サワード出 sawādiyyu; サワードとはイラク南部チグリス・ユーフラテス河の合流する湿地帯で穀倉地帯であった。この辺りは沖積地帯で、土地の地肌が黒く見えたところからサワード Sawād (黒地) と呼ばれた。
- 4) ここまでの冒頭段落のサジュウ（文末・句末押韻技法）の語は下線順に：azādha、baghdādha（バグダードはバグダーズ baghdādh と呼ばれた）/ naqdīn、‘aqdīn / himāra-hu、izāra-hu / saydīn、zaydīn / aqbaltā、nazaltā / wāfaytā、baytī（最終子音不一致）。
- 5) アブー・ザイド Abū Zayd; 語り手が当てずっぽうに名指した名前。全く偶然であろうが、このアブー・ザイドは一世紀後のマカーマート文学の大成者アル・ハリリー作の『マカーマート』の主人公の名前として登場する。
- 6) まこと我らはアッラーに帰属する者、まこと我らはアッラーの許に帰り行く者。innā lillāhi! wa-innā ilay-hi rāji‘ūna; 人間は神によって創造され、天命をまとうた後は創造主のもとに帰るもの。死もまた避けられないもの。人が死んだ時、お悔やみの言葉として慣用化した。
- 7) それを破ろうとした urūdī tamzīqa-hu; 親類縁者や知人などの死や惨事の報に接すると、悲嘆と憐憫の余り着ている衣類を引き裂こうとするアラブの習慣があった。
- 8) 私の腰を拳で握り締めた qabada ‘alā khaṣrī bi-jum‘i-hi; この動作は、どうかそのようなことをしないでくれ、という当の相手に嘆願することの仕草である。ここでは、相手が悲嘆の余り着ている衣類を引き裂こうとしているのに、そうしないでくれと仕草で示したわけである。
- 9) 肉を食べたい欲求 qaram; 欲求の中でも、食欲についてアラブの特徴を語彙の面から探ったことがある。「食欲」のパラダイムの広がりの中に、興味深い層としてこの「肉を食べたい欲求」であるカラムと並んで、アイマ ‘ayma（乳を飲みたい欲求）と言う用語があり、アラブの遊牧民性を如実に表している、と思った印象がある。

れたい食欲に促され、いやがうえにも食に貪欲になった。しかし罫に落ちたことは露知らず!¹⁰⁾

こうして(スークの然るべき焼肉屋の)シワウの店に着いた。(その店の)シワウからは油脂分が滴り落ちていた、ジュザーバ¹¹⁾(油漬けパン)からは油脂分が肉汁のように流れ出ていた。私は(店員に)声を掛けた、「このシワウからアブー・ザイド殿の分をお取しましょう、それから(食後のデザートとすべく)あの甘い物についても(予約の取り分を)とりますからね。あちらの料理皿からもいくつか選んでおきましょう。それらの料理の上に薄い層を作るほどに、レモン¹²⁾ 水の類を振り掛けてください、そうすればアブー・ザイド殿も美味しく頂けることでしょう」。焼肉職人は肉切り包丁で、焼き釜の中から油こつてりの肉を取り出して切り捌いた。その大きな肉塊をコホル墨の如く薄切りに、麦粉の如く細かく切り裂いた¹³⁾。

こうして(注文を終えて)田舎者が席を取った、私も彼に倣った。彼が黙って(食べたので)私もそれに従った。我々は(メインのシワウ料理)すべて食べ尽くした。そうしてから甘い物屋(の方に行き)声を掛けた、「ルージーナジュ¹⁴⁾を2ラトル、アブー・ザイド殿に量って上げてください。この生菓子こそ咽喉越しに通じ良く、血管に速やかに浸透して行くものですから、そして生地は一夜越しのものをお願いしますよ、二日にわたって伸ばされ、外皮は薄く、詰め物を厚く、敷く香油は真珠のような光沢を持ち、星明りのような色合いをし、口に入ればサムグ(=ガム)のように嚙む前に溶ろけるルージーナジュを。アブー・ザイド殿が美味しくいただけるようなヤツをな」¹⁵⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた: 甘い物屋はルージーナジュを秤にかけ(料理皿に出し)てくれた。それからサワード出の男は席を取ったので私も坐り、腕まくりして食べたので私もそれに倣った。我々は食べるだけ食べた。食べ終わった後、私は彼に申し出た、「アブー・ザイド殿、水が飲みたいになりましたなあ、氷を入れた冷たいのを、この咽喉の渴きを癒し、食べ物から来る熱りを鎮めましょうよ。アブー・ザイド殿、あなたはお座りになっていて下さい、私がサッカーウ(水売り)を連れて参りますから、彼が冷水の一飲みをくれるでしょうから」。こう言って私は店から脱出した。(そして少し離れた)自分からは見え、彼からは見えない場所に座り込んだ。

わが国の伝統文化の中には肉食も乳を飲む習慣も存在しなかったものであり、いかにもアラブ民族の原質・基層が遊牧民・家畜と関係していたかを示す例証となろう。

10) ここまでのサジュウの語は下線順に: zaydin, 'ubaydin / shaytāna, nisyāna / 'ahdi, bu'di / 'ahdī, ba'dī / dimnati-hi, jannati-hi / bidāri, šidāri / ghadā'an, shiwā'an / aqrabu, atyabu / qarami, laqami / ūami'a, waqa'a.

11) ジューザーバ jūdhabāt: 単数形 jūdhaba. タンヌーラ(焼き釜)に上から肉や鳥を引っ掛けて吊るして横から回しながら焼き上げ、下にはその油脂分が垂れてくるのをパンで受ける。このパンがジュザーバであり、油の乗った美味のパンである。

12) レモン summāq; 便宜上「レモン」と訳したが、スニマークとはルンマーン(柘榴)に似た木で赤く小さな実を付け苦酸っぱさに富み、レモンやライム同様スパイスとして好まれた。英訳者 Springerher はスニマークとは rhus coriaria of Linnaeus 及びその実と同定している。わが国の酢橘あるいは柚子のたぐい。

13) ここまでのサジュウの語は下線順に: 'araqan, maraqan / shiwā'i, halwā'i / 'atbāqi, ruqāqi, summāqi / sātūri-hi, tannūri-hi / sahqan, daqqan.

14) ルージーナジュ lūzinaj; lawz (アーモンド)を主体とした菓子、ルージーナ lūzina ともルージーナジャ lūzinaja とも言う。パン粉とアーモンドを粉にしたものを生地、中にアーモンドと jawz (胡桃)を挽き割りにして詰め、ドゥフン・ラウズ(アーモンド油)で仕上げ、菱形に切り離され食される。このアーモンド菓子は相当広まり、西欧にまで広がった。英語 lozenge は普通の辞書にも見られ、「菱形。菱形のもの; (菱形)キャンデー、薬用ドロップ《咳止め用》; (宝石の)菱形面; 菱形窓ガラス。[紋章] 菱形紋」。この英語はスペイン語 losaniza から由来しており、ここへはアラブ統治時代かその後の文化的影響で成立したものと思われる。なおアーモンドの樹と実も、オリーブなどと同様アラブがスペインに持ち込んだものであり、lawz (アーモンド)はスペイン語では allouza と、またポルトガル語では arzolla と言う名称になっている。

15) この段のサジュウの語は凝っており、対句連語サジュウの修辭が十分配慮されている。ここでは縦に分かりやすく示した。2段目最後及び4段目最後は普通のサジュウである:

jalisa	↓	wa-lā ya'isa	↓	ajlā fi l-bulūqi	↓	layliyya l-'umri	↓
wa-jalastu	↑	wa-lā ya'istu	↑	wa-amdā fi l-'urūqi	↑	yawmiyya n-nashri	↑
		lulu'iyya l-duhni	↓				
kawkabiyya l-lawni	↑	saṃghi, maḡdhi					

彼がどうするかを見届けるためである¹⁶⁾。

さてこのサワード出の男は私の帰りの遅いのを不審に思い、立ち上がると彼のロバのところへ出かけた。ところが焼肉屋は彼の腰帯を掴んで放さず、「何処に代金があるんで、あんたが食べた物の？」と迫った。アブー・ザイドが答えるに、「おら、お客として奢って貰っただけで」。焼肉屋は握りこぶしの一撃を見舞った、さらに平手打ちでビンタを喰らわせた。その後で焼肉屋は「一体どうして、何時わしらがお前を招いたというのかね？厚かましい奴め、20 デイルハム支払って行け」、と言葉を荒げた。サワード出の男は噁り泣きを始めた、それから己の齒で巾着の結い目を弛めた。そして零すには、「何度おら、あの小猿¹⁷⁾に言ったっけ、“おらアブー・ウバイドだ”って！なのにあの小猿の奴、“あんたはアブー・ザイドだ”なんて言い張るもんだから！」と¹⁸⁾。

(物陰に隠れてこれを見ていた) 私は心の中で吟じたものさ：

己が糧得るためならば 如何な手段なるとも用いるべし

a'mil li-rizqi-ka kulla ālah

決して自己満足に陥らぬよう 策略次々と上乗といえども

lā taq'udanna bi-kulli ḥālah

されど獲物悪党ならば決起して抗うべし 相手如何に巨大なれど

wa-nhaq bi-kulli 'aẓīmatin

人はだれも全能に非ず そのことに何の疑いの余地あろうぞ¹⁹⁾

fa-l-mar'u ya'jizu lā maḥālah

(詩型 カーミル kāmīl 調 lāmiyya 1脚韻子音詩)

第12話 バグダードのマカーマ 完

第12話 訳者解説

筋の展開からだけみると一篇の物語としては、短すぎるにせよ趣向を生かして一話完結している。モチーフ的には第9話と対をなすと見て良いだろう。副題に示した通り「奢りに奢ってドロンを決める」話として面白く読める。当時の風俗や食習慣、更には食堂や食事メニューなどが記されており、貴重な民俗資料となろう。「田舎者」の単純素朴というレッテルの貼りは我が国と共通している。

しかしマカーマ文学としてどうかとなると、定型とはことなり、語り手と主人公の役割が想定されていない。アル・ハマザーニーのマカーマ一篇一篇は長短および出来・不出来が激しく、また短編は読み聞きやすいものの、簡略すぎて文意も図りかねたまま終結してしまうものが多く、訳者が状況説明を補筆せねばならない破目に陥る場合も多々ある。さらに内容・形式とも不十分な、あるいは未完と思わせるものが多くある。直訳では文意が繋がらず、よっぽど読み込みの時間をとらな

16) ここまでのサジュウの語は下線順に(注15参照)：

qa'ada ↓ wa-jarrada ↓
wa-qa'dtu ↑ wa-jarradtu ↑ sārrata, ḥārrata / saqqā'i, mā'i.

17) 小猿 qurayd; qird (猿) の taṣghīr (指小辞)。指小辞は単にその類・種の小さいものを指示するだけでなく、文意によって可愛らしさの、憎らしさの、軽蔑のコンテキストを表わす。ここでは後者の意味合い。

18) ここまでのサジュウの語は下線順に：ḥimāri-hi, izāri-hi / lakmatan, laṭmatan / quraydi, 'ubaydin, zaydin (不一致あり)。

19) 「人はだれも全能に非ず そのことに何の疑いの余地あろうぞ」 al-mar'u ya'jizu lā maḥālah; 全能なる者はアッラーのみ。被造物たる人間はどんなに完全であろうとしても、神の目から見れば欠点だらけである。但し数を絞って努力すれば目標を達成も出来よう、とのアラブの諺。アスカリー『俚諺集』II 275、ムスタクサー『俚諺集』I 139、マイダーニー『俚諺集』II 176 他。結語 maḥālah には、定冠詞 l- maḥālah とする資料もある。

いと先に行けない面を持ち合わせている。訳出においては二倍・三倍の補いが必要とされる。また訳者の推定が間違っている場合も多々ありそうなほどに、良く言えば簡略が過ぎて、悪く言えば粗雑さが目立つ、そんな状況説明も読み取れない短文続きの連続の場合もある。

しかしマカーマ文学が読み聞かすものである前提に立ったならば、別の読み解く鍵、発想が必要とすることになる。ゆっくり読み聞かせること、ポーズを長く置く。その休止空間で、余韻の残るサジュウの押韻単語を吟味して、なおかつ簡略な内容を追って文脈を糺してゆく。語り手の方は、語気を強めたり、あるいは感情の起伏を強調したりして、聴衆の賛同を誘う。これを耳で聞いている場合のポーズ間の視聴者の想像空間は、どうであろうか。こうした筋を追うのにポーズに入った場合、前の文言の意味と筋を追い、次の出だしの文言はどうなるのか。読みの休止や息継ぎのポーズ、これをワクフ(waqf)と言うのだが、ワクフの間に行う言辞とストーリーの確認、及び来るべきリスタートの方向性、順接で行くのか逆接になるのかの緊張感が視聴者のワクフ空間で展開されている。ここでは訳者も含めて、異文化環境の中での文字空間なので、より分かりやすい方向性と状況説明を示さざるをえない。忘れてならないのは聴覚空間ではタルジュー(反復・反唱)があることで、これは書かれた視覚空間には見い出されないことだ

本篇の気になる点から言うと、「人違い詐術」に関してであるが、最後の段で焼肉屋に代金を要求されて答える描写、[アブー・ザイドが答えるに、「おら、お客として奢って貰っただけで」]の部分。厳密には、打手繰りに会ったこの人物はアブー・ウバイドであり、語り手はその名で記すか、「サワード出の男」または「彼」(訳者は文脈に応じて「田舎者」と訳出した)とした方が物語の客観性を引き出したことであろう。しかし「アブー・ザイド」と勘違いさせているのは、語り手の(本来ならば主人公の)この人物との対応・仕掛けの際の呼び掛けの場合のみの詐術と受け取れよう。

次に本マカーマにおいては、主人公は全く登場しない。それどころか語り手が主人公の役を演じてしまっている。つまりマカーマ文学の役割設定が、本話に関しては構築されていない。本来ならば語り手が語る中に主人公が本舞台で騙りの役を演ずる。この役柄を明別しないために、ストーリーを展開させる過程で、本話の例もそうであるが、いくつかの不備を露呈してしまっている。主人公を登場させて本話を成立させるのに、我々が考えてもそんなに難しいことではないはずだ。例えば導入部で、語り手と主人公が何らかの出会いの場面を設定し、それから主人公に上の騙しの手口を披露させ、語り手はどこぞに潜んでいて、第三者的に語りを入れる……。

かの有名なバグダードが舞台なのに表題の地名は名ばかり。相変わらず、その地に関連付けられる名所や風俗習慣他の事項はカルフ地区があるだけで、他は何も取り入れられていない。この不満は我々異国に住む者だけでなく、中世の広域アラブの現地人だとして物足りなさを感じていたのではないか。バグダード人、現地体験者やこれから訪れようとする者、地誌研究者など。しかしながらこの地名表題と内容との無関係性はここに始まった訳ではない。他のマカーマ作品群においても殆んど相関は無い。無作為に選ばれているに過ぎないと思われても仕方ない。上の無関係性・無作為性は作者のアル・ハマザーニーに限ったことではなく、大成者アル・ハリリーの『マカーマート』においても同じである。だとしたら、何故地名を表題に掲げるのか?地名以外にも普通名詞や人名、特徴的な出来事などが表題になっているマカーマが両者の作品群の中にも見られるのであるから。これには作者の旅行好きも大いに影響し、それがマカーマの標題として継承されていった要因が考えられる。

内容的にも、先ず語り手が外出したのはアザーズ棗椰子を食べたいがためであった。しかしその

後の展開においては一言もない。アザーズ棗椰子についても、その食べたいという欲求が行動を起こすモチーフとした限りにおいては、実際の食事・デザートの記事の当たりで何らかの棗椰子との関連性が付けられて良かったはずである。第2話はアザーズ棗椰子も表題になっているくらいであるから、筆者のそれへの関心と食味も含めた蘊蓄の披露もあって良かったのではないか。

マカーマの舞台は明別されており、本舞台の食堂で「奢^{あこ}りに奢ってドロンを決める」が展開される。そして裏舞台が、本舞台の食堂の外部であって、中の様子が見守れるもの陰である。即ち、いわば花道ないし本舞台の脇に設定されているところは新鮮である。本舞台の盛り上げ部、裏舞台の帰結部に施されるべき詩の挿入、それへの配慮。盛り上げ部には無く、帰結部に辛うじて二詩行があり、これも創始者のマカーマ観の一端と受けとっておこう。アル・ハリリーの方は、それなりの、つまり鑑賞に堪えるだけの詩行を盛り上げ部においても、帰結部においても備えているのに比べると、隔たりを感じざるを得ない。

主題である奢られた積^{たまり}りの者が騙されて奢ったことになり、肉の馳走と聞いて我を忘れ飛びついて、果ては自分の分は勿論相手の分まで支払わせられる。奢られたつもりが奢ったことになるこの食に関する騙^{かた}りによる主客転倒話は、既に正統カリフ時代末期からウマイヤ朝期 (661 ~ 750) に既に存在している。タトフィール *taṭfīl* 文学と言って、招かれざる客、あるいは招かれなくても、人違い詐術や成り済まし詐術をも心得て、職業的な臭覚で食事の場や宴会場に姿を見せ、得意な語りで座を興^{しょうばん}じさせ、相伴^{あず}に与かる一連の才能の持ち主達トファイル (*tufayl* 食客) のエピソード群の中にである。本話では、騙した者の方はいわば遣らずぶったくりの、非情さを示すことになっている。しかし著者はさすがにそれで終わりで済ましているわけではない。ここでも手心が加えられている。「そこに見たのはサワード出の田舎者であった! 彼はロバを一生懸命導いていた。彼の腰帯には巾着と思しきものを覗^{のぞ}かせていた」とあるように、獲物とするのはある程度の金持ち、騙し取ってもある程度は困らないだろう、と言う最低限の徳義は備えた意図を見せる。だからこそ貧困層には味方し、巨悪に対しては立ち向かおうとする気概はあったし、それを大団円の詩で叙している。たった二詩行であるが、その意味でも再度吟味されたい。

写本の異同であるが、本話は前話同様 Aya Sofya 写本、Paris 写本には欠如している。Fātiḥ 写本では前話に続く第24話に配している

第13話 バスラのマカーマ 公園の閑談の場に窮状を訴えられて

(原文 M. ‘Abduh 編 pp. 63–67 より)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて次のように話した：私はバスラ¹⁾に滞留^{とど}まったことがあった、その頃の私は若^{わか}さにおいてはその絶頂期にあった。身を飾る衣類^{とぎ}といえば、贅^{ぜい}沢^{たく}なヒバラ外套²⁾とウィシャーウ衣³⁾であったし、財産といえば、数ある牛とシャーウ⁴⁾（羊・山羊の混合群）を所有していたほどだ。そしてある日仲間と連れ合^{とも}って郊外のミルバド⁴⁾に出かけたことがあった、仲間はみな人目を惹きつけるほど（の男振り）であった。やがてそれ程歩く要も無く、向かう方角に格好な遊歩地⁵⁾が見つかった。そこで我々はそこを占拠^{ひとりじめ}して、居座^ゐることにしたのである。娯^{ぜい}楽^{ちく}の簾^せ竹^{ちく}に頼^{たの}っては（＝当^{あた}った者はそれなりの話芸や技芸をして）、それを振り回^{ひりまわ}して（楽しんで）いた。お互いに恥^はの衣^えは脱^はぎ捨^すてて、我々の中には我々以外のものは存在しないか（＝一心^{いっしん}同^{どう}体^{たい}か）のようであった⁵⁾。

しかし瞬^{まじ}きを繰り返^をす間もあらばこそ、我々の前に黒い人影が現れたのである。深い黒穴がそこだけ掘られたような、その周りだけ地面が盛り上げられたような。その人物は我々の方に向かっていることは分かっていた。我々の方もこの人物が大いに気に掛かり、彼の歩みが我々の所で終りになるまで見守った。（我々に近づくと）彼はイスラームの挨拶（アッサラーム・アライクム＝あなたがたに平安あれ）を送ってきた。そこで我々も（挨拶されたらそれ以上の長さの挨拶で答えるように、と言う）ムスリムの義務であるサラームの挨拶を返した⁶⁾。

この人物は我々を一渡り見渡すと、声を掛けてきた、「皆さん、あなたがたの中にはわしを横目^{よこめ}で眺め、警戒心を抱く方々以外には誰も居られないようじゃな。わしのことについてあなたがたに話すとして、わし以上に確かなことを話せる者もおるまい。さてこのわしはウマイヤ朝の最前線であるアレクサンドリア⁷⁾の住民であった。他より秀でたることを我が趣旨として実践し、満ち足りた生活に常に迎え入れられ、由緒ある家柄に育てられて来ました。しかしながら時運が（味方せず）その恩恵を少なくにせよ多くにせよわしに与えなくなってしまったのです。尾羽打ち枯らす状況はわしのみか、我が子達にも及ぶ始末になってしまいました：⁸⁾

1) バスラ Basra: 現イラク南部の最大都市。二大河川ティグリス・ユーフラテスが合流し、ペルシャ湾に望み、交易地として陸海の結節点に機能を果たし繁栄した。この辺りのナツメヤシも品種が多く、名高い。著者より一世紀後の『マカーマート』の大成者アル・ハリリーはこのバスラ人であり、最終の第50話では「おらがバスラ」を忌憚無く詠い上げている。

2) ヒバラ外套 hibar: 単数形はhibara。ブルダ（外套）の一種で、交互に縦じまの入る高級イエメン製外套。「ヒバラ外套を着る」動詞はtahabbaraと言うが、同時に「着飾る、見事に装う」の義になる。

3) ウィシャーウ衣 wishā': ウィシャーウは複数形で、単数形はワシュユ washy である。押韻の関係でウィシャーウになってしまったが、表現法としてはワシュユ衣が正しい。ワシュユは「模様・文様で飾られた絹製錦織」、わが国で言えば「紋付」に近いであろう。但し地は黒に限らないし、紋は家紋ではなく、主として金糸の円形刺繍である。ワシュユ衣の織り手はワーシー wāshī と、またワシュユ衣の織り手及び商人はワッシャーウ washshā' と言った。

4) ミルバド Mirbad: バスラより三マイル砂漠に寄った、普段は無人の定期市場であった。ラクダを中心とした家畜市であったが、同時に詩人達も集まり詩才を競い合ってもいた。イスラム期以前はこうした「市と詩」とが競合する活気あるトポスとして、メッカ近郊のウカーズと双壁であった。

5) この冒頭段のサジュウ（文末・句末押韻技法）は、連語サジュウも見られる。その場合縦に分かりやすく示した。②、③がそれである。

② hibarin ↓ ③ baqarin ↓
① fatā'in, ② wishā'in ↑, ③ shā'in ↑ / muntazahāti, mutawajjahāti / ḥalalnā-hā, ajalnā-hā.

6) ここまでのサジュウの語は下線順に: sawādun, wihādun, nijādun / islāmi, salāmi.

7) ウマイヤ朝の最前線であるアレクサンドリア: このことについては第9話注4で言及している。

8) ここまでのサジュウの語は下線順に: shazran, hazran / 'an-nī, min-nī / iskandariyyati, umawiyati / thammi-hi,

不運の到来 東になり襲い来る 彼ら荒野にたむろする蛇どもか

ka-anna-hum ḥayyātū arḍin maḥlatin

鎌首^{ひとたび}もたげ一度噛み付けば その猛毒たるや相手には致命的

fa-law ya'aḍḍūna la-dhakkā sammu-hum

我ら^{ひとところ}一所に滞在^{とど}まらんとせば 糧得るに外出して稼げと追い出し

idhā nazalnā arsalū-nī kāsiban

また我ら旅のラクダの背上にあれば 彼ら皆我らが背上に覆
い被^{かぶ}さって意のまま

wa-in raḥalnā rakibū-nī kullu-hum

(詩型 ラジャズ rajaz 調 mīmiyya m 脚韻子音詩)

白色 (= 銀・デイルハム銀貨) には持ち上げられては投げ落とされ、黄色 (= 金・ディーナル金貨) には肩透かしを喰らわせられ、黒色 (= 闇・夜) には生活上切り詰められ、赤色 (= 飢饉・旱魃) には押し潰されてきました。アブー・マーリク⁹⁾ (所有者の父 = 飢え) の来訪は初中終のこと、アブー・ジャービル (蘇生の父 = パン) にありつけるのも余力が最早残らぬ折にのみ。さてここバスラでは、その水は消化し易いのに、貧しい人々は消化するのに苦しんでおられます。人は己の臼歯で (生きる糧の食物を噛まんがために) 日々の仕事に汲々としておられます。何事にも明日の我が身はどうなるのか気を揉んでおられます。これから叙すような人は一体どうしたら宜しいのでしょうか：¹⁰⁾

あくせくと駆けずっては、また駆けずり回る 足を棒にした挙句に戻り行く先は

yuṭawwifu mā yuṭawwifu thumma ya'wī

目を鋭く皿のようにして待ち望む 腹空^すかしてひたすら待つ
子等^{ひよこ}のもと

ilā zughbin muḥaddadati l-'uyūni

子等着るものと言えは有り合わせの檻^{ぼろき}棲着 髪^すはといえは梳かれもせず纏れ

kasā-hunna l-bilā shu'than fa-tumsī

飢えに苛^{さいな}まれては犬歯まで見せ 空^すかせて凹^{へこ}む腹は裏の背に
付着^{へばりつ}く程ぞ

jiyā'a n-nābi dāmīrata l-buṭūni

(詩型 ワーフィル wāfir 調 nūniyya n 脚韻子音詩)

今日の日に至れば、^{おきなこら}幼児等朝起きて父親を探すも、^{ごま}死んだも同然の生き様の父を見、家を見回すも (無一物の閑散とした様は) これは家ではないのでは、と思わせるほど。子供らは (何とかして欲しいとの) 願いから両手の掌を堅く握つ (て祈つ) て、肋骨の結節点を壊し (= 吃逆泣^{しゃっくり}きをし) ているのです。涙を洪水のように溢れさせながらお互いにお腹が空いたよう、と訴え合っているのです¹¹⁾。

厳しく卑しいご時世なれば 困^{きわま}り貧窮るは当たり前のこと

wa-l-faqr fī zamāni l-li'āmi

rammi-hi。

9) アブー・マーリク abū mālik; 所有者の父。「飢え」を擬人法を用いて換言。「飢え」は誰しもを所有し、いつでも訪れるもの。そのたび重なる訪れは骨を弱め、それが元で老齢が早く、死も早くなる。アブー・ジャービル abū jābir 「蘇生、復活者の父」。同じく「パン」の換言のひとつ。パンは飢えから回復・開放するもので、骨を蘇生、復活させるから。ジャービルには「骨接ぎ、接骨医」の意もある。アブー・〜を用いたクンヤの換言法はさまざまに発達し、食慣習にも取り入れられ、客を相手のホスト側の符牒にも用いられた。本話の訳者解説参照。

10) ここまでのサジュウの語は下線順に: jābirin, 'uqrin / haḍūmun, maḥḍūmun / shughlin, kullin。

11) ここまでのサジュウの語は下線順に: maytin, baytin / dūlū'i, dumū'i, jū'i。

いかに寛大で名の通る御仁といえども 今では「^{よわった}困窮」が口癖となりぬ

li-kulli dhī karamin ‘alāmah

心^{ふげんしゃ}広き分限者なるも心^{こつじき}貧しき 困窮者に成り済まそうとする

raghiba l-kirāmu ila l-li‘āmi

これぞ一つの^{しるし}兆候なるは明らか 乱れし世の果て来るべき終末の

wa-tilka ash-rāṭu l-qiyāmah

(詩型 カーミル kāmīl 調 mīmiyya m 脚韻子音詩)

ああ地位ある皆さん、あなたがたはわしを選んでくれなすった！成功せる皆さん、あなたがたはわしに思い入れをしてくれなすった！後生だから、わしに言わせてください、あなたがたは脂肪分(= 余裕、与えるべき金品)をお持ちだと。奇特な方はどなたです、我が子達に夕食を恵んでくださり、着るものを恵みくださるのは？我が子達に朝食を分け与えてくださり、着るものを整えてくださるのは？」¹²⁾。

イーサー・イブン・ヒシャームは語りを続けた：この人物の語り(の流暢さ)で私が耳を妨げられるようなことは一度として無かった。私が耳にした彼の言葉ほど、美しさといい、優雅さといい、気高さといい、独創性といい、これ以上のものは無かった。どうしてこのままでいられよう、我々は腰帯に手を向けた¹³⁾のである。袖(のなか)では飽き足らず、ポケット(の中)では物足らずに。私は(それだけでなく、着用の)ムトゥラフ外套¹⁴⁾をも与えた。我が仲間も私に倣った。そして手渡す時には言葉を掛けたものである、「(さあ、これを持って)お子さん達の所へ戻って行ってあげて下さい！」。この人物は感謝の言葉を丁重に返してきて、口を一杯にするほどの多謝の辞を述べてから、我々の許から去って行った¹⁵⁾。

第13話 バスラのマカーマ 完

第13話の訳者解説

この主人公は語り手イーサー・イブン・ヒシャームが仲間と興じていた座に割って入ってきた。そして気品を湛えながら我が身の窮状を訴え、見事一座の人々の同情を引き、小銭ではなく大金と外套を仕留めたことになる。同情を引き、懷^{ゆる}を緩めさせたのには、作者から三つの仕掛けがあったと見て取れる。一つはサジュウ技法を十分多用し生かしており、二つ目はこの作品には珍しく三つもの詩篇の挿入が工夫されて、この両方で訴えに騙りの妙味を加えたこと。三つは子供達を引き合いに出したこと。我が子等を「ヒヨコ達」zaghlāl(単数 zughlūl)と表現して、同情を引きつけ、詩中の中にも詠い込める：「目を鋭く皿のようにして待ち望む」とは、飢えのため痩せ、食べ物を探め、目つきが変わり、眼光鋭くなることのアラブ的表現。「飢えに苛^{さいな}まれては犬糞まで見せ」とは、何も食べてい

12) ここまでのサジュウの語は下線順に：sādātu, sa‘ādātu / qasaman, dasaman / yu‘ashshī-hinna, yughashshī-hinna / yughaddī-hinna, yuraddī-hinna。

13) 腰帯に手を向けた istamahṇā al-awsāt：遠出する者、旅行者は貴重品や金貨などは腰帯に巻いて容易にはそれには手を付けなかった、小銭や銀貨などは袖(kumm 複数 akmām)やポケット(jayb 複数 juyūb)に入れて用を足した。ここでは小銭では済まされないほどの感動と同情を引き起こしたのである。

14) ムトゥラフ外套 muṭṭraf：羊毛、上物は絹製で四角形に大きく作られているハズ khazz と呼ばれる外套の一種、タラフ taraf(両端)の裾端が刺繍されて目立つ所から、「タラフ化された物」の意味でムトゥラフ muṭṭraf と呼ばれた。

15) ここまでのサジュウの語は下線順に：rā‘i‘u(n), abra‘u, arfa‘u, abda‘u / shukrin, nashrin / waffā-hu, fā-hu。

ないと痩せて、頬や口の辺りの筋肉が無くなり、口を開くと、その都度次第に奥歯まで露出してくる。こうなってくると奥歯の始めに在る犬歯が他人から見えるようになることを言ったもの。

この作品の中には二詩行ずつながら、三つの詩作品が挿入されている。詩作の挿入が少ないように見受けられる作者アル・ハマザーニーのマカーマ文体においては珍しく配慮した感がある。上の引用箇所もそうであるが、話の、筋の盛り上げの部分の挿入であるので、それなりに成功していよう。盛り上がり部、訴えの部分で三か所の詩の導入を果たしているが、この三箇所の詩作、フィナーレの詩の欠如した配置は、そのアンバランス性という意味では今までのマカーマ作品の中では初めてのものと称しえよう。

語り手イーサー・イブン・ヒシャームは二度、定型に近い形に配置されて口上を述べている。ただし後舞台は主人公の正体暴露とフィナーレの場面なのであるが、そうっていない。一・二行加えれば体裁は整うことになるのであるが。

主人公に関しても、これが騙りであったのか、正真の困窮者であったのか定かにしていないことになる。訴えた「この人物」が主人公「アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師」だとすれば、「語りが騙り」になり落ちてくもの。そしてこちらも一・二行の工夫をすれば、主人公像の体裁も整い筋の奥行きも出よう。さらに主人公について細かく言うと、訳出においてはわざわざ「この人物」としたが、原文はすべて「彼」だけで通している。主人公名をどこぞに文中出すことは著者にとっては容易なことだ。このスタイルも創始者は「マカーマ文学」の範疇内と看做していたのか。本舞台で終わって、後舞台の設定をしなかったための結果とみるべきか。

本話では色彩を象徴的に比喩的に用いるモチーフが生かされている。「白色」＝「銀・ディルハム銀貨」、この色には持ち上げられては投げ落とされ、「黄色」＝「金・ディーナール金貨」、この色には肩透かしを喰らわせられ、「黒色」＝「闇・夜」、この色には生活上切り詰められ、「赤色」＝「飢饉・旱魃」には押し潰された、とある。この色のモチーフは、後輩のアル・ハリリー作の『マカーマート』第13話ではもっと深化する。「このようでしたから私達の緑色の(＝満ち足りた)生活は灰色(不毛、枯れ果てる)に変わり、黄色(金貨・金銭)の愛すべきものは濁り色(不純・零落)になってしまい、私の白い(明るい・華やかな)日々は黒色に変わり、黒い頭髮は白髪に変わり果ててしまいました。そして遂には青色の目をした敵(北方出の異邦人)の者でも私を哀れむ始末。ですからもう赤色の死(自然死では無い流血死)を待ち望むだけでございます。私の子供達も、これこの通り私に従っておりますが、肌色は見ただければ分かるうもの。その黄色い肌が健康状態の何よりも明らかな代弁者となっております」。(拙訳 東洋文庫版 I 384-85, 399-400)

また本話では食に関する隠語や縁語、符牒を思わせるモチーフも登場する。その中の一つが、アブー・～(～の父)を用いたクンヤ(尊称)の換言法である。上にすぐ続けて、「アブー・マーリクしよつちゅうの来訪は初中終のこと、アブー・ジャービルにありつけるのも余力が最早残らぬ折にのみ」とある。アブー・マーリク *abū mālik* とは直儀「所有者の父」。「飢え」を擬人法を用いて換言。「飢え」は人間誰しも空腹が重なれば「所有するもの」がより明確になる。またアブー・ジャービル *abū jābir* 「蘇生、復活者の父」。同じく「パン」の換言のひとつ。パンは飢えから回復・開放するもので、骨を蘇生、復活させるから。ジャービルには「骨接ぎ、接骨医」の意もある。アブー・～を用いたクンヤの換言法はさまざまに発達し、食慣習にも取り入れられ、客を相手のホスト側の符牒にも用いられた。アル・ハリリー作の『マカーマート』第19話にその好例が見られる。そこでは「飢え」も「パン」も別なクンヤが用いられている。(拙稿「アラブの食言葉」、『VESTA』第16号(93年7月)43-48)

写本の異同であるが、本話は *Fatīḥ* 写本は、これを巻頭の第1話においている。*Aya Sofya* 写本では第23番目に配している。一方 *Paris* 写本では本マカーマは欠如している。

第14話 ファザーラ族¹⁾のマカーマ 砂漠で武人と対峙 されど

(原文 M. ‘Abduh 編 pp.68–72 より)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて以下のように話した：私は（砂漠の旅にあって）ファザーラ族の領地を通過中のことであった、騎乗するはナジーバ（血統高い雌の乗用駱駝）、引き連れしはジャーニバ（雌の代替駱駝、替え馬に当る）、共に歩み良く行程をこなしてくれていた。（思い描いていた）故郷への帰途にあったので、夜がその闇の恐怖で迫っても遣り過ごせし、（故郷まで）いくら遠くて、バイダーウ（砂漠）越えを幾つか克服せば済むものと、それで断念はしなかった。昼日中（＝旅程・行程）の木の葉（＝刻々、時）を旅の杖で払い落としては、また夜の闇底を馬²⁾の蹄で切り裂いては、砂漠行を断行し続けた³⁾。

さてそうした夜旅を続けていた折、（余りに深い闇のため）、この中ではカター鳥⁴⁾ですら迷ってしまうことだろうし、蝙蝠⁵⁾ですら視力が利かなくなるほどであった。それでも私はすいすいと泳ぐように進んだ。右から過ぎるもの⁶⁾があるとすれば、ライオンだけであろうし、左から過ぎるものがあるとすれば、ハイエナだけであろう。ところが、突然のこと私の前に騎馬武者が現れたのである。彼は完全武装の出で立ちであって、タマリスク（御柳）の方に向かっていった。ファラー⁷⁾（砂漠）を過ぎって私の方に近付いて来たのである。私は嫌と言うほど思い知らされた、素手の者が重武装の者に対峙せねばならない事態のことを！⁸⁾

けれども私は自ら勇気を奮い立たせた、そして彼に声を掛けた、「立ち止まりなされ、あんたの母親などくたばってしまえ⁹⁾！望むものを手に入れる前に、こちらから鉄（槍）の一掻きを、カタード¹⁰⁾の一削りを見舞おうぞ。我は手ごわい敵対者ぞ、アズド族¹¹⁾の保護受けし者ぞ。そなたが望

- 1) ファザーラ族 al-Fazāra；アラブ諸部族を二分する北族アドナーン系（アブラハム・イシュマエル系）ムダル族に属し、さらにその別れガタファーン系のズブヤーン族の有力支族である。アラビア半島中央部ナジュド高原北西部を領土とする。競馬の決着をめぐっての名高い戦い「ダーヒスとガブラウ（いずれも名馬の名）の戦い」は兄弟部族ズブヤーンとアブスで長期に争われたがズブヤーンの主力はファザーラ族であった。またヤスリブ（後のメディナ）と近く、町との関係も深かったため、当初はイスラムに敵対し、ハンダクの戦い（西暦 627 年）ではメッカのクライシュ族と組んでメディナのイスラム軍を攻めた。
- 2) 馬 khayli；何日も続く砂漠行を馬で行くのは不可能である。ここでは前句の脚韻語 layli に合わせるために khayli（馬の）としたのであろう。既述のようにナジーバ、ジャーニバは＜駱駝＞である。
- 3) 冒頭節のサジュウ（文末・句末押韻技法）の語は下線順に：najībatan, janībatan / wa‘īdi-hi, bīdi-hi (bīd < baydā’ 単数形) / nahāri, taysāri / layli, khayri。
- 4) カター鳥 ghatāt；カター qatā として知られる砂漠に住む砂鷄の一種。小型の鳩の形状。朝夕の二度巣から飛び立ち水場に向かう。水場と巣との一直線の飛行は砂漠行の人に水場の在りかを教える貴重な鳥とされる。水場からの戻りは、胸から腹にかけて羽毛に水を溜めているために濡れており、それを目安とする。「カター鳥ほどに道案内上手な」(ahdā mina l-qatā) の諺を生んでいる。
- 5) 蝙蝠 waṭwāt；蝙蝠が超音波で活動しているという事実は最近の話で、それ以前は、アラブ世界はフクロウと並んで蝙蝠は昼間は明き盲で、夜目が利く代表的動物とされていた。
- 6) 右から過ぎるもの sāniḥ；アラブはイスラム教徒であっても、生活レヴェルになると、意外と迷信好きである。以前にも述べたが、一日の運はその日の初め行き逢う動物や鳥が sāniḥ（右から過ぎるもの）か、bāriḥ（左から過ぎるもの）か、で占っている。鳥占である。右偏重のアラブは勿論「右から過ぎるもの」を善兆と看做している。
- 7) 砂漠 falawāt；< falāt（単数形）。砂漠の環境が多様なアラブは、＜砂漠＞をパラダイム化し、語彙を形成している。ファラーは＜広大さ＞と＜砂漠の深さ＞の両方が大きいことを示す「砂漠」である。詳しくは拙著『砂漠の文化』「アラブの砂漠観」を参照されたい。ファラーは 23 番目の語として記述されている。
- 8) この段のサジュウの語は下線順に：ghatātu, waṭwātu / wa-lā sāniḥa illa s-sabu‘u, wa-lā bāriḥa illa d-dabu‘u / ālāti, athalāti, falawāti。
- 9) あんたの母親などくたばってしまえ lā umma la-ka；最も多用する罵言の一つ。相手の母親を悪く言って罵ることにより、相手を蔑み、自分の立場を有利にしようとする。第 6 話注 16 も参照。
- 10) カタード qatād；ここでは「棍棒」の一種とされる。カタードは、その樹液からアラビアゴムや薬用となる原料が採取される。しかし樹全体が針のような棘だらけで、樹肌を一削りして樹液を得るまでに、体のどこか傷を受けることになる。
- 11) アズド族 Azd；注 1 のファザーラ族と好対照な、イエメン系カフターン（アラブ南族）の最大部族。三世紀マ

むならば、平穩に済まそう。だがお望みならば私も戦おう！誰なのか名を名乗れ！」。この人物が答えるには、「穩やかに済ませましょう、そうお望みのようだから」。私は「それは良いこと、立派な返事。ところであなたはどなたです？」。「言うならば助言者、もし助言を求められるならば。相談相手、もし隣り合わせて住まわば。私の名は当面はリサーム（覆面）男としておきます、差支えが無くなるまでは！」。私、「ではどんな職業です？」。彼、「諸国を遍歴して回っております。寛大なお方の恵み皿に行き逢えばその上に留まります。私には舌が思いのままの能弁の才と、指が記録してゆく修辭の心得があります。私の願いはといえば、私に身を低くして振り分け荷の一つを任せてくれる人物、彼の財布を私に自由に使わせてくれる人に行き逢うことです。丁度昨日のこと太陽が昇るごとく突如現れ、太陽が沈むごとく突如として姿を隠したあの高貴な方のような……。彼は姿を隠したとはいえ、私の記憶の中では消えることは無いでしょう。私の許を去ったとはいえ、その印象は鮮明に残ることでしょう。その一端について、これほど明らかに示すものはありませんから」。こう言って彼は着ているものを指し示したのである¹²⁾。

私は心中に囁いた、「カアバの主（＝アッラー）に誓って、この男は強請り屋なんだ、打っ手練り屋なんだ。この道にかけては相当の手練れのようだ、いやこの道の達人かも知れないなあ。どうも幾らかは出費を覚悟して、彼にそれを注ぎ込まねばならないだろうな」。（こう結論づけて）彼に声を掛けた、「お若いの、表現力が得意だと伺ったが、（聞いて確かに）散文の妙は大したもの。では詩の方のお手並みを拝聴したいものですが？」。この男が答えるには、「私にとっては散文も詩も作るのに何の造作もいりません」。そしてやおら天賦の詩才を引き伸ばしたのだ、声大にして、ワジ（枯れ川）に満ちるほどの音声で、朗々と詠じ始めたのである¹³⁾。

夜にもまた砂漠の中にも関わらず 彼我がために贈り物山とせり

wa-arwa'a ahdā-hu li-ya l-laylu wa-l-falā

足指五つ地面に着かぬ僅かの間に 相手が否々と拒みてあり
とても

wa-khamsun tamassu l-arḡa lākin kalā wa-lā

されば持て成しの火¹⁴⁾の中に 彼の薪¹⁵⁾ 焼べて試たり

'araḡtu 'alā nāri l-makārimi 'ūda-hu

判明せるは素性からして高貴な者 ターバン巻き¹⁶⁾ 血統高き親族ばかりの

fā-kāna mu'amman fī s-siyādati mukhwalā

彼の所持品狙いて騙し合いすれど 最後に勝利するぞ我なる

wa-khāda'tu-hu 'an māli-hi fā-khāda'tu-hu

アリブのダムが決壊後、離散して、半島全域に移動。オマーン、ヒジャーズ、シリアの拠点を確保し、六～七世紀にはシリアにガッサーン王国を築き、現オマーンの伝統はイエメン古来のアズド族の伝統を引き継いでいる。

12) ここまでのサジュウの語は下線順に；ḥidādi, qatādi / khaṣmun, ḡakhmun / ḥamiyyatun, azdiyyatun / shi'ta, aradta / aṣabta, ajabta / shāwarta, jāwarta / lithāmun, a'lāmu (不完全) / bilādi, jawādin (不完全) / lisānun, banānun / janābata-hu, ḥaḡibata-hu / amsi, shamsi / tadhkāru-hu, āthāru-hu / 'an-hā, min-hā。

13) ここまでのサジュウの語は下線順に；shahḥādhun, akhkhādhun, nafādhun, ustādhun / gharizata-hu, 'aḡirata-hu。

14) 持て成しの火 nār l-mukārim：「寛大な者達の火」が直訳。これは普通「持て成しの火」nār l-qirāと言われ、アラブ遊牧民の美風とされ、日が暮れると余裕のあるベドウインはテント前で薪を炊き、見ず知らずの旅人を迎え入れて持て成す。第5話訳者解説参照。

15) 彼の薪 'ūda-hu；'ūdは「樹木・材木」の他に「香木・沈香」の義がある。火に薪を焼べると中の隠れていた香が漂い出す。「彼の薪を焼べる」とは、彼に隠れた資質・性質を調べることを言う。

16) ターバン巻き mu'amman；直義は「ターバンを巻かれた（者）」。

ターバン'imāmaを巻くことは、当時としてはアラブだけに許されていたものであった。

彼の性質善にして誠実なれば 誑し込めるはいとも易し

wa-sāhaltu-hu min birri-hi fa-tasahhalā

お互い素性明かししとき 彼我が語りを良しと認め

wa-lammā tajālaynā wa-aḥmada manṭiqī

ならばと彼が別に試すは 我が編む力織り成す詩行

balā-niya min naẓmi l-qarīḍi bi-mā balā

我に詩作の抜刀して来たり その剣たるや切れ味鋭きもの

fa-mā hazza illā ṣāriman ḥīna hazza-nī

されど立ち会う相手悪し なべての競技常勝の者ぞ

wa-lam yalqa-nī illā ila s-sabaqī awwalā

我も認めん彼の腕を 額の星と脚の白兆¹⁷⁾ とを

wa-lam ara-hu illā agharra muḥajjalan

されど知るべし相手にはその下に さらに大きな額の星と脚
の白兆とがあるを

wa-mā tahta-hu illā agharra muḥajjalā

(詩型 タウィール ṭawīl 調 lāmiyya l 脚韻子音詩)

(この詩は自分のことを叙しているなど読み取った) 私は彼に声を掛けた、「まあ、そう性急になさいますな、お若いの！ あんたの裁量次第で私の所持する物はあなたの物になりますよ」。すると彼は、「中に荷の入った箱ごと頂きたい」と言って来た。私のほうは、「いいとも、さらにそのハーミラ(運搬用駱駝)もどうぞ！」と応じた。それから5本の指に力を入れて、彼を掴んで宣言した、「握った拳に息を吹きかけ、(拳)一つから(掌の指)五つに開き給うお方(=アッラー)に誓って¹⁸⁾、あんたは私から離れてはならない、あんた自らの素性を明らかにするまでは！」。彼は仕方なく顔からリサーム(覆面)を外した。と、如何だろう、この人物は何とアレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師ではないか！(驚いた私は)時をおかず詠じていた；¹⁹⁾

おおアブ・ル・ファトフよ、何とてまた その身を飾り立てている²⁰⁾ のか

tawashshaḥta aba l-faṭḥi

そのような立派な剣でもて 自尊心を誇りたいが故なるか

bi-ḥādha s-sayfī mukhtālā

何を仕出かそうとしているおるや 携えしその剣用いて

fa-mā taṣna‘u bi-s-sayfī

人と血を争う戦士なりと などて御身言うべきや

idhā lam taku qattālā

17) 額の星と脚の白兆 agharra muḥajjalan: アラブ馬に出る部分的白毛のことを言っており、額に出る星とか作、流星はグッラ ghurra、蹄上に出る浅い・深いものをタフジール tahjīl という。善悪の民族概念があるが、ここでは「優れもの、優駿」と解釈される。

18) 握った拳に息を吹きかけ、(拳)一つから(掌の指)五つに開き給うお方(=アッラー)に誓って wa-lladhī alhama-hā lamsan wa-shaqqa-hā min wāhidatin khamsan: 相手に呪文を掛けたのである。アラブ社会では、イスラム化される以前から呪文や誓言で、紐などに結び目を作り、自分の信ずる最も威力ある信仰対象に祈って息を吹きかけたり、唾を吐きつけたりした。イスラム以降になっても、最も威力ある信仰対象が「アッラー」に替わっただけで、本文に見るようにこの風習は続いている。

19) ここまでのサジュウ(押韻単語)は下線の一組のみ: lamsan, khamsan。

20) 身を飾り立てている tawashshaḥtu: 校訂者 Muḥammad ‘Abduh は「身を飾り立てている」のは一人称にして、「私が身を飾り立てている」としている。これは誤りで、文意からして明らかに行爲者は二人称であるから、tawashshaḥta でなければならない。この場合「言葉で生きるものが何でその身を武装しているのか」。

されば他に用立てるべし 汝が身を飾り立てている物

fa-sugh mā anta ḥallayta

および汝が帯びしその剣 女性の喜ぶ足の踝飾り^{くるふし} 21) に如何か

bi-hi sayfa-ka khalkhālā

(詩型 ハザジュ hazaj 調 lāmiyya 1脚韻子音詩)

第14話 ファザーラ族のマカーマ 完

第14話 訳者解説

まず作者は状況を把握して物語を展開させているのか気がかりであった。余りに深い闇であって、「カター鳥ですら迷ってしまうことだろうし、蝙蝠ですら視力が利かなくなるほどであった」とある。にも拘らず、明るく視界が利いているが如く、物々しく武装した人物が出現し、^{すいか}誰何した後の展開は、鼻を掴ままれても分からぬ状況で進展できるものであろうか。月の出か夜明けの想定の一句を挿入すれば、一工夫が足らない^{そし}誇りは免れたことであろう。次に語り手が始めに引き具していたジャンーバ(雌の代替駱駝)が、終りにはハーミラ(運搬用駱駝)に様変わりしていることは興味深い。いくら代替駱駝だとしても全くの手ぶらであるわけが無く、少しは、あるいは負担にならない程度の荷物を背上に載せていたことであろう。負荷が多いか少ないかによってジャンーバにもハーミラにもなりえようが、我が国の「荷駄」はアラブ世界ではラクダが担い、ワスク wasq といった。平均荷重は250kg、これがワスク「ラクダ荷」である。荷重がそれに近ければハーミラになろうし、ずっと軽ければジャンーバにもなろう。しかし前者のほうは韻を合わせるために選ばれた公算が強い。

さてそのハーミラ＝運搬用駱駝一頭とその積荷が今回の主人公の稼ぎとなったわけである。そして稼がれた者が語り手である。つまり今回は全くの砂漠の中が「稼ぎの場」マカーマであり、人物もこの二人以外には全く登場しない。砂漠の中でのマカーマは一世紀後のアル・ハリリー²⁷の作品「迷い駱駝を求めて」にも踏襲され、そこでは迷い駱駝を求める語り手と自分のものだと言い争う拾い手、それに助けに入る主人公の三人のみの設定となっている。本話では語り手は、剣でも筆でも相手に適わないと持ち物を献じたことになる。丸腰の自分に対して、相手は剣を始め、重装備である。また言葉での対応も口頭の会話つまり散文では力負けし、また韻文を試したところ相手が上であること、その力量を認めてしまう。そして相手が覆面をしているし、それなりの雰囲気^{きふき}を漂わせていたのであろう。相手を「fata お若いの」と呼び掛け、その相手の体力にも劣ると思ひ込んでしまっている。それ故にその相手、覆面男がそれを脱いで正体を現し、アレキサンドリア出のアブ・ル・ファトフ師だと知った時の、語り手の意外性、驚嘆及び落胆の落差は確かにあったろう。剣で生きるわけがなく、言葉で稼ぐ主人公に対しての畏敬の念が裏切られた気持ちと揶揄したい憤慨をも、結語となる詩行の中に吐露している。語り手のこの憤慨を、通常では主人公の弁明で綴られるところを、その代わりのフィナーレに持って来た点、定型ではないにせよ、その新工夫は読者にも納得の行くものとなっている。

全般に詩行の挿入部も詩行数が少ないのも、アル・ハマザーニーのマカーマの特徴ではある。本話の詩の導入は、割に長い詩行であって、その韻文挿入配慮をみせており、これもマカーマの一方

21) 踝飾り khalkhāl; 複数形 khalākhāl。うら若き女性が踝の上に着用する輪状飾り。小鈴を多数垂らして、歩くたびにジャラジャラと小さな音を立てる。それが一層魅力を増す。男性からの贈り物としても喜ばれた。

向かと思える出来栄である。一応は盛り上がり部、及び帰結部に、その詩才を見せている。しかも一工夫しているのは、二箇所。詩作の一方は盛り上がりの部分に主人公を、大団円となる部分の詩作者に語り手を配しており、この辺りは巧みといえる。この二箇所の詩作の配置は、その意味では今までのマカーマ作品の中では初めて雛型の定めに沿ったものと称しえよう。中段の盛り上がりの部分では、主人公に今までの最長の六詩行を編ませており、内容も思わせぶりで成功しており、大団円となる部分では語り手に三詩行を謳わせて「身に帯びる剣を潰して鑄直し、女性の喜ぶハルハール（足輪）を作ったら」と揶揄されている。

サジュウの配慮は多少の逸脱はあるものの、段落毎に配慮されている。

写本の異同であるが、Fātiḥ 写本では第2話、Paris 写本では第3話、Aya Sofya 写本では第25話に配している。

第15話 ジャーヒズ¹⁾のマカーマ 作家論を戦って

(原文 M. ‘Abduh 編 pp. 73-77 より)

イーサー・イブン・ヒシャームは我々に語り伝えて以下のように話した：私と一団の仲間達はある婚宴に招かれたことがあるが、その婚宴には随分感銘を受けた。婚宴の招きに応じたのは預言者〔この方に礼拝と平安がありますように！〕から伝わる知られたハディース²⁾ (『預言者言行録』) に従ったからである：クラウ³⁾ (脛の部分の肉料理) の持て成しであってもその申し出を拒まない。ズィラーウ (腕の部分の肉料理) の持て成しならば、(喜んで) その申し出を受けよう、との。我ら一行は共に出かけ、招待者の家に着いた：⁴⁾

取り残された^{やしき}邸か 綺麗さは保たれて

turikat wa-l-husna ta’khudhu-hu

住むに相応しき簡素さ 選り抜きの物の在る

tantaqī min-hu wa-tantakhibu

極上の物そこここに 場を選ばれて配置され

fa-ntaqat min-hu tarā’ifa-hu

この上何か求めんとすれば ただに余計な物の付加となるのみ

wa-stazādāt ba‘ḍa mā tahabu

(詩型 カーミル kāmīl 調 bā’iyya b 脚韻子音詩)

床には絨毯が敷かれ、他の敷物も延ばされており、食卓もまた広く配されていた。既に一団の客達が楽しそうな時を過ごしていた。その場を飾ってアース (ās 銀梅花) が摘み取られ、バラ (ward) が整えられていた。ダン (dann 酒壺) が開封され、ナーイ (nāy 葦笛) とウード (‘ūd リュートや琵琶の元となった楽器) が奏でられていた。我々一行が客人の彼らに近づくと、彼らも我々を迎えに出て来てくれた。我々は一つの食卓を囲んだ、その中には水溜り (煮込み料理) が一杯並べられていた。その円卓には花々が咲き誇り、盛り皿には列を成して料理が並べられ、色とりどりの食べ物は風味をそそった。ただ食卓の反対側に真っ黒の⁵⁾物に向かい合って真っ白の物があり、また真っ赤な物に向かい合って真っ黄な物が盛られていた⁶⁾。

さて我々の食卓にはもう一人の男が加わっていた。この男の手は食卓の上の親善使節であった。

- 1) ジャーヒズ al-Jāhiz: ジャーヒズとは諱名であって、「目が突き出た者、出目」の意味。彼の風貌から由来する諱名であった。本名は ‘Amr ibn Bahr al-Kinānī al-Laythī (775 ~ 868)。黒人の血を引くが、根っからのバサラッ子。学問に励み、また理性を重んじた。博学で多数の書物を残すが、現存するのは三点のみ：『動物の書』、『説明と証明の書』、『けちんば共』であるが、これらだけでも、彼の蘊蓄と文才の程が窺える。
- 2) 預言者から伝わる知られたハディース：「集まりや宴会に招かれたら、差し支えない限り応じるように」と教えている。
- 3) クラウ kurā’; 動物、特に羊の屠体の「脛の部分」を言う。次のズィラーウは「腕の部分」を言う。脛の部分には殆んど肉が無く、腕の部分には肉が多いところから、前者は肉が少ない料理、後者は肉がメインの料理ということになる。
- 4) この冒頭段のサジュウ技法への配慮は無し。
- 5) 真っ黒の ḥālik; アラブは色彩 (文様も含めて) に特別な認知構造を持っている。遊牧民出のアラブのことであるから、恐らく家畜への固体認識の必要性がその派生形への意味づけを多様に生んだ背景を持っている。色に基づく決まった語形を持ち、形容詞 af’al を基にその名詞形は fa’al、その動詞形は if’alla という。「黒い」は aswad、「黒さ」は sawād、「黒くなる」iswadda という。ここではさらに色の濃さが激しいものの言い方 (形態素・意味素) として能動分詞形の fa’il があることが分かる。しかも語根から別であることも注意を引く：aswad (黒い) → ḥālik (真っ黒な)、abyad (白い) → nāṣī’ (真っ白な)、ahmar (赤い) → qānī (真っ赤な)、aṣfar (黄色い) → faqī’ (真っ黄な) など、下線部参照。
- 6) ここまでのサジュウの語は下線順に：bisātu-hā、anmātu-hā、simātu-hā / makhḍūdin、mandūdin、mafṣūdin、‘ūdin / ḥiyāḍu-hu、riyāḍu-hu / jifānu-hu、alwānu-hu / nāṣī’un、faqī’un。

その手は色とりどりの料理のある方向に旅を続け、一品一品の表面の最上部を掴んでいたし、深皿の目(=中心部)を抉り出して、果ては隣り(隣席)の領土の面倒もみる始末であった。盛皿のあちこちを飛び回ることに、チェス盤上のルーク⁷⁾(城将)の如くであった。口の中に一口一口と放り込み、一呑み一呑みと咽喉を掘り下げるに忙しかった。そうであったから彼は沈黙したまま、ひとことも言葉を発しなかった。我々も閑談しながら食べていたのだが、たまたま話題が文豪アル・ジャーヒズのこと、彼の談義に及んだ。またイブン・ムカッファウ⁸⁾のこと、彼の鋭い舌峰に及んだ。我々の議論は(再び戻って)最初の話題で、食卓の最後を飾ることになった。というのも(話題の中心が)その場を離れることになったからである。ところがその男が我々に声を掛けてきた、「あんたの方が論じ合っていた話題の展開はどうなったのかね？」⁹⁾。

そこで我々はアル・ジャーヒズのこと及び彼の弁舌について、弁証術における見事な技法と彼のスナ(常套的手法)、および我々の彼に関する知りうる情報について掻い摘まんで話した。するとこの人物が、「どの領域にもその道の達人という者が居るもの、どんな状況にもそれに相応しい格言があるもの、またどんな家にも住民は居るものだし、どんな時代にもジャーヒズは居るものだ。詳しく調べさえすれば今まで抱いていた観念が誤りであったことが分かるはず」と言うではないか。さあ大変、彼に対して一座の者すべてが否定の犬歯を剥き出しにし、軽蔑の鼻を突き上げたものである。私も嘲りの笑いを見せたものの、彼の内に秘めたものを引き出したかった。そこで彼に声を掛けた、「あなたの持論を我々に開示してください、もっと詳しく！」¹⁰⁾。

男は弁じ始めた、「ジャーヒズは確かに修辞の一方(散文)では結実を見せた、だが他方(韻文)では足踏み状態であった。修辞の達人とは散文を物するにいささかの短所も見当たらず、その述べんとするところを韻文で編むことに過不足なく表現できる者のことです。じゃあ、諸君に訊ねますが、ジャーヒズが素晴らしい詩作をしたと考える人がいますか?」。一同は、「いいえ」と答えた。男は続けた、「ではジャーヒズの散文について考えて見ましょう。彼は比喩の使用には疎く、隠喩は少ないし、極めて直接表現に近いものです。彼が使用するのは素裸の語法だと評し得ましょうし、彼が疎かにしていたのは婉曲な語法であってそれを避けて通ったと言えましょう。じゃあ、皆さんに訊ねますが、ジャーヒズが技巧的な語法をしたとか、既に周知である以外の新奇な語法を用いたというようなことを聞き及んだ方はおいでかな?」。一同は、「いいえ」と答えた。(さらに私のほうを向いて)彼は続けた、「ではジャーヒズの名言を聞きたくはありませんか、(皆さんの代表としての)あなたの双肩に担った責任感を軽減するためにも、手の中に握るもの(=代償として手渡そうとする物品や金貨)を明らかにするためにも?」。受けた私も、「ええ是非とも!」と応じた。すると彼は、「それではあなたの小指を開いて下さらんか¹¹⁾、そうすることであなたへの感謝の念

7) ルーク rukhkh: チェスの城将であり、将棋の飛車に当る。チェスは、古代インドで生まれ、チャトランガと呼ばれていた。イランに伝わり、シャトランジとなり、ササン朝下流行した。イスラム時代になるとペルシャ語そのままのシャトランジ shatranj としてアラブ世界にも広く親しまれた。西洋にはアラブから伝わっている。大駒とされるルーク rook の語源は、アラビア語のルッフ rukhkh である。およそ 14 世紀ごろ西欧語に借用されたことが判明している。ルッフとはフェニックスや鳳凰とも比肩されている「ルッフ鳥」のことで、神秘性、秘力を持つ巨鳥と信じられている。チェス、ルークの語が本話に登場している事実は、アラブ・イスラム世界では 10 世紀には一般化していることを示す証拠となる。多分イスラム時代以前からアラビア半島北東部でも都市を中心に行なわれていたと推定されるが。

8) イブン・ムカッファウ Ibn al-Muqaffa': 学識高いマニ教僧の家柄。ムスリムに改宗して文筆で人々を教導する。サンスクリットの原典ビドバイ寓話をパフレヴィ語からアラビア語に『カリラとデイムナ』として翻訳紹介し、いわゆる「鏡もの」の先駆となった功績は大きい。イスラムの枠内に収まらない彼の思想はザンダカ(異端思想)として糾弾され、公開処刑された(760 年ごろ)。

9) ここまでのサジュウの語は下線順に: khiwāni, alwāni / rughfāni, jifāni, jirāni / qas'ati, ruq'ati / luqmata, midghata / khiṭābati-hi, dharābati-hi / khiwāni, makāni。

10) ここまでのサジュウの語は下線順に: lasani-hi, sanani-hi, sunani-hi / rijālun, maqālun / intaqadtum, i'taqadtum / inkāri, ikbāri。

11) あなたの小指を開いて下さらんか fa-atliq li 'an khinsiri-ka: 「拘り無く、施しを成せ」の義。アラブの数え方の仕

が「いっそう増しましょうから」と注文してきた。そこで私は手持ちのリダーウ（^{うちかけ}打掛）を手渡した¹²⁾。と、彼は詠唱を始めたのだ；

己の着物我に覆い掛けなされた このお方の生命に誓って申し上げる

la-‘amru lladhī alqā ‘alay-ya thiyāba-hu

彼のその行為で満ちみてる この着物より発する榮譽の輝きが

la-qad ḥushiyat tilka th-thiyābu bi-hi majdā

この若者^{ひろ}心寛大^きき方より勝ち得しもの 彼の着用せるリダーウをば

fatān qamarat-hu l-mukramātu ridā’a-hu

キドゥフ¹³⁾で抽選^{ひき}当てたものに非ず またナルド¹⁴⁾賽子^{さいこ}で

目が出たものに非ず

wa-mā ḍarabat qidḥan wa-lā naṣabat nardā

我に己の衣与えし者よ 再度のお目を掛けられたし

a‘id nazarān yā man ḥabā-nī thiyāba-hu

我を^{おとし}貶めますな 今までのものがき苦しむ辛き日々の中に

wa-lā tada‘i l-ayyāma tahdimu-nī haddā

されば告げて欲しきもの 「旅するなら早朝^{よし}に出立するが吉と

wa-qul li-l-ūlā in asfarū asfarū ḍuḥan

暗闇のなか^{よし}に出行かんとせば サアド星¹⁵⁾と共に出立するが吉と

wa-in ṭala‘ū fī ghummatin ṭala‘ū sa‘dā

地位高き者とその血縁^{たも}を維持つべし 彼らの舌を湿らせておく¹⁶⁾ べし」と。

ṣilū raḥima l-‘ulyā wa-bullū lahāta-hā

最善なる人とはその舌を通して ^も現金^のが露となって降り落ちてくる人ぞ

fā-khayru n-nadā mā saḥḥa wābilu-hu naqdā

(詩型 タウイール ṭawīl 調 dāliyya d 脚韻子音詩)

イーサー・イブン・ヒシャームは語り続けた：一座の人々は救い出すようにして彼の許に寄って、差し出せる限りの物を彼の^上に降り注いだ。こうしてお互いに親しくなった後で、(彼の納得行く解説を聞き終えた後で) 私は尋ねた、「この満月 (= 傑人) の出所は何処なのでしょう?」。こ

草から由来。十までの数え方で、左掌を開き、右手で小指から親指まで順次折り畳んでゆく。六からは折り畳んだ親指から順次押し開いてゆき、最後の十は小指が開かされる。「小指」が最後に当る所から「握った拳 (= 得たものを離さない、優柔不断、けち) に最後に抵抗するもの」の意味に比喩化された。

12) ここまでのサジュウの語は下線順に: yaqtifu, yaqif / nathri-hi, shi'ri-hi / ishārāti, isti'ārāti, 'ibārāti / yasta'milu-hu, yuhmilu-hu / maṣnū'atan, masmū'atan / mankabay-ka, yaday-ka / khinṣiri-ka, shukri-ka。

13) キドゥフ qidḥ: 笹竹に似た形の賭け事。キマール qimār と言って、複数のキドゥフ (鏝を取り除いた矢の胴) を用いて、当たり矢には端に印をつけ、外れ矢は無印のまま。外れ矢を引いた者が賭け徳の代金を払う。イスラーム期以前からあったアラブの娯楽。

14) ナルド nard: さいころを用いた陣取り遊び。今日のターウラ ṭawula。

15) サアド星 sa'd: この名を持つ星ないし星座は多い。二十八星宿 (アラブの太陽暦) の中にも第二十二宿から二十五宿までこの名を持つ連接語が続く。これらの星宿のナウ (星宿) はサアド (幸せ) の名の通り、乾燥した世界に慈雨をもたらすので喜びを持って迎えられた。

16) 舌を湿らせておく balla lahāt: 直義は「口蓋を湿らす」。湿り気は水と通じ、物惜しみしない、寛大さを暗示する。一方「乾き」は上述の手の「握り」と同じく、容易には手放さないことから、ケチ・しみつたれと通じている。

の問いに彼は次のような韻文で答えた：¹⁷⁾

わが住まいはアレキサンドリア

iskandariyyatu dārī

そこに安住出来ればの話だが

law qarra fī-hā qarārī

されど浮き寝の身さすらうは 夜はナジュド¹⁸⁾ か

lākinna laylī bi-najdin

明くる昼は西の方^{かた}ヒジャーズか

wa-bi-l-hijāzi nahārī

(詩型 ムジュタッス mujtathth 調 rā'iyya r 脚韻子音詩)

第15話 ジャーヒズのマカーマ 完

第15話 訳者解説

本話は題名からして挑戦的である。マカーマの表題は普通アラブの知りうるどこぞの地名が選ばれる。ところが本話は人名から採られているのである。この挑戦的表題は、名実とも、すなわち内容を違わず、それを主題としている点、好意的に評価できよう。

また本話は短いながらも、おそらく著者の目指したであろうマカーマの体裁は整っていると言えるのではないか。登場人物、仕掛けの場、仕掛けの術、盛り上げにおける詩の引用、稼ぎ、など。詩の導入は、作者アル・ハマザーニーには珍しく三箇所あり、導入部、本舞台の盛り上げ部、正体暴露する裏舞台締めくくり部とに配されている。また盛り上げ部五詩行は相手の寛大さを讃えて布施を訴える部分であるが各行が長いことも珍しい。

語り手と主人公が上手く配され、コロスとしての語り手イーサー・イブン・ヒシャームの名は定型に近い冒頭と締め括りの部分に配され、口上を述べている。主人公アレキサンドリア出のアブル・ファトフ師の名は本舞台では直接記されていないが、同じ食卓を囲む恥も外見も無く大食らいの一員として登場させている。最後の名乗りの部分で、「わが住まいはアレキサンドリア」と言わしめており、それが主人公名であることの証となっている。マカーマ、即ち仕掛けの場は招かれた婚宴の場で、仕掛けた対象は語り手を含めた教養人達である。そして仕掛けの術は、アラブ世界内部の古典の教養が無ければ、異世界に住む我々だけでなく、庶民や教養のない人間には、理解できない「知の土俵」に持ち込んでの一件ということになる。

本話の聞かせどころはジャーヒズについての、韻文修辭に習熟していたのかどうかの、いわば作家論、その文体論である。従ってジャーヒズの人となり、その作品を読んで知識を持っていなければ、仲間となれないし、主人公の批評にも讃嘆は出来ないはずだ。九世紀バスラの文人のことを、時代も地域も隔たった十一世紀のアジャム（非アラブの）世界の婚宴の席で招待者たちが論じ合っているのである。いかにイスラム世界の知識階級・教養人達のレヴェルが高いかが窺えようし、また主人公にジャーヒズの作家論・作品論を批評させるほどに、作者アル・ハマザーニー^{あらかじ}の予めのジャーヒズ研究が行き届いていたか、その底力を思い知らされる作品となっている。

17) ここまでのサジュウの語は下線の一對のみ：ilay-hi、'alay-hi。

18) ナジュド Najd；アラビア半島の中央西寄りの高原。現サウディアラビアの首都リヤードもその一部。次の地名ヒジャーズ Hijāz は半島西岸メッカ・メディナの両聖地を擁す地域。

ジャーヒズは注1に記したごとく多作で、文章が平易である。わが国では「けちんぼ共」が前嶋信二訳で邦訳されており、その一端を読み取ることが出来る。訳者も動物生態学、民族動物学、遊牧民文化を研究分野の一つにしている関係上、ジャーヒズの『動物の書』*Kitāb al-Hayawān* 七巻本に親しんでいる。しかしそのジャーヒズがこのような面から批評されるとは!? 確かに修辞を効かした韻文にはお目にかかった記憶はない。しかしジャーヒズはどちらかといえば、その主義・主張を該博な知識、蘊蓄を傾けた内容で説得する素晴らしさにこそある。逆に言えば例証を多用し主張や訴えを通す作家であってみれば、それら抜きにして文芸の俎上に載せられてしまったら、韻文の形式、語句の修辞などに関しては本話に出てくるような批判に晒されることもありえよう。理性を重んじたジャーヒズは、当時その潮流でもあったムウタジラ思想を是として、自らもその一派であるジャーヒジッヤ(ジャーヒズ主義)を起こしたとも言われるほどであった。

それにしても、語り手を含めた一座の教養人の聞きたかったジャーヒズの批評を行ってはいないのである。本文は「こうしてお互いに親しくなった後で、私は尋ねた、「この満月(=傑人)の出所は何処なのでしょう?」で終わっている。以下はジャーヒズのことは本文では出て来ないのだ。そこで訳者は仕方なく「こうしてお互いに親しくなった後で、(彼の納得行く解説を聞き終えた後で)私は尋ねた、「この満月(=傑人)の出所は何処なのでしょう?」と、括弧で補足せざるを得なくなったことを断わっておく。

写本の異同であるが、この第15話は、Paris写本では前話に続く第4話に、Fātiḥ写本では第14話に、Aya Sofya写本では第19話に配されている。また本話の標題もParis写本ではmaqāma al-walīma(祝宴のマカーマ)とされている。